元年　人間史
蝸牛と蛙、蛙人の合唱、才色計
愛の力（ハリコトならず）
沈黙五年

野の聲

中澤臨川
小島酒風　共著

文庫14
121
1

目次

見返恋盲ひの恋……臨川
秋音郷音……西風
ヴィナスの死……臨川
燈台（ドーデ）……西風
精舎論（ユーゴー）……臨川
嬢さま……西風
恋……臨川
蹴躓情偈詩……臨川
月のひかへ……西風
女人創造……臨川
散文詩……臨川
なき母……臨川
キーツ……西風
鈴の音……西風
ホーム錄……西風
散文詩（ツルゲーネフ）……臨川
セダン回顧（ユーゴー）……臨川
青海原と新禄（レヤトーブリアン）……西風
讀者讀（明治詩人と自然）……一代の大弊……新人となりて新衣
なつけよ……現代文士の立脚地……科学と文学……婦人問題……
点描とはいのち……人生の興味……家庭論……回想記……臨川
二大悲劇詩人……西風
ポール、エ、ヴェルレーヌ……臨川

流れ[illegible]　一　一　一

ヴィナスの死

臨川
中澤臨川

ピエル、バナンは奔放の狂人にあらず。時に黯然として消魂の淵に沈むよとみれば、忽ち歡喜の天にあまがけるやうなる病の發作こそあれ、彼は誠に柔和の化身なり。折ふしは瞳を壁にこらしてモデル寫すやうなるそぶりすることあり。折ふしはまた手眞似の畫筆抛ちて、身を床上に委ね、偏にある面影の前に拜跪して胸裂けたらん如くすゝり泣きす。さて聲も途切れて呼ぶなりけり、ロセットよ覺めずや、ヴィーナスは逝きぬ、我が業既に了れり、覺めずやロセットと。

ロセットは覺めざりけん、その聲のいよ〳〵迫り、其調のいよ〳〵訴ふる如きにもしるし。いにけん戀を嘆き悶えて意中の人の再びこの世に覺めんことを願へるあはれさ。時に見よ、やさしきは彼が失望の狂亂なり、哀憤やまず、我と髪かきむしりつゝ叫ぶを聞けば、あらず、あらず、彼女は未だ死せず、ヴィーナスは逝きぬ、されどロセットはながらへたり、早くこの世に立ち歸らずや、我ロセットの君と。

あはれや未だうら若きこの青年は不治の狂癲にかゝりぬ。

彼は畫家なりき、されど一つの作あるのみ、而も彼をして一躍大家の列に入らしめ、ものはげにこの作なり。『ヴィーナスの死』は萬人の嘆稱を博せり、慌惚として眺め入れる群集引きも切らず、畫前は常に人の山を築きつ。入神の絶技眞に生けるが如し、あらず寧ろ眞に死せるが如し。幾よろづ代彼女が絹の如き圓圓の中に世界をつゝみし女神が末期の苦痛をまのあたり見るらんやうに人々戰のき慄ぬ。この畫に關してあはれなる一條の物語あり。畫は爲めに數段の光彩を增し、あらき、やさしき幾千の眼をして時ならざるに露を帶びしめ、人々が誠ある同情を牽きぬ。ラタン街に數は多き同窓の中にもピエルは絶倫の天惠を持てり。いでや世にもめでたき一傑作を成し了せんかなとは彼が平生の望なりき。一念こゝに向ひて彼はたゞ努めにつとめぬ。それこれ心に協はで煙と化したる畫絹の丈も幾丈にか上りけむ、彼の夢は常に其傑作の上にのみ向ふなりき。漸くにして一道の光明は彼に來りぬ。

古よりヴィーナスの誕生は幾多畫人の心を牽けり、されど未だ何人もこの女神の死に思ひ到れるはなし。萬人の心に愛を吹き込むと言ふなる女神の誕生や、さま〳〵の動作のかくまでに麗はしく、かくまでに人を動かす力あらば、なぞ其死の獨り顧みられずと言ふ理あらんや、待て、我筆

そを爲し給しふや。

「さなり、姿は嬉しかるべし。御身を幸福にし、成功させまいらすべし。されど猶更に。」

畫工は處女のやさしきまなざしを逸しぬ。よし彼はそを見たらんにも心には留めざりけむ。ピエル、「ロセットよいかなれば君はかゝる事爲さんとはするや。」……

「藝術のためにこそ。」笑みつゝ處女は答ふるなりけり。

ロセットは立ちぬ。生命の血の滾々として紅を流せる前に、天才の狂熱全身に燃へて、ピエルは彼の筆を揮ひつ。彷彿として花の如き面を滑べれる死相の影を捕へたり。刻一刻其影は暗くなりまさりて、肉は顫ひ、汗は流れぬ。兩眼には言ふべからざる滿足の光滿ちて、かすかに死のまなざしを窺ひうべく、生命の火遠く去りぬ。蒼白の色は健康の花にかはれり。畫工は總てを寫して餘す所なし。今や冷靜なる死相は明かに畫絹の面より涌き出でぬ。一たび彼の傑作なり。

彼はいとしき死骸を兩手に抱き、慟哭して悔い悲めども及ばず。追慕の情のいとせめては執迷の境に陷り、あはれ覺めよと生なき土塊を撫して祈るなりき。

今も猶彼は叫べり、ロセットよ覺めずや、ヴィーナスは逝きぬと。日頃望みし功名の獲られし事をも、彼が傑作の藝術界の嘆稱をかひ得し事をも彼は全く知らざるなり。恐らくば永久に知る時なからん。彼の思は萬事を忘れて、常にロセットの上にのみあればなり。

（本年四月發行、雜誌 Great Pictures 所載、Phidias La Fontaine 氏作）

を揮つて末期の苦痛の中にたとしへなき美を見せん。凡そこの世を住みよくも、うるはしくも、樂しくもするわらゆる物の死恨と云ふ死恨は皆我が畫絹に上さでは已まじ。濕ふ眉、かすめる眼、あはれの姿、しまれる筋骨。あゝさなり『ゾリダ、モル』の如く麗はしかるべし。我が不朽の名も茲にあり。

さはれ何處にかモデル求めん。筆とりてかず試みしかど一人として彼の興趣を湧き起すやうなるはなく、皆彼の夢に協はで已みつ。既にしてロセットは來れり、わだつみの泡の中より生れ出でけん女神の面影。

「わが友、君はモデルに雇はれんと望み給ふか、されど君の如きは幽暗なる我が畫に適せず、余りにも生き生きと、よろこばしげに、麗はしき君かな、如何せん、花は死を現はす能はず。」

「試み玉へ。」ロセットの答はたゞこれなりき。

かくしてロセットはピエルの爲めに雇はれぬ。彼女はこの世に孤兒なりき。いかに痛ましき半世なりしよ、處女の嬌羞を強いて抑へてモデルの女に雇はれんとまでには、そも幾千行の紅涙か流されけん。妾は恐らく羞ぢ死ぬべし。あゝ、よしさらば、この世の苦惱もやがて終らん。」

ためためしくも。ピエルは其モデルに對してはたらけり。

筆に從て畫は次第にならんとす、行く〳〵畫絹の上に現はれ來る已れの像を眺めては、流石にはゝえまれつゝ、ロセットは畫架の前に立ちて彼の所作を稱ふるなりき。哀れなるかなロセット、彼れはまだ生れて戀と言ふものを知らざりしが、今こゝに立ちて、畫き、畫き且畫ける若き畫工を眺むるまにいつしかそは來れり。やさしき光は彼女の眼に燃え初めぬ、されども彼は知らざるなり。唯認めぬ、彼のモデルの日にけに麗はしくのみなりもてきて、一線一線彼の畫絹に上るを。やさしきまなざし、可憐の姿、さては臆したる嬌羞まで一々描かれずと言ふことなし。何者の業なればこそ、しかく彼のモデルに變化を與ふるや、彼問ふの暇なし、彼の心はえて觸るべからず、頭に充てるは唯死の幻影のみ。

一日、彼は終に絶望の姿にて其筆を投じぬ。

「ロセットよ、萬事終れり。我筆は余り活氣に滿てり。ヴィーナスは死を欲せず、また死ぬ能はず。功名は遠し雖し。ロセット、君はヴィーナスの誕生に向ひてこそ誠にてよなきモデルなれ、其死には[illegible]。」

ピエルの君を處女は彼の肩に柔き手をかけて「妾はよく死に擬するを得べけんなり、其時御身はそを畫絹の上に描きうべし。何事かあるべき、みそなはせ。」かく言ひつゝ處

女は麗はしき手を擧げて脈搏つ動脈を示しぬ。「決して決して妾は痛を覺えざるべし、小さき傷口つくらば生命の血流れ出でなん。その血の流るゝ間、御身は妾が顏の上に死相を捕へ給はん。さて御身滿足し給ひし後。さなり何事かあるべき、流れ止めんは易からずや。」

ピエルは首を垂れて深き思に沈みぬ。「君は能く我が爲めにそを爲し給しふや。」

「さなり、妾は嬉しかるべし。御身を幸福にし、成功させまいらす[illegible]は猶更に。」

畫工は處女のやさしきまなざしを逸しぬ。よし彼はそを見たらんにも心には留めざりけむ。ピエル、「ロセットよいかなれば君はかゝる事爲さんとはするや。」……

「藝術のためにこそ。」笑みつゝ處女は答ふるなりけり。

ロセットは立ちぬ。生命の血の滾々として紅を流せる前に、天才の狂熱全身に燃へて、ピエルは彼の筆を揮ひつゝ、彷彿として花の如き面を滑べれる死相の影を捕へたり。刻一刻其影は暗くなりまさりて、肉は顫ひ、汗は流れぬ。兩眼には言ふべからざる滿足の光滿ちて、かすかに死のまなざしを窺ひうべく、生命の火遠く去りぬ。蒼白の色は健康の花の前に雀躍して、ピールは再び筆を採れり、最後の呼吸をだに逃さじとなり。あはれや低く媚ぶる其息の音よ、夜の鳩のやさしき羽ばたきの如く彼の耳に達しぬ。

畫は成れり、已れの創作に深くみとれて彼は其モデルを忘れぬ。忽然として慌てふためき處女の側に走りよれば、冷に靜かなり。流れ盡して血脈空し。ヴィーナスは逝にけるなり。

彼はいとしき死骸を兩手に抱き、慟哭して悔い悲めども及ばず。追慕の情のいとせめては執迷の境に陷り、あはれ覺めよと生なき土塊を撫して祈るなりき。

今も猶彼は叫べり、ロセットよ覺めずや、ヴィーナスは逝きぬと。日頃望みし功名の獲られし事をも、彼が傑作の藝術界の嘆稱をかひ得し事をも彼は全く知らざるなり。恐らく永久に知る時なからん。彼の思は萬事を忘れて、常にロセットの上にあればなり。

（本年四月發行、雜誌 Great Pictures 所載、Phidias La Fontaine 氏作）

さはれ何處にかモデル求めん、筆をとりてかず試みしかど一人として彼の興趣を[illegible]き起すやうなるはなく、皆彼の夢に協はで已みつ。既にしてロセットは來れり、わだつみの泡の中より生れ出でけん女神の面影。

「わが友、君はモデルに雇はれんと望み給ふか、されど君の如きは幽暗なる我が畫に適せず、余りにも生き生きと、よろこばしげに、麗はしき君かな、如何せん、花は死を現はす能はず。」

「試み玉へ。」ロセットの答はたゞこれなりき。

かくしてロセットはピエルの爲めに雇はれぬ。彼女はこの世に孤兒なりき。いかに痛ましき半世なりしよ、處女の嬌羞を强いて抑へてモデルの女に雇はれんとまでには、そも幾千行の紅涙か流されけん。「妾は恐らく羞ぢ死ぬべし。あゝ、よしさらば、この世の苦惱もやがて終らん。」

ロセットは其モデルに對してはたらけり。

然る初めぬ、されども彼は知らざるなり。唯認めぬ、彼のモデルの日にけに麗はしくのみなりもてきて一線一線彼の畫絹に上るを。やさしきまなざし、可憐の姿、さては臆したる嬌羞まで一々描かれずと言ふことなし。何者の業なればこそ、しかく彼のモデルに變化を與ふるや、彼問ふの暇なし、彼の心はえて觸るべからず、頭に充てるは唯死の幻影のみ。

一日、彼は終に絶望の姿にて其筆を投じぬ。

「ロセットよ、萬事終れり、我筆は余り活氣に滿てり。ヴィーナスは死を欲せず、また死ぬ能はず。功名は遠し雖し。ロセット、君はヴィーナスの誕生に向ひてこそ誠にこよなきモデルなれ、其死には[illegible]進せず。むくべくもなし」

ピエルの君を處女は彼の肩に柔き手をかけて「妾はよく死に擬するを得べけんなり、其時御身はそを畫絹の上に描きうべし。何事かあるべき、みそなはせ。」かく言ひつゝ處女は麗はしき手を擧げて脈膊つ動脈を示しぬ。「決して決して妾は痛を覺えざるべし、小さき傷口つくらば生命の血流れ出でなん。その血の流るゝ間は、御身は妾が顏の上に死相を捕へ給はん。さて御身滿足し給ひし後。さなり何事かあるべき、流れ止めんは易からずや。」

ピエルは首を垂れて深き思に沈みぬ。「君は能く我が爲めにそを爲し給しふや。」

「さなり、妾は嬉しかるべし。御身を幸福にし、成功させまいらすべ[illegible]ば猶更に。」

畫工は處女のやさしきまなざしを逸しぬ。よし彼はそを見たらんにも心には留めざりけむ。ピエル、「ロセットよいかなれば君はかゝる事爲さんとはするや。」……

「藝術のためにこそ。」笑みつゝ處女は答ふるなりけり。

ロセットは立ちぬ。生命の血の滾々として紅を流せる前に、天才の狂熱全身に燃へて、ピエルは彼の筆を揮ひつゝ彷彿として花の如き面を滑べれる死相の影を捕へたり。刻一刻其影は暗くなりまさりて、肉は顫ひ、汗は流れぬ。兩眼には言ふべからざる滿足の光滿ちて、かすかに死のまなざしを窺ひうべく、生命の火遠く去りぬ。蒼白の色は健康の花にかはれり。畫工は總てを寫して餘す所なし。今や冷靜なる死相は明かに畫絹の面より涌き出でぬ。一たび彼の傑作の前に雀躍して、ピールは再び筆を採れり、最後の呼吸をだに逃さじとなり。あはれや低く嫺ぶる其息の音よ、夜の鳩のやさしき羽ばたきの如く彼の耳に達しぬ。

畫は成れり、已れの創作に深くみとれて彼は其モデルを忘れぬ。忽然として慌てふためき處女の側に走りよれば、冷に靜かなり。流れ盡して血脈空し。ヴィーナスは逝にけるなり。

彼はいとしき死骸を兩手に抱き、慟哭して悔い悲めども及ばず。追慕の情のいとせめては耽迷の境に陷り、あはれ覺めよと生なき土塊を撫して祈るなりき。

今も猶彼は叫べり、ロセットよ覺めずや、ヴィーナスは逝きぬと。日頃望みし功名の獲られし事をも、彼が傑作の藝術界の嘆稱をかひ得し事をも彼は全く知らざるなり。恐らくば永久に知る時なからん。彼の思は萬事を忘れて、常にロセットの上にあればなり。

（本年四月發行、雜誌 Great Pictures 所載、Philibias La Fontaine 氏作）

さはれ何處にかモデル求めん、筆とりてかず試みしかど一人として彼の興趣をあき起すやうなるはなく、皆彼の夢に協はで已みつ。既にしてロセットは來れり、わだつみの泡の中より生れ出でけん女神の面影。

「わが友、君はモデルに屈はれんと望み給ふか、されど君の如きは幽暗なる我が書に適せず、余りにも生き生きと、よろこばしげに、麗はしき君かな、如何せん、花は死を現はす能はず。」

「試み玉へ。」ロセットの答はたゞこれなりき。

……この余りと屈はれぬ。彼女はこの

燃え初めぬ、されども彼は知らざるなり。唯認めぬ、彼のモデルの日にけに麗はしくのみなりもてきて一線一線彼の畫絹に上るを。やさしきまなざし、可憐の姿、さては臆したる嬌羞まで一々描かれずと言ふことなし。何者の業なればこそ、しかく彼のモデルに變化を與ふるや、彼問ふの暇なし、彼の心は之て觸るべからず、頭に充てるは唯死の幻影のみ。

一日、彼は終に絶望の姿にて其筆を投じぬ。

「ロセットよ、萬事終れり、我筆は余り活氣に滿てり。ヴィナスは死を欲せず、また死ぬ能はず。功名は遠し雖し。

いざなひ

白　甲

Spritzt einmal vorüacht' ge Funken
Aus den Rosen —— sorge nie!
Diese welt glaubt nicht an Flammen,
Und sie nimmt's für Poesie. —— (Heine)

霞を喫ひ雲を吸ひても、心生くまじき此世、せめて霧降瀧の霧なりと掬ひて永しへの靈魂に飽かしめよとや、生れ落ちし刹那の軟かき頭腦に、夙くも此瀧のかしき憶は刻まれありて、母に別れ父を知らぬこゝらの哀しき年頃、一と日として此山深き岩根に舞ひ昇るしぶきに憧がれぬ宵はあらざりき。今宵も母の命日、例の瀧つ瀬に見ぬ俤を偲ばゝやと、かくは辿り來ぬる少年、七歳の夏より月に一度の數ふれば早や百あまり十夜、彼時のそれを加へなば、かゝなむる小指の損はれぬべく驚しきを、訪つるゝ毎珍らかなる瀧の色は、目かれぬ母の面わの猶ほ懷かしきに似たりや。瀧見のかへさ、口惜しく悲しき運命に弄はれてより、浮名を負ひて此瀧壺に沈みし渠の母は、惻ましきかな處女ながらに母と呼ばれたりき。そを思ひて愁はしからざるにあらねど、立ち昇る飛沫の瞳を潛みて腦に映れば、やがて思象の

母が面影なるぞうれしき。

葡萄色なる黄昏の雲間に宵月の光銀と耀きて、漂霧の如く水烟立ち罩むる遠ちの樹立は紫だちてけぶれり。ふと脚下に紅き物をぞ認めたる。そは鶏の羽もて飾りて水色の布片重ねたる赤き獅子の假面、傍に双子の袖牽き拾ど、色褪せし紅梅の扱帶と、猶ほ一つ萠黄と白と段だら染の睜れば垢じみし一張の猿袴なりけり。紛れもなき今朝のそれ！

驚きて嘆へき答なく、高き梢に梟一聲ホホと笑ひぬ。再び叫べば瀧の靈も息凝らしけむ、一と時ひゝき仄かなり。三度呼ばゝりし時、淋しく凄き人の泣音、しぶきと共に若者の面を襲ひしが、梟の笑に危ぶみし渠は人の泣音を喜びたりき。

水を離れて衣絡ひしは十四といひし少女にて、拭はねば髪も面もひた濡れに濡れたり。玉なす雫しといなる前髪のあたりを月は憐む如く照らして、かつは涙と混りてはた〳〵と滴る一つ一つに潜み、餘る光は痛々しき跳の指端より、脱ぎ捨てし草鞋の飜りし底をかげて綠濃き若草に滑れり。首夏のそゝろ寒き宵、やは肌水に漬けて母の所在知らせ給へと祈りし夢に神あり告げて曰く、此世に亡しと。やさしき心の疑の雲湧かむ空無ければ、早魃の稻穂の如く望は萎

精舍論（ユーゴー）

中澤臨川

（一）

本篇は無限を主人公とし、人間を複主人公とせる一個の戲曲（ドラマ）なり。

吾人は端なく此問題に撞着して、之を細論するの已むを得ざるものあり、故奈何とあれば、時の古今と洋の東西を問はず、偶像教にもせよ、佛教にもせよ、波羅門教にもせよ、乃至基督教にもせよ、寺院精舍あるものは、實に人間が無限に向けたる鏡の一なればなり。

（二）

歷史の光に照すに、寺院精舍の隱遁生涯は、譏彈を免れじ。

一國に其數あまたなるや、寺院精舍は融通の瘤なり、障碍なり。勤勉の中心を要すべき所にある惰慢の源泉なり。寺院社界の一般社會に於けるは、猶藤葛の樫に於けるが如く、腫痣の人體に於けるが如し。彼等の繁榮肥滿は、やがて其國の衰滅なり。寺院精舍が文明の曙に於て、精神的開發に務めて、人の獸性を消耗せしむるに夥しき功果ありしは、明白なる事實なれど、それと俱にまた國民の健全をも損ねたり。殊に其制度漸く弛みて次第に混亂の域に向ひ、終に今日の如き躰たらくとあるや、清淨時代に仰慕すべき凡百の理由は、變じて非難の的となれり。

寺院精舍に隱遁すべき時代は夙く過ぎ去りぬ。近代文明の初期に於てこそ、其進歩に多少の補益もしたれ、最早そが繁盛の時期にあらず。寺院を教化の具として之をみる、十世紀には或は適せん、十五世紀にはいかゞあらん、況んや十九世紀をや。まことや寺院制度と名くる癌腫は、幾世紀間相並んで、歐洲の光明たり、榮譽たりし、卓拔なる伊太利及西班牙の二國民を殘賊して、殆んど骨骸の有樣とあしぬ。幸なる哉、一千七百八拾九年の大膽なる治療法あり、二國與に漸く快癒に向はんとす。

精舍特に今世紀の初期伊太利、墺太利、西班牙に見られし如き舊式の精舍は、中世の結成物中最も悽慘なるものゝ一なり。そこらに見らるゝ庵室は重なる危懼の交叉點なりしなり。所謂加特利教庵は暗き死の光に充ちぬ。

中にも西班牙の精舍こそ、とりわけおどろおどろしけれ、霧充てる穹窿のもと、蔭暗き圓頂額の懷、重々しきバベル流の祭壇ぞ、巨刹（カセドラル）の如く高く幽暗の中に頭を擡ぐある。白色の十字架、鐵鎖によりて所どころ凄冥の間に掛るあり、象牙製りの聖像、赤裸々にして黑壇の枝に吊さるゝあり。

げにこの像よ、血に塗れたる形相の恐ろしくも又嚴めしき哉。財骨荒々しく突き出で、膝蓋皮はなれ、創痕新にして鮮肉を示しぬ。頭上の冠冕は白銀（しろがね）なり、磔刑の釘は黃金（おがね）あり、額上の血はルビーなり、瞼際の涙はダイアモンドなり。このルビーや、このダイアモンドや、眞に濕ひしめるが如く、凄しくも眺められぬ。

更にこの小暗き蔭に列びて號哭する人々を見よ、黑がねの棘荒々しき苔の爲めに其腰を割かれ、小枝の莖に其胸を痛め、不斷の祈禱に其膝傷（ひざ）く。是誰家の子ぞ、問ふを要せず、彼等こそ自ら良婦と信ずる弱性、天使を學ぶ怪物の群あれ。是等可憐の婦女子何事をか思量せりや、あらず。さらば一定の意志を持てりや、否らず。さらば彼等は愛を知れりや、亦あらず。さらば彼等は生きつゝありや、亦復否らず。彼等の神經は骨となり、彼等の骨は石と化しぬ。彼等の被物（かつぎ）は編まれたる夜なり、彼等の息は恐ろしき死の呼吸の如し。この幽淵のうち影の如き一物ありて、彼等を惑はし、彼等を戰かしめぬ。これ實に西班牙古流の精舍の情態なり。この凄其なる信仰の洞を窩巢として、幾多の少女は住ひしなり。また慘あらずや。

（三）

西班牙または西藏にみられし如き寺院制度は文明に對する肺症なり、夭折せしめでは已まじ。一言以て蔽へば、民象殄滅の媒なり。精舍の監禁は人を閹するに同じ、歐洲に於てはこれ一個の刑杖なりき。加之、時に人の良心を戕殘し、宗門命令の下に强逼を加へ、庵室に封建制度を採り、如上の殘忍（むごい）を敢てしぬ。口噤され、腦閉されて、かくみ夥（おび）多の賴みなき人智は、不斷誓願の囹圄のうちに監禁せられしか。女衣の升天祭、生きたる靈魂の葬儀。人試みに思ひみよ、自然退化に之等の個人苦痛を併せ加へて、君がかの人間の發明に係る二殮衣なる、女人の上衣と面帕を見ん時、能く戰慄せざるを得るやと。

然りと雖も哲學にも管せず、進歩にも管せず、炳焉たる十九世紀の火焰のたゞ中、寺院的精神は固執せられ、同時に禁慾主義はこの文明世界を驚異せしむ。かくも老朽したる慣習の已れ長からんとあせり務むるは、例之ば鬢髮に纏はる黴臭の拗執の如く、食はん事を願へる磨魚の口實の如く、壯年の身に着かんとする兒衣の頑愚の如く、生者を抱かんとてもとれる屍骸の撫恤の如し。

（衣は叫んで曰く、「無情ならずや、汝弱小の時我汝を護りしに、何すれぞ今我を棄つる。」）

（魚は叫んで曰く、「我は深き海より來れり。」）

（臭は叫んで曰く、「我も一度は薔薇の香なりき。」）

（稱すら皆消えうせて、唯々旅）

（藥に寢ね、同じ灰に死す。）

るからに彼等は他に爲すことありや。

死骸は叫んで曰く、「我は汝を愛す」。精舍は叫んで曰く、「我汝を教化せり」。是等に對する唯一の答あり、「過古に於ては」と。

かくも死灰の如き事物を限りなく持續し、人間の政府を木乃伊にし、腐爛せる邪說を挽回し、再び神龕を鍍ばめ、再び精舍を塗り、再び聖[illegible]を崇め、再び左道を補理し、再び狂迷を繕ひ、既に摩耗せし拂子に新なる柄を加へ、寺院を復興せんと[illegible]み、寄生虫の增加によりて救世の功を擧げんと信じ、現在に過古を偷揷する如きは何たる怪事ぞや。然れども如是所說に對して辯護の勞を取る者あり。これ等の說客よしや他の事柄に關しては、同じく好箇の思索家たりとも。唯々單純なる處辨を有するのみ。彼等は過古に被らしむるに、謂ふ所の『聖權』、祖先の敬仰、時代づきの威儀、聖傳說乃至正統論なる掩蓋を以てす。猶呼んで曰く「良民それ是を採れ」と。此の如き論理は古代に狎熟し當時の卜者は之を[illegible]用せり、黑色の[illegible]に白墨を摩塗し、さて叫ぶらく「彼女白し」と。

吾人は隨所に敬仰の念を拂はんとす。さればそが既に死灰なることを認諾する以上、過古をも亦愛惜す。然れども、若し過古にして猶生ありと頑守せば、吾人は之を譏彈し、之を殄滅するに努めざるべからず。

損ねたり。殊に其制度漸く弛みて次第に混亂の域に向ひ、謬信と云ひ、執迷と云ひ、僞善と云ひ、邪僻と云ひ、是等の幻影は縱令幻影たりとも、人生に執着す。其影の如き物の中には齒あり、爪あり、我等は是と互に肉薄して、相挑み、相鬪はざるべからず、而して休戰なし。洵に影にしあれは、其頸を扼して大地に拋つことは不可得あるべし。

基督曆十九世紀の午陽に當りて、佛蘭西精舍は、縱令は日に面せる梟群あり。一千七百八十九年、一千八百三十年、乃至一千八百四十八年の大都の眞正面に於て禁慾主義を公開せる精舍庵室は、これ一個の年代錯記なり。常時年代錯記を正して之を抹殺せんと欲せば、唯々我等が主の曆年を綴れば可なり。然りと雖も、吾人の住する時代は決して常時にあらず。

よしさらば譏彈せんかな。

よし譏彈せん哉、されどまた辨別せん哉。眞理の特徵は埒外に逸せざるにあり、何ぞ誇張を要せんや。或物は打破すべし、或物は亮明にすべし、また稽査すべし。偉大なる哉、鄭重にして且肅嚴なる研究の力や。去れば我等をして唯々光の滿すべきものなる火焰を荷はしむる勿れ。

玆に身を十九世記に寘て我等は歐洲にもせよ、亞細亞にもせよ、はた猶太にもせよ、トルコにもせよ、寺院の間逸生涯に反對するものあり。「精舍」と云ふは「沼」と云ふに同じ。彼等の朽敗は明々なり、彼等の停滯は悲慘なり、彼等の醱酵は病毒を國民に傳染す。我等は幾多のファキル、ボンス、サントン、カロヤー、マラブー乃至タラポインが害虫の如く群[illegible]捿せる邦國を想ふ毎に、未だ嘗て戰慄せずばあらず。

論じて玆に至て猶一個の宗教問題の殘存するを見る。その問題たるや頗る神秘の相を持せり。請ふらくば我等をしてしかと其面貌を窺はしめよ。

(四)

人俱に來り俱に住む、何の權ぞ、協同の權によるなり。人戸を閉す、何の權ぞ。萬人皆己の門戸を開閉しうる權によるなり。

人蟄居す、何の權ぞ。去來自在の權によるなり。

さば、籠り隱れて彼等の爲す所奈何。

密々相語り、眼は地上を離れず、是勞せるなり。世を忘れ都を忘れ、娛樂を忘れ、[illegible]、虛榮を忘れ、利益を忘る。着る所は粗末なる羊毛にあらずんば、粗末なる麻布なり。誰一人產を私するものなく、こゝに入れば富める者も貧しきを致す。されば此の窩窠に依怙の沙汰なく、人皆同樣式の髮を被り、同じ衣を纏ひ、同じ黑麵包を食ひ、同じ藁に寢ね、同じ灰に死す。稱すら皆消えうせて、唯々教名に答へ、一切肉體上の門閥を絕て、精神上の眷族を作り、全人類を一家族とみて、貧者を救ひ、疾む者をいたはり、唯僅かに伏從すべき者を定めて、皆「兄弟」なる稱號を以て他を呼べり。

玆に汝は余を止めて言はん「然れども是理想的精舍のことのみ」と。

洵に然り、當にありうべき精舍にて足れり、余は實に其に就て語らんとするあり。

中世を外に寘き、亞細亞を外に置き、渾ての歷史的政教的問題を脫して、玆に哲學的見解に照し、精舍を以て全く自然にして、自ら欲して進みし信徒のみを以て充足するものと假想する時、余は常に之に向て眞面目なる對度をとり、また一點の敬意を拂はざるを得ず。精舍の存する所眞政治の當體あり、眞政治の當體ある所必ず正義あり。精舍は實に「平等、友愛」の乘式なり。何ぞ其自由の偉なる、何ぞ其相の赫々たる。自由は精舍を共和政體に移して應に滿足すべし。

更に一歩を進めんか。

此等四壁の間に住する男女、同じ頭髮をまとひ、同じ[illegible]をなし、互に呼ぶに兄弟姉妹を以てす。是大に可なり。さるからに彼等は他に爲すことありや。

死骸は叫んで曰く、「我は女を愛す」と。精舍は叫んで曰く、

然り。

請ひ問ふ、其事奈何。

彼等は幽闇を眺め、膝まづき且合掌す。

これ抑何の意ぞ。

（五）

彼等は祈禱す。

誰にか。

神に。

神に祈ると云ふ意義奈何。

我等の外部に無限あり。無限は固着なり、恒常なり。必然的に有體なり、故奈何となれば、既に無限なり、されば若し實質を闕かば、是は其意義に於て有限なるべければなり。而してまた必然的に有知なり、故奈何となれば、既に無限なり、されば若し知覺を闕かば、是は其意義に於て有限なるべければなり。生存（エキシステンス）の所思をのみ覺念しうる我等に無限は本體（エッセンス）の所思を賚む。尅實して言へば、無限は絶對にして、我等は雙對なり。

我等の外部に無限あると同時に、我等の内部にも亦無限あり。是等の兩無限（畏るべき複數なる哉）は互に相重疊して、第二無限は第一無限の下に横はり、そが鏡となり、反響となり。他の深淵（アビス）と同心圓を作る一深淵たるものなり。

この第二無限は亦有知にして、思索し、愛慕し、且意念す。既に兩無限にして有知なる限りは、各自一定の主張を持ち、下の無限にも「我」あり、上の無限にも「我」あらざるべからずして、下なる「我」をば靈と言ひ、上なる「我」をば神と言ふ。

思索の道をたどりて、下なる無限を上なる無限に感觸せしむるを「祈」とは言ふなり。

人の心より一物たりとも取り去ることをなす勿れ、强制は惡しき事なり。唯々改善し變容するに止めよ。人心機能のある物は深奥不可測の處に向へり、思索の如き、默想の如き、祈禱の如き是なり。深奥不可測の處とは縱令ば海の如きものなり。良心とは何ぞ、この不可測の海の羅針盤にはあらずや。思索や、默想や、祈禱や、皆この針の奇しくも大なる指示しにはあらずや。さればわれ人之を敬仰すべきは勿論のことなり。抑如是靈性の赫々たる光輝の向ふ處はいづこぞ、影の中なり、即光の側なり。

共和政體の能く大なる所以は、人道の何物をも非認せず、攘斥せざるにあり。人の權に接して、尠くとも其と相隣りて、靈の權存す。

感溺に克ちて無限を畏ると言ふは自然の則（のり）なり。徒に創造樹の下に屈服して、星光爛たるそが分枝の、廣く大なる損ねたり。殊に其制度漸く弛みて次第に混亂の域に向ひ、

をのみ夢みる勿れ。われ人に爲すべき義務あり。人心は開拓せざるべからず、奇蹟に逆て神秘は禦がざるべからず、不可測なるものを尊崇して、荒唐なるものを排せざるべからず、信仰を廓清して、教理の面より迷妄を删去せざるべからず、神の園より害虫を驅除せざるべからず。

（六）

今夫れ祈禮誓願の方法は、内、誠正なる限り、何れとして宜しからざるはなし。君が書を閉じざせよ、而して無限のうちにあれ。

世には無限を貶くる哲學あり。之と同じく、病理學面より種別する時、日輪を貶くる哲學あり、この哲學を盲目とは言ふなり。

世にはまた高名にして有力なる無神論者あり。是等の人も自己の眞勢力に驅られて、いつかは知らず識らず眞理の側にめぐり戻され、事實上全く無神論者なりとは言ひ難し。彼等よし神を信せずとも、設し高才逸足の人たらば、必ず神を徵證せん。

更に驚くべきは、事實に冠らしむるに單なる言詞を以てして、よく心の滿足を贏ちうるの極めて容易なることなり。霧に閉されたる北方の心理學派は「勢力」なる文字に換ふるに「意志」なる文字を以てして、人心の理解力に一革命を遂げ得たりとさへ信せり。

「植物は生成す」と言はずして「植物は意志す」と言ふに加ふるに、「宇宙は意志す」と言ふを以てせば、其義洵に富瞻なるべし。故奈何となれば、植物は意志す、故に「我」あり、宇宙は意志す、故に神ありとは、自然に涌躍すべき推斷なればなり。いかに況んや、此學派の敗けんとする宇宙意志は、この學派の主張せる植物意よりも首肯し易きものなるをや。

無限意志即神を貶くるは、唯た無限を貶くるに依てのみ能くする事をうべし。吾人は既に之を論じぬ。

無限否定は直に虚無説（ニヒリズム）なり、凡百の事物みな「心の幻影」となる。

われ人虚無説と爭ふことは不可得なるべし。故奈何となれば、正統虚無説學者は對話者の存在を疑ひ、剩へ自己の存在すら定かならねばなり。然りと雖も殊に知らんや、唯一「心」字を冕するによりて、彼は自ら否定せし渾てを擧げて、彼我の別なく認諾せんと欲することを。

總之るに凡百の事物をして、一單音「否」なる推斷に歸依せしむる哲學には思想の爲めに、拓かれたる道途なし。

「否」に對すべき唯人の答は「然り（イエス）」あるのみ。

虚無説に標的なし。何の處にか無あらんや、零はこの世

中心の側に赴く。

性急にして思慮を缺ける儕輩は曰く、神秘に隣して踞坐せる此等の像は何をかなすや、彼等の目的奈何、彼等の功果奈何と。

アラス！廣汎なる萬物のいかに我等と相涉るやを知らずと雖も、我等を圍み、我等を俟つ幽闇の相前にて、余は次の如く答ふるを難んせず。『恐らくこの世に、より崇高の事業なく、より要用の勞働なし」と。

祈禱者は不祈禱者に向て常に必須なり。

われ惟ふにこの全問題は祈禱に雜へたる思想の多寡に歸すべし。

祈禱せるライブニッツは偉大あり、崇拜せるボルテーアば秀麗なり。

寺院精舍は一個の棄權あり。設へ其方向に於て誤る所ありとも、献身は依然として、献身なり。招かざる誤差を義務とし信ずる中には、一種の偉大なるものありて存す。

理想上より考察を下し、之を以てあらゆる方面に照して、至公十全なるものとなす時、精舍特に尼寺は――故奈何と

庵室生活は例之ば高山の巔の如きか。俯瞰すれば、一方には現世の深淵あり。他方には未來世の深淵あり。精舍なるものは二世界を分つ、狹隘にして霧濃き界線なり。そこには微かなる生命の光、定かならぬ死の光と相雜りて、墳墓の殘照をなせり。

縱令彼等と所信を異にすとも、等しく信仰の杖にすがりて生息する我等は、戰慄し乍ら自恃深く、大神秘の四壁中に住するを敢てして、閉されたる世界と未開の天との間に期待する所あり、未だ昇らざる日陽の方に向ひて、唯そが在所を假想するを唯一の幸福とし、熱望を不可測の深淵に向け、不動の幽闇に眸をこらせる、是等の慊遜にして且偉大なる靈魂を眺むる毎に、未だ嘗て敬虔の畏と、美み滿てる憐憫とに動されずと云ふことなし。

（抄譯）

に存在せず「凡百の物みな或る物なり、無は無のみ。」

人はパンにより生息するよりも、推斷によりて生息するを多しとす。哲學は一個の力たるべし、人類の改善に於てそが目的と功果を發見すべきなり。ソクラテス、アダムに入りて、マルカス、オーレリアスを生せざるべからず。易言すれば、快樂の人より智慧の人を出し、エデンを變じてリシューム とおさざるべからず。科學はよろしく其補藥たるべし。快樂と言ふか、そは拙き目的、憫むに堪えたる慾望のみ。快樂はもと畜生のことなり、靈の眞勝利は思想にあらざるべからず。されば飢餓に換ふるに思想を以てし、越栗幾失兒(エリキシル)として神の觀念を皷吹し、人の心に良心と科學とを親しましめ、此神秘なる雙對によりて、高焉善焉の人を作るは正に眞哲學の領土たるべし。道德は滿開花の眞理なり。默思は實踐の始にして、絶對の眞理は之を躬行に現はさゝるべからず。理想をして人心の空氣たり、飲食たらしめざるべからず。「人々取れ、これ我血なり、我肉なり」と言ひうるものは唯々理想のみ、智慧は聖餐會にはあらずや。

哲學をして好事者流が神秘を眺むる便宜の爲めに、そが上高く築かれたる單なる戍樓たらしむべからず。

進步は名なり、理想は模形なり。

可をか理想と言ふや、曰く神。

理想、絶對、完璧、無限、皆同字義のみ。

(七)

猶數言を費さんか。

我等は奸策詭計の充足せる寺院精舍を呵責し、現世に對して狠嚴刻薄なる教法を侮慢すと雖も、而も隨所に思慮の人を敬せんと欲す。

我等は跪まづく人の前に頓首す。

信仰は必須なり。憐むべし、些の信心なきの徒輩(ともがら)。

默想に耽る人を逸惰なりとはなすなかれ。こゝに可見の勞働あり、かしこに不可見の勞働あり。

默想は勞働なり、思索は事業なり。

拱手能く務め、瞑目能く成し、仰天の凝視能く勞作す。

テール跪座すること四年、彼は哲學を創めぬ。

誰か修道士を以て遊手の人となすや、誰か隱者を以て素餐の徒輩(ともがら)となすや。

幽暗に就て思料を凝すは肅嚴の事項なり。

上來說叙せる所と些の矛盾なく、我等は信ずる事をうべし、墳墓に對する綿々不斷の掛念は生者の固性なりと。此點に關しては、僧侶も哲學者も一致せり。「我等は死せざるべからず」とはラ、トラップの僧がホレースに答ふる所なり。

自己の生涯に雜ゆるに墳墓の影を以てするは賢才の則(のり)にして、また隱者の則なり。この關係より哲人も隱者も共通中心の側に赴く。

性急にして思慮を缺ける儕輩は曰く、神秘に隣して踞坐せる此等の像は何をかなすや、彼等の目的奈何、彼等の功果奈何と。

アラス、廣汎なる萬物のいかに我等と相涉るやを知らずと雖も、我等を圍み、我等を俟つ幽闇の極前(現)にて、余は次の如く答ふるを難んせず。「恐らくこの世に、より崇高の事業なく、より要用の勞働なし」と。

祈禱者は不祈禱者に向て常に必須なり。

われ惟ふにこの全問題は祈禱に雜へたる思想の多寡に歸すべし。

祈禱せるライブニッツは偉大なり、崇拜せるボルテーアは秀麗なり。

寺院精舍は一個の棄權なり。設へ其方向に於て誤る所ありとも、献身は依然として、献身なり。招かざる誤差を義務とし信ずる中には、一種の偉大なるものありて存す。

理想上より考察を下し、之を以てあらゆる方面に照して、至公十全なるものとなす時、精舍特に尼寺は——故奈何となれば、現代の社會制度の下に、最も勞苦を負ふものは婦女子なり、而して庵室てふ追放地には一個の保護備はればなり——疑もなく威嚴をもてり。

庵室生活は例之ば高山の巔の如きか。俯瞰すれば、一方には現世の深淵あり。他方には未來世の深淵あり。精舍なるものは二世界を分つ、狹隘にして霧濃き界線なり。そこには微かなる生命の光、定かならぬ死の光と相雜りて、墳墓の殘照をなせり。

縱令彼等と所信を異にすとも、等しく信仰の杖にすがりて生息する我等は、戰慄し乍ら自恃深く、大神秘の四壁中に住するを敢てして、閉されたる世界と未開の天との間に期待する所あり、未だ昇らざる日陽の方に向ひて、唯そが在所を假想するを唯一の幸福とし、熱望を不可測の深淵に向け、不動の幽闇に眸をこらせる、是等の慊遜にして且偉大なる靈魂を眺むる毎に、末だ嘗て敬虔の畏と、羨み滿てる憐憫とに動されずと云ふことなし。

(杉澤)

望のみ。快樂はむと苦生のことなり。靈の眞勝利は思想に信仰は必須なり。惱むべし、些の信心なきの徒輩。
あらざるべからず。されば飢餓に換ふるに思想を以てし、勞働あり、かしこに不可見の勞働あり。
越栗幾失兒（エリキジル）として神の觀念を皷吹し、人の心に良心と科學 默想は勞働なり、思索は事業なり。
とを親しましめ、此神秘なる雙對によりて、高焉善焉の人 默想に耽る人を逸惰なりとはなすなかれ。こゝに可見の
を作るは正に眞哲學の領土たるべし。道德は滿開花の眞理 拱手能く務め、瞑目能く成し、仰天の凝視能く勞作す。
なり。默思は實踐の始にして、絕對の眞理は之を躬行に現 テール跪座すること四年、彼は哲學を創めぬ。
はさゝるべからず。理想をして人心の空氣たり、飲食たら 誰か修道士を以て遊手の人となすや、誰か隱者を以て素
しめざるべからず。「人々取れ、これ我血なり、我肉なり」 餐の徒輩（ともがら）となすや。
と言ひうるものは唯々理想のみ、智慧は聖餐會にはあらず 幽暗に就て思料を凝すは肅嚴の事項なり。
や。 上來說叙せる所と些の矛盾あく、我等は信ずる事をうべ
哲學をして好事者流が神秘を眺むる便宜の爲めに、そが し、墳墓に對する綿々不斷の掛念は生者の固性なりと。此
上高く築かれたる單なる戍樓たらしむべからず。 點に關しては、僧侶も哲學者も一致せり。「我等は死せざる
進步は名なり、理想は模形なり。 べからず」とはラ、トラップの僧がホレースに答ふる所あ

り。

自己の生涯に雜ゆるに墳墓の影を以てするは賢才の則（のり）にして、また隱者の則なり。この關係より哲人も隱者も共通中心の側に赴く。

性急にして思慮を缺ける儕輩は曰く、神秘に隣して踞坐せる此等の像は何をかなすや、彼等の目的奈何、彼等の功果奈何と。

アラス、廣汎なる萬物のいかに我等と相涉るやを知らずと雖も、我等を圍み、我等を侯つ幽闇の相前（現）にて、余は次の如く答ふるを難んせず。「恐らくこの世に、より崇高の事業なく、より要用の勞働なし」と。

祈禱者は不祈禱者に向て常に必須なり。

われ惟ふにこの全問題は祈禱に雜へたる思想の多寡に歸すべし。

祈禱せるライブニッツは偉大あり、崇拜せるボルテーアは秀麗なり。

寺院精舍は一個の棄權あり。設へ其方向に於て誤る所ありとも、献身は依然として、献身なり。招かざる誤差を義務とし信ずる中には、一種の偉大なるものありて存す。

理想上より考察を下し、之を以てあらゆる方面に照して、至公十全なるものとなす時、精舍特に尼寺は――故奈何となれば、現代の社會制度の下に、最も勞苦を負ふものは婦女子なり、而して庵室てふ追放地には一個の保護備はればなり――疑もなく威嚴をもてり。

庵室生活は例之ば高山の巔の如きか。俯瞰すれば、一方には現世の深淵あり。他方には未來世の深淵あり。精舍なるものは二世界を分つ、狹隘にして霧濃き界線なり。そこには微かなる生命の光、定かあらぬ死の光と相雜りて、墳墓の殘照をなせり。

縱令彼等と所信を異にすとも、等しく信仰の杖にすがりて生息する我等は、戰慄し乍ら自恃深く、大神秘の四壁中に住するを敢てして、閉されたる世界と未開の天との間に期待する所あり、未だ昇らざる日陽の方に向ひて、唯そが在所を假想するを唯一の幸福とし、熱望を不可測の深淵に向け、不動の幽闇に眸をこらせる、是等の慊遜にして且偉大なる靈魂を眺むる毎に、末だ嘗て敬虔の畏と、羨み滿てる憐憫とに動されずと云ふことなし。（抄譯）

君が星を眺むるに二ツの動機あり、そは輝く故に、そは究はめ難き故に、君が傍にはより柔しき光体、より大なる秘密あり――そは女なり。

*

誰にまれ、我等は皆我等の呼吸すべき羅(へから)をもつ。彼等なきは空氣なきなり、我等は窒息して死せんのみ。欠戀の死は恐しきものはなし――そは靈の死なればなり。

*

戀が二人を天使の如き聖き調和に結び融かすとき、人生の秘密は彼等にひらかる。この時彼等はたゞ同じ運命の二項なり、一つの魂(たましひ)の二つの翼なり。戀は飛ぶよ。

*

一人の女君が前を過ぐるとき光を滴(した)たらす日は、君なきなり、君は戀す。この時君はたゞなすべき一事あるのみ。そは彼女をして君を思ふの己むを得ざるに至らしむるまで、熱心彼女を思ふにあり。

*

戀の初むる所のものは唯神によりてのみ完ふせらる。

*

誠の戀は失はれたる手袋よりも、見だされしハンカチフよりも深き失望と深き驚喜にあり。戀はその敬虔と希望のために永遠を要す。戀は同時に無限大と無限小より編みなさる。

*

君もし石ならば磁石たれ、君もし人ならば戀にてあれ。

*

戀を滿足さすべきもの一もあることなし、幸福を得て樂園を望み、樂園を得て天を望む。

*

かたみに戀する二人には何事か欲けたらむ、戀は天の如き幽思をもち、天よりも多くの情愛沿へる歡樂をもつ。

*

戀の情は小兒の如く、よの常のあだし情は小人の如し。人をして小人ならしむる情の上に耻われ、人をして小兒ならしむる情の上に譽われ。

*

現つし世に奇しきものあり、君知るや。我は今常闇の夜にあり、ある人逝きぬ、彼女は天を荷ひて去れり。

*

二人手に手をとりて同じ奥津城に並べられ、常闇の中に靜かに彼女の指を抱かば、我が永遠は滿ち足りなむ。

*

戀は樂園の空氣を吸ふ天上の呼吸なり。

*

深き胸、賢き心は神が造り玉ひし如くこの世を送る。そは長き審問なり、測り知れざる運命（さだめ）の測り知れざる準備なり。この運命は誠のものにして第一歩を墳墓に始む、その時あるもの彼に現はる、彼は有限を思ひそむ。有限！請ふこの語を思へ。生者は無限をみる、有限はたゞ死者にのみ現はる。生きとし生けるものは戀ひ、苦み、望み、思ふ。アゝされど、唯肉體と形と姿容にのみ戀ひあくがれしものは禍ひなる哉。死は彼等より之等の凡てを奪ふ。心を戀ひせよ、君は再びそをうべし。

*

我嘗て途上、戀に落ちたるあはれなるある若者を見ぬ。彼の帽は古り、彼の衣は裂けぬ、時にはそこゝこに穴明け高く天に沖し、恰も高山の頂が麓の震動を感ずる如くに、亂れたる地上の運命（さだめ）を俯瞰す。

*

世の中に戀せし者なくば、かの日輪は消滅せん。

戀故に君惱まば更に戀せよ、戀ひ死ぬは戀に生くるなり。

*

戀てふ十字架の上には明暗の光相混ず。そこには苦痛の中に歡喜あり。

*

ア、鳥の歡びよ、彼等には歌うたふべき巢あればなり。

*

戀は樂園の空氣を吸ふ天上の呼吸なり。

*

深き胸、賢き心は神が造り玉ひし如くこの世を送る。そは長き審問なり、測り知れざる運命の測り知れざる準備なり。この運命は誠のものにして第一歩を墳墓に始ひ、その時あるもの彼に現はる、彼は有限を思ひそむ。有限！請ふこの語を思へ。生者は無限をみる、有限はたゞ死者にのみ現はる。生きとし生けるものは戀ひ、苦み、望み、思ふ。ア、されど、唯肉體と形と姿容にのみ戀ひわくがれしものは禍ひなる哉。死は彼等より之等の凡てを奪ふ。心を戀ひせよ、君は再びそをうべし。

*

我嘗て途上、戀に落ちたるあはれなるある若者を見ぬ。彼の帽は古り、彼の衣は裂けぬ、肘にはそこ〳〵に穴明けり。水は彼の靴を通して入り、星は彼の心を通して入りぬ。

*

愛せらるゝは何等の偉大ぞ、されど愛するは更に何等の偉大ぞ。熱情凝りて、心ヒロイックとなり、渾身これ純潔、渾身これ崇大、汚れたる思想は氷山の上の草はゞにだに存せず。世の常の感情を離へざる氣高くも靜かなる靈魂、雲をこへ、この世の影をこへて暗愚、憎怨、虚飾、不幸の上に高く天に沖し、恰も高山の頂が麓の震動を感ずる如くに、亂れたる地上の運命を俯瞰す。

*

世の中に戀せし者なくば、かの日輪は消滅せん。

痴情偈語

臨川

○若き戀は花に宿る蜂の如し、久しく停るとなし。
○人は驚かされたる神なり、天上の性（たとへば戀の如き）を現ずときには他人に知らるゝを忌む。
○死と雖も戀の不安を醫する能はず、手に手をとりて桂川の淵邊に臨みし梅川忠兵衛、の心の中にも打解ぬ謎は有けん
○戀は其證據を涙の中に求む。
○戀の餌食は涙なり、聖き悲もて飼はれざる戀は乳なき小兒の如く生くる能はず。
○嘗て君を笑はせし女と嘗て君を泣かせし女と孰れか深く君の記憶に殘れるや。
○アラス！、戀は泣くなり、泣きつゝ其鎖を結ぶなり。
○やさしき殘酷は乙女ぞもてる。
○人は戀す、故に人の性はもと善なり。
○遺傳も進化も戀のひそめる心の奥までは犯さず、我は戀す、そこに我は二千年を若やげり。
○且戀し且悲しみうるものは幸なり、人はこの二つの光によらずんば眞理をみる能はず。（ユーゴー）
○戀は[illegible]神[illegible]
○いかなる聖人君子の高き思想も我が愛する乙女の彼女の髪を飾れるリボンに就て談れるさゝやかなる不平にだに及ず
○非收絶艶美人涙、安解俊豪傑士憂。（中野逍遙）
○女の胸に休息所をもたざりし人に未來の眞意義の嘗て解かれしとありや。
○苦酸なる閲歴と、萬解の涙によりて漸くあがない得たる運命の意味を戀は一夜に敎ゆ。
○人の心には二つのうるはしき花あり。他人の爲に濺ぎし涙の雨によりて芽ぐみし者をヒューマニチーと言ひ、己の悲にうながされたる涙の雨に養はれしものを戀と言ふ、前なるは白き花なり、後なるは紅き花なり、ともに好き實を結ぶ
○美は喘ぎなり、戀は喘ぎなり。
○人を滿足せしむる詩は詩にあらず、人を滿足せしむる戀は戀にあらず。
○まことに自然の嘘を聞かんとならば、先づ戀せよ。

○

○我は[illegible]す
故に我は在り

するから、夫を見まいと思つて、手當り次第に本を出して來て見る、すると又折惡く、京ちやんと半分けにしたりボンの栞が出たりするんだらう、庭を見れば民夫の好な金魚が見える、空を眺めてると、不意ッと京ちやんの聲が聞えたり、地を見れば京ちやんの墓標がすぐ眼に浮ぶ、實際僕は堪らん、だから詰らなかつた學校も此頃ちやア早く始まればいゝと思ふ位で、毎日〳〵今日は幾日だ〳〵つて聞くもの丈から、婆やは變な顏して僕を見る、いよ〳〵堪らん。君、もう、九月の五日だ、早く出し來給へ、而して今度は下宿せずに僕の處へ來て呉れ給へな、願ふ。

夫から君が來る時にも一ツ燈籠を賴むよ、形は撰ばない、京ちやんと同し金魚のでも好し、荷物だらうが是非願ふ、京ちやんばかりぢや、民夫が淋しい、幸ひ墓も近しするから、君が來次第、花しく二人で飾つて遣らう、む、京ちやんのも其時一處にしやう、夫迄待つ。伯母は君、今度伯父と一處に行つて、僕が墓守さ。彼の土手に美しい燈籠を點けて此方から見たら、あゝさぞ……しかも隣り合つて二ツ眼立つたらう、美しからう。紐はやつぱり瀧ちやんに縫つて貰つて呉れ給へ、一時も早く出京を待つとる、婆やも君の御出を御待ち申すと云つてるよ、では早くな。失敬。

女人創造

臨川訳
中澤臨川

かしこき婆羅門の學者があらゆる冷笑と諷刺の力もて女人を次位に下し抑えんと務めしに比すれば、近代の我等はなか〳〵かくまでに惡性ならじ。

今日女人は世の事がらにたずさはりて相應しからず高き位置を占めにければ、やがてまた冷笑の的となんとす。まことや女人は嘿して語らず、わめき論らはぬ造化に對してありとある智慧の及物をむけてけり。

そのかみ印度びとは女人に係る特種の存念をもち、また之を口にしてつゆ憚る所なかりき。その中にはまたくふさはしき節ありて、空想の翼を張るに及ばず、我等をしてげにもと點頭かしむ。『月の指』と題したるサンスクリット物語は次の如く女人創造の事を說けり。

造物者ツァシュトリは今將に女人を造らんとする折に望みて、渠ははや男子の創作に多くの品だねを使ひ盡

事を續けぬ。

いかにせまし、我渠女と與に住ふ能はず、さればとてまた渠女無うして住ふ能はざるを。かく男は獨語ちぬ。

我はこの物語を友に示しぬ。その男も嘗ては世の常の失望にこりたる一人なり、渠苦々しき笑を洩して、印度の學者は女人創造に用ひしあらゆる元素を數ふるを忘れたり。渠は當に更格盧の歩みと、駱駝の脊と、鳩の額と、蜥蜴色せる髮に用ゆる藥品とを追加すべかりしなり。造化は確かに女人に伊蘭西流のかゝとをうがたせ、渠女の口の充分に働きうる爲めに、其耳を思ふ存分後ろに附けぬ。而してまた……

嘿せよ、口普惡なる老ひぼれの獨身者と我は遮りつ、恐らく君はいづこにか女人倶樂部にて長の月日を過ご

黑川白川

月の輪

右すれば白川左すれば黒川、阿蘇の烟ぬ末も遙かに故里戀しき夕暮の程、新頃熊龍屋の奥に主婦が煎茶の香しき情を何より御馳走と、今日一日の疲れを忘れてゆがめる〳〵の欄にか、れば、細き流れのそこにもあり、戯れ躍る魚のかず〳〵、赤きも交る群れを選びて四つばかりなる坊一人、愛らしの色つや、

して、些しの固形體をも餘さざるに心付けり。せんすべなくて、とこう打案じたる末、漸く次のようなる仕事にかかりぬ。

月のまるみ、虫のゆがみ、卷鬢のからみ、草葉のそよぎ、蘆のしなひ、花のはゝえみ、木の葉の輕み、象の鼻の尖り、小鹿のまなざし、蜂の群のさゝやき、日の光の樂み、雲の愁しみ、野兎のはにかみ、孔雀の心驕り、鸚鵡の胸毛の柔み、寶石の堅み、密の甘み、虎の殘忍、風の變心、焰の温かみ、石の冷み、懸巣鳥の饒舌、鳩の鳴き聲、鶴の僞善、コキラの操、これ等の物を集めて渠は女人を造り、之を男に與へぬ。

さる程に一週過ぎて男渠に來りて曰ふ、主よ、御身が與へ玉ひしこの生き物は我が世をはかなましむ。渠女は不斷饒舌りまはり、勝え難きまでに戯弄け散らせり。我をば獨り殘すことなく、常につき纏ひて目を放なすひまさへなく、我が時の凡てを奪はでは己まじ。要なき事を言ひつのりて怠けてのみ其日を送れり。とても雙棲の見込なければ、今之を返しまつらんとて來りぬと。

茲に於てツァシュトリよしと[illegible]うべなひて渠女を取りもどしぬ。

かくてまた一週を過しけるが、男渠に來りて申しぬ、主よ、かの生き物を御身に返しまつりてより、我が世は頓に淋しくなりぬ。今こそ思ひ出でぬれ、かくは舞ひつ歌ひつ渠女我を慰めけるは、眼の隅に我をみやりて、我と遊び我に縋りけるは。其聲のいかなればかく物の樂には似たりけん、其膚の見るになどかく美しく、觸るゝに柔かありけん。請ふらくば、再び我にかの生き物を與へ玉へと。

茲に於てツァシュトリよしとうべなひて渠女を返し與へぬ。

さる程に僅か三日を過ぎて來りて曰ふ、主よ、何故とも知る由なけれど。詮ずるに渠女は我に樂みと言はんよりは寧ろ煩惱の種なり。ねぎまつるは再び渠女を納め玉へ。

ツァシュトリ曰ひけるは、嘿せよ去れ、我は以上かまはじ、爾の能ふまゝにいかにとも取り計ひね。男。されど我渠女と與に住ふ能はざるをいかにかせん。シャシュトリ答へて、さらばとて爾はまた渠女無うして住ふ能はざるべしと曰ふ。かくて男に脊を向けて渠の仕事を續けぬ。

いかにせまし、我渠女と與に住ふ能はず、さればとてまた渠女無うして住ふ能はざるを。かく男は獨語ちぬ。

我はこの物語を友に示しぬ。その男も嘗ては世の當の失望にこりたる一人なり、渠苦々しき笑を洩して、印度の學者は女人創造に用ひしあらゆる元素を數ふるを忘れたり。渠は當に更格盧の步みと、駱駝の脊と、鳩の額と、蜥蜴色せる髮に用ゆる藥品とを追加すべかりしなり。造化は確かに女人に伊蘭西流のかゝとをうがたせ、渠女の口の充分に働きうる爲めに、其耳を思ふ存分後ろに附けぬ。而してまた……

嘿せよ、口普惡おき老ひぼれの獨身者と我は遮りつ、恐らく君はいづこにか女人倶樂部にて長の月日を過ごせしおるべし。

友は唯冷笑を洩したるのみ。さて曰ふ、ツェシェトリが女人に與へざりしものにして我其與へられんことを懇望するものは翼なり。さらば渠女は其質に適ひしあなたの國に飛び去るべく、女神的天性の媚に誘はるゝようなりえんものを。

黑川白川

月の輪

右すれば白川左すれば黑川、阿蘇の烟の末も遙かに故里戀しき夕暮の程、新傾城旅籠屋の奥に主婦が煎茶の香しき情を何より欲驅走と、今日一日の疲れを忘れてゆがめる〻の櫛にかゝれば、細き流れのそこにもわりて戯れ躍る魚のかず〻、赤きも交る群れを過ひて四つばかりなる坊一人、愛らしの色やや、

して、些しの固形體をも餘さざるに心付けり。せんすべなくて、とこう打案じたる末、漸く次のような仕事にかかりぬ。

月のまるみ、虫のゆがみ、卷鬟のからみ、草葉のそよぎ、蘆のしなひ、花のほゝえみ、木の葉の輕み、象の鼻の尖り、小鹿のまなざし、蜂の群のさゝやき、日の光の樂み、雲の愁しみ、野兎のはにかみ、孔雀の心驕り、鸚鵡の胸毛の柔み、寶石の堅み、密の甘み、虎の殘忍、風の變心、焰の温かみ、石の冷みみ、懸巣鳥の饒舌、鳩の鳴き聲、鶴の僞善、コキラの操、これ等の物を集めて渠は女人を造り、之を男に與へぬ。

さる程に一週過ぎて男渠に來りて曰ふ、主よ、御身が與へ玉ひしこの生き物は我が世をはかなましむ。渠女は不斷饒舌りまはり、勝え難きまでに戯弄け散らせり。我をば獨り殘すことなく、常につき纏ひて目を放りぬと。

玆に於てツァシュトリよしと■うべなひて渠女を取りもどしぬ。

かくてまた一週を過しけるが、男渠に來りて申しぬ、主よ、かの生き物を御身に返しまつりてより、我が世は頓に淋しくなりぬ。今こそ思ひ出でぬれ、かく〳〵は舞ひつ歌ひつ渠女我を慰めけるは、眼の隅に我をみやりて、我と遊び我に縋りけるは。其聲のいかなればかく物の樂には似たりけん、其膚の見るになどかく美しき、觸るゝに柔かなりけん。請ふらくば、再び我にかの生き物を與へ玉へと。

玆に於てツァシュトリよしとうべなひて渠女を返し與へぬ。

さる程に僅か三日を過ぎて來りて曰ふ、主よ、何故とも知る由なけれど。詮ずるに渠女は我に樂みと言は

肥へたる腕を水に漬て　底なるものを捕らんすると、婿なる男の徒らなるまゝに口惜しくも母は糧なき中にくもまた危かりしが、母なるべし、二十餘りの女　みまかり、父は三里の山奥に炭を燒きて、立ち上る烟房走り寄りて抱き上げつ、無言に含むる戒めの事あり　のかすかなる命ながらふ由、離散のうきめ今見る彼の氣に哀はれなりしか、不圖我れあるに氣づきたらんや　女の顏にも見えて纏ふ衣の破れ綻びたるも道理や。あう恥かし氣に立ち去りたる忘る可くもあらず。旃て立　は會ひても語らんに來よと言ひやれど來らず、然るち入る主婦を捉へて其れと問ひ訂せばなか〳〵に淋し　人知れる覺えなし、人違ひなるべしとのみ、先ほどの稚さまざまる山家の暮　兒を抱きて逃ぐるか如く走り去れりと。誠夢みし心地相逢ふも不思議や、別れて此に十七の春秋、其頃お初　かな、知らずと言ふに答はあらじ、故里を去りて二十とてみめ美くしからぬ女の我れより三つばかり長けた　里の北方、一昔の面かげとゞめ難くも、互みに變はるが、椎の實拾ひ木の子狩りに妙を得たる、なんなる　樣かたちなるを。運命かなしき深山の奥に彼の女も亦に過剩はなくとも此娘ばかりはとさる近所の老媼に嘲　年のすきて老いたりしよ。笑はれて、可笑しくも揚り狂ひしこともありしが、一　夜更けて床に就けども眠らず、又逢はん折も計り知れ家窮乏の餘、負債したかに荷は輕く、たゞ遠き〳〵に　ねば强ひても明朝はと心きめて夜を明かしつ。さて朝落ち行くとのみ、幼な心のさりとて深くはえ記さゞり　餉ども認めんとする折から、昨日の女來れりと言ふ。し。今聞けば正しく其女、老媼の豫言美事外れて子ま　疾く〳〵入れよ、誠聞かまほしき事の甚と多かるに、なしでたる今日の嫁姿、思出なば天晴れ婿ぎみかすむ　稚兒も伴にしてかいざ〳〵と急はしき中の嬉れしみ眼をつゐても見せたかるべきを、流石にさはえなさゞ　や、旭日屋上の山を出でゝ清氣雨降るが如く後庭に落るべき故由あるよし。　つ。

散文詩

臨川

○萬人の母

我等は萬人に共通なる一人の慈母を持てり、そは大地なり。我等現し世の測り知れざる命運の長き審問を終れる後は、皆此慈母の懷に抱かれて靜かなる眠に入るものぞ。之を思へば一石の碩々たるも一草の梟々たるも、何とは知らず有難涙のこぼるゝ心地す。」

タイモン、ネブ、アゼンスは石を抱いて泣きぬ、想ふに其石温かなりけんか。

○夢

夢ばかり奇しきものはなし。

幼き折睦しかりし友の、別れてよりいつか十とせ餘りもふれば、早や全く忘られて如何なる思ひ廻らすとすらなかりし者の、ふと一夜の夢に昔ながらの姿にて現はるゝとあり。書街にて出で遇ひし人の何處の誰なるやも知らず、たまたま胸に刻まれてありしが、不圖その夜の夢に上るとあり。憎からず思ひしものの、さて何と云ふともなくて經ぎ來し人の雨の夜の枕に現はれて夢に泣かるゝとあり。依て想ふに我や今宵誰が夢をか驚かさん、街にて道問はれし老翁が護屋の枕を月と興にや訪はん、故里の弟が罪なき夢の中に入りて小學讀本中の人とやならんあるはまた些のゆかりなき一佳人の夢に上りて我よ今ぞ泣きつゝあるか。奇しきは夢なる哉、そも夢中の因緣ばかり神秘なるものはあらじかし。

○愛神 ウラニアン

愛の神ビナスに二つの神坐あり、その一坐はウラナスの娘母なくして生れたるウラニアン占め給ひ、他の一坐はジュピテルとダイオネの娘パンヂアン占め給へり。愛神パンヂオンに侍べれる愛は世に言ひ做せる普通一般の愛にして、心よりは肉欲に惰愛よりは容貌に執着せる鳥けだものと擇ぶなきものなり。然るに愛神ウラニアンの統べ給へるそれはまたく異り過去、現在、未來の三世に跨りていとも貴きもの、いともかしこきもの、聖く樂しきもの、聖くかなしきもの、クライストの啓みしもの、プラトーのあこがれしもの、この世の凡て、宇宙の凡て、神なり、靈なり、生なり、死なり、最高善こゝにあり、最高美こゝにあり、アヽ一切人生の寶珠は集めてこの女神の溫き御胸に藏み給へり。

女性の生命は愛なりと言へど、男性の生命も亦愛なり。慨むらくば今の世には兩性に通じてウラニアンの神息に呼吸するまことにあざむかざる愛なさことを。

○涙

涙ぞ靜かなるが好けれ。敬仰厚き巡禮が聖都の境を巡るとき、落魄の遊子が、再び故郷の土に足蹈入れし時、父母相思が別の闕をまたぐ時、不幸の嵐の過ぎ去りし後、死の枕に侍んべりし折、我等の涙は雨の如くには落ちぬものぞ。

花は深く咲きて靜に散り、涙は深く痛みて靜かに落つるこそ好けれ。

○秋郊一路

秋野に咲ける千草八千草、其一輪をとりてつくづくと看よ。茲に善あり美あり、茲に悲あり喜あり、茲に神あり命運あり。かく思ひつゝ、そを傍なる小川に投じみよ、その小川を時の流と觀ぜよ、我等はこれ散り浮く一輪の花、淵も瀨もある世ならずや。遠ぎかり行く花の行衛、さては流の末のいかならん。……空の白雲いづこに急ぐ、萩の上風いづこに消ゆる。アヽ秋郊一路の教訓、また豐ならずや。

○坐右銘

爾もし、常に、愛する時と同じ心地にてあらば、爾は天の歡をうくるをうべし。
爾もし、常に死に對する時と同じ心地にてあらば、爾は天の悲を味ふをうべし。
爾もし、常に、星を眺むる時と同じ心地にてあらば、爾は宇宙の美を盡すをうべし。
かくて、毎夕、光淵に洗心して當に問ふべし、今日我はいかなる無窮の事をなしたるかと。

愛

われらの世界は愛の世界なり、われらの天地は愛の天地なり、われらは愛に生れ、愛に活き、愛に死ぬなんことを希望す、母の愛、妻の愛、姉妹の愛、友の愛、これを廣く云へば、人生の愛！愛あるが故に人生に光あり、愛あるが故に人間に涙あり、愛するとき人の心清く、愛するとき人の心平和なり、清けれなき教育は木偶教育なり、愛なき家庭は呼吸せる墳墓なり、愛を解せずして道義を口にする、果して何ものぞ、愛を索めずして利を求むる人生の値何處にか存する。

愛はわれらの權威なり、愛は我等の信仰なり、われら敎へんとするときまづ愛し、われら諭さんとするときまづ愛す、愛の天地を出でずしてわれらは語らじ、愛に立ち、愛に行き、愛に息ふ。界を出でずしてわれらは歩まじ、愛の世

われらは愛の謳歌者なり。

且愛し且哀しみうるものは幸なり、人はこの二つの光によらずんば眞理をみる能はず（ユーゴー）

"Still sad music of humanity" Words worth.

閭村の生活（勞働に深く）

隣川

壁一重距てゝも、朝に夕に、面合せ乍ら物言はず親みの心なきが、都住ひのならひならずや、閭村の生活は之と異り、山川の距ては心のまがきとならず、草莽の荒れたるも情愛の柵たなさず、畑の畔、小田の畦を通路として、人は互に相親しみ、夕げの烟は閑かに空に交り、犬鶏遙かに相應じて、一村一家、天地小山川、人間自然の渾然として相融合せる趣、妙へにも亦深からずや。おほれ我は寒村寂里の夏の夕暮を愛して已まず。

なき母

臨川

母なき子、ある夜の夢に天つ故郷の母を訪ひて、其膝に眠りぬ。

忽ちみる、劍珮さやかに鳴て、南方の紫禁より、帝王の鶴駕、徐々として我方に進み來るを。既にして近づき跪いて曰く、甘い哉、君が母の情や、請ふらくは、一日我をして、君に代て、君が母の子たらしめよ、萬乘の尊位、率土の玉寶、擧げて君に捧げんと。我答て曰く、至尊の帝王、また我を煩す勿れ、君が笏と荆璧と、希くは、君が手に收め玉へ、我はわが母を撰ぶ、我はわが母を愛すと。

母なき子、またの夜の夢に、天つ故郷の母を訪ひて、其膝に眠りぬ。

忽ち見る、金闕の西廂、靜かに玉扃を開いて我方に進むものあり。回顧すれば、天上の仙姫、羞を含んで、側に立てるあり。僅かに玉唇を開いて曰く、妬殺す、君が母の情や、たゞ恨むらくは、覬の飽ならざるを、謙んで、儂が雪膚花顏を捧げて、君が母に呈せんと。我答へて曰く、多謝す、卿が情や、されど、故ざとの園の眺めと、慈母の面わと、變らばいかに淋しからん。我が母の慈愛は、ボルドーの酒なり、ふるくして愈よ甘し、我は我母の醜きを愛すと。

母なき子、次の夜もまた、天つ故郷の母を訪ひて、其膝にねむりぬ。

かすかに柴門を叩いて、慈悲の御聲に、我名を呼び玉ふは、萬能の主にはれはさずや。この星の夜を、露にぞぬれて、わざ〳〵我を訪ひ玉ふは、如何なる福音をか齎し玉へる。夜は高し、天上の秋、立たせ玉はゞ、萩の上風、聖はしき母上の膝に、短き夢をむさぼる身なり、我が母の、熱き涙を頰にうけて、遠き少年の昔を懷ふ身なり。「愛は時に、神よりも大なり」と、ヤコブ、ベーメンの言ひけん、言葉の意味をくみ玉はゞ、涙の谷の罪の子に、せめては、この我儘を免し玉へ。大神よ、今宵我戸は、君の爲めに明けゝえみて、去り玉へり。アヽ萬能の主よ、御身の渾身は、たゞこれ慈悲にてましませり。

母なき子、その次の夜も、夢に天つ故郷の母を訪ひて、其膝に眠りぬ。

高歡の杯、充ち〳〵て、ひたぶるに甘き夢に耽りつゝ、我は幼な兒、母の子守唄の響耳に遠し。兎角して、聖母きま

近事報原稿用紙

近事畫報原稿用紙

神の慈悲と、聖母の愛と、聖朋の賜物なり、われは、我が大なる母に謝す。

母の眞身は、たゞこれ愛にて、敬虔の思をいだかしめ、ハルサレムなる母に謝す。帰の愛は、わかむ、我が大なる母に謝す。我は、夢にこの聖京を巡りて、聖朋の賜物なり、われは、我が大なる母に謝す。

古への涙を語る矢の根や、夢の雪

無花果に失穂の詩を問ふ

雑かむ

詩の神の叫ぶ魂

○

敏遷水にうつるこれおはす佛陀

蓮花の中を釣る遊の浮葉哉

雨の中に綿代の便所哉

夏草の中に一つのぶなる橋を思しけり

蓮の花影の落る池の隈

蓮の花影を風にゆる一指子かな

夏

樓

神の慈悲と、聖母の愛と、聖処女の賜物なり。我は、夢にこの聖景を巡りて、敬虔の思をいたす。大なる母に謝す。

母の清身は、たゞこれ愛にてましませり。

我は、我が子を母に謝す。

聖処女の愛は、無うして、聖明らかに、まだ何の星なり。

我母答へて曰く、詩し主ひ、

我が唯一の星なり、

聖母、愛泣し主ひ、

僕が子は、

僕、卿に送るに、

天上の星の、

最も麗はしきを以てせり。

我母に向ひて、

汝れはかへはめでたき、

詩よりくは、

一日僕に、

彼を貸せ、

卿がらとし子の情の、

近事讃報原稿用紙

散文詩

田舎

（ツルゲーネフ作）

中澤臨川譯

七月晦日、我等が故國露西亞の周邊一千里に亘りて。一帶の紺碧、全き空際に漲りつ、白雲一片悠々として そが上に懸り、半ば漂ひ半ば消え行く、簡雅、温暖：…大氣は新しき乳の如し。

雲雀は聲震はして囀り、野鳩は鵠々と鳴き、燕は音なくして箭の如く馳せ交ひ、馬は嘶きて草を嚙み、犬は穏やかに尾を掉りて吠えず。

烟、牧草の香ぞする、松脂、獸皮などの香ひも、僅かに雜れり、苧は今花の盛りにしてそが重々しく心地よき香を散じたり。

深くして傾きたる谿谷あり、周圍をかこめる柳の並木は大いなる頭を天に、裂けたる幹を地にして樹てり、谿谷を貫きて一條の小川ぞ流れける、いと清く澄みたれば、底の小石もすきて見えぬ、遠きかたには、天と地との境のあたり碧なせる大河の縞をも認めつべし。

谿谷に沿ふて其一側には清楚なる穀物小屋と堅く鎖されたる小倉あり、他の一側には松もて造れる板葺の小家五つ六つ立てり、それもこれも家根の上には鳩の巣の高き杆樹ち、門の口には鐵もて造れる短冠の馬を飾れり、瑕ある硝子の窓板はありとある虹の色に輝き、戸には皆花瓶を描きつ、榻ありて正しく小奇麗に並べられたるが戸毎の前に立てり、低き丘の上には猫達集ひてすき透るやうなる小耳を輕く立て、曬曝す、高く築れたる臺石の側には外室の冷かなる暗みあり。

馬の腹掛引き延べて我はその谿谷の眞端に横はりぬ、あたりは凡て新に刈られたる牧草もて堆くつまれつ、押しつくるやうなる香ぞする、かしこげなる主は藝屋の前にそを擴げつ、照り付くる日の光に僅かは干

さんとなり、かくてぞ穀物小屋には取り入れらるゝ。そが上に寢まらばいといたく甘き眠は得らるべう。

縮れ毛の小供の頭は積まれたる牧草の間に隱見し、鶏冠かざせる鶏は牧草の中に蠅、小さき虫など窺ひ、唇のあたり白毛ある小犬は繩れたる草花の間に轉げたり。

亞麻の如き頭せる若者達、清き汗衫を着て、帶低くしめ、重々しき長靴穿ちたるが、鎧はざる荷車の上に倚りて白き齒露はしつゝ、かたみに戯言の鋭さ齊發を交はすなりき。

丸顔の少女は窓の外に顔さし延べて、若者達の戯言いふを聞きては笑ひ、牧草の上の小供どもが惡戯するを見ては笑ひぬ。

他の少女、強き腕もて大いなる吊桶を汲めり……吊桶は震ひつ、動りつ、長く耀く滴をこぼすなりき。

我が前には新らしき下着きて新しき靴はきたる媼立てり、太く空虛なる南京珠は三列をなして黑く瘠せたる媼の頸に掛れり、黄に赤の班點ある被物はそが半白なる頭を包み、低く垂れて淀める媼の瞳に及べり。

さるからにそが老いたる眼の中には、ようこそと人を迎ふるやうなる笑みをたゝえぬ、笑みは皺枯れたる滿面に漲りつ、われ疑はじ、媼は七十路の坂をも蹠えたりしを、……而も猶見る者をして若かりし日の麗しさを忍ばしめんとす。

媼は日に燒けたる指を震はしつゝ、右手には冷こき乳の皿を握れり、未だ穴藏より出したての乳酪添えてあり、皿のまはりの滴は眞珠の糸にも似たりや、左手の掌には温きパンの大片を戴せて、我が爲めにもて來て呉れたるなり、言ふにも似つ「食ひ給へ旅人、ようは來賜ひし。」

雄鶏は急に音に出でつ、けたゝましく羽ばたきぬ、鎖されたる豐小屋の犢のもうとばかり靜かに低く應ずるなりき。

「ァ、いかによき麥なるよ」と我が馭者のつぶやくを聞きつ……げに曠濶なる露西亞の田舎の滿足よ寧靜よ豊饒よ、げに深き平和とよき暮しよ！。

我は併せて思ふなりき、我等都びとがあせり求むなる、コンスタンチノープルに立つサン、ソヒアの圓頂閣の十字架や、その他あらゆる事物や、そも此處には何の用かあらんと。

會話

"Neither the Yungfrau nor the Finsteraarhorn
has yet been trodden by the foot of man."

アルプスの嶮頂……截然たる懸崖の連嶂……千山萬峯の眞たゞ中。

峯をこえて澄み渡りたる薄緑りの雲靜寂に懸れり、嚴しくも痛ましき涸陰、皓々たる密雪、その雪の表に聳えて澁面作れる山々、氷堅く鎖し、風厲しく掃ひたり。

二大塊、地平線上の兩巨人、乙女嶽と、鷲峯と。乙女嶽は其隣人に尋ねぬ、「あたりの有樣を物語りたまはずや、御身は善於見ゆる筈なり、下界は今何事の起りて候にや。」

幾千年は過き去れり、一分時なり。

鷲峯は答ふべく鳴り出でぬ。「濃き雲地上を蓋ひたり……待て暫し。」

また幾千年は過き去れり、一分時なり。

「よし、今や奈何」乙女嶽問ひぬ。

「今こそ見ゆれ、下界はいづこも同じとなり、青き水あり、黑き森あり、灰色の石の堆く積まれたるあり、そが間際には例の小虫ども躁き廻れり、汝は知るか、嘗て我等を汚し得ざりしかの二足の生き物を。」

「人間よな」

「さなり、人間なり」

幾千年は過き去れり、一分時なり。

「かの小虫どもは稀になりたるやうなり」かく鷲峯は轟き出でぬ、「下界は今よく見らる、河は縮み森は薄らげり。」

亦復幾千年は過き去れり、一分時なり。

「今君には何をか見玉ふや」、乙女嶽問ひぬ。

「我等に近きあたりは聖於成せし如し、されど遠き谷間には猶班點ありて物の動くが見ゆ」。

「今や奈何」、一分時なる他の幾千年の後、乙女嶽また問ふなりき。

「萬事宜矣、何處も今は朗らかなり、汝が眺むる限りの隈々たゝ白砂なり……世界は我等が雪、雪と氷のみ、物みな霜と結び果てぬ、よいかな寂滅、」

「まこと宜し」、と乙女嶽も曰ひぬ、「されど老漢、我等も早や思ふ存分空話しぬ、いざ寢まらずや」。

「げにげに其時なり。」

宏大なる山々は眠に就きぬ、澄み渡りたる碧の空は永世の沈默鄕をこえて眠れり。

老女

孤り瓢然として曠野を行く。

忽ち後へに當りて輕く忍びやかなる聲音起りぬ……

我が背後より歩み來れる者ありと覺ゆ。

顧みれば丈低く腰曲りたる一人の媼ありて全身を灰色の襤褸に包みたるが、顏のみさし覗くやうに現はしたり、黄ばめる面わ皺寄り齒落ちて鼻尖し。

われ差し寄りけるに……媼も止りぬ。

「汝は誰ぞ、何をか求むる、物乞か、施えんとにや、」

答なし、さし覗きてつくづく窺へば、兩眼半透明の膜に被はれたり、日の眩きを避けんとて鳥の瞳に見るものゝやうなり、されど媼の膜は動かず……果せる哉、其眼は盲ひたり。

「物欲しとにや、いかなれば我を追ふや」、再び問へども依然として答なし、唯僅かにわななくのみ。

我は踵を廻して道を急ぎぬ。

再び背後に當りて例の輕く、定りて、忍びやかなる足音を聞く。

「またかの老耄めか、何すれぞしかく我に附き纏ふやらん」、かく訝りつゝも兎角してまた思ひ回しぬ「定めつ媼は道に迷ひしなり、盲ひなれば術もなし、我が足音をつけて里には出でんとなるべし、げにげにさもあ

等は同體なり、戰き慄へる情火の花はいづれにも燃上り輝きたり。

死は蕩盡す、そが冷たく廣き翼の波もて……

其終りはよ！

誰人かかくてえ判たんや、如何なる焰か我等のいづれにも燃えたりしを。

あらず我等はかたみに瞻つむる蓄生、人間にあらに起るなりき。

我等は何事に就ても爭へり、藝術にも、宗教にも、科學にも、この世の生に就ても、墓のあなたの生に就ても、就中墓のあなたの生に關する爭はいと劇しかりき。

仲間は信心深く熱心なる性なりしが、ひと日我に向ひて曰ひぬ、「君は何事をも笑ひ玉へり、されど我若し

知んぬ、我を求む[illegible]

とを。

愚人之判斷

「愚か者の判斷とて忍んで聽け……」（ブシュキン）

あはれ我等の歌人は常に眞實を語り賜へり、こゝにも君は復然り。

「愚か者の判斷と衆愚の笑ひ」……誰か其一を知てまた我等を解せず……爾は我等の敵なり。」

この人いかにせばよからんか、たゞ事を續けよ、自ら言ひ解かんとは努むる勿れ、賢於き判斷をも望む勿れ。

昔一個の旅人ありき、貧民の常食にして麭包の代用をなす馬鈴薯を持て農夫に與へて呪はれたり、……彼等は擴げたる旅人の手より貴き賜物をふり落し、泥の中に擲ちて足下に蹈みにじりぬ。然るに今彼等はそ

らん」、しかすがに言ひ知らず怪しき不安の念やうやう我を襲ひつゝ、思へらく媼は我に從ふにあらずして、まことは我を導くなり、左に右にそが思ふやう我を誘へば、我は覺らずして媼がなすが儘に從ひつゝあるにあらずや。

詮方なくて猶歩を進めぬ……されど見よ、我が行く道の正面に當りて黑く曠きものあり……穴の類なり……「墓！」忽焉として胸躍りぬ、「こゝなるか、媼の、我を導くは、」

勢込めて振り向けば、再び面と媼に對ひぬ、……眼明きたり、殘忍にして邪心深き大いなる雙眼もて我に見入りぬ……正にこれ摯鳥の瞳……われ僂みて覗くやうにして窺ひければ……再び暗き膜、例の盲ひたる鈍き其相……

「噫、命運か、此の老媼は我が命運なり、人の遁るゝに由なき命運なり、」

「人遁れんや、人遁れんや、何の狂痴ぞ……よし試むべきなり、」かくて我は直に他の方面に道をとりぬ。

足を早めて行けど……例の輕き跫音はたはたと近く近く我背後にあり……また闇き穴。

三度道を更へて行く……こゝにも例の跫音、人を嚇やかす闇き影。

狩り追はるゝ兎の如くひたすら迷ひて、いづこいかなる道をとるも……同じことなり同じことなり。

「待て暫し」我遂に思ひ直すことありき、よし一つ誑かして呉れん、こゝ動かであるべし、即時地上に腰を据へぬ。

二歩にして媼は我が脊後に立てり、其聲聞かずとも、物のけはひにて悟らずやは。

卒爾としてかの黑影遠く浮び出でゝこなたを目がけて匍ひ寄りたり。

已ぬる哉、顧みれば媼は眞つ向に我を疑視めつ齒なき口元ゆがみて苦笑を洩せり。

噫、人遁れんや。

犬

たゞ二個一室にあり、我犬と我と……戸の外には嵐恐ろしく哮えたけりつ。

犬は我前に座して眞ッ向に我顏を視守りぬ。

我もまた其面を熟視するなりき。

彼は我に何事か語らまほしく思へる如き面持せり、彼は痴なり、彼に言葉なし、彼、彼を解せず……さりながら我は能く彼を解したり。

我は解したり、この一刹那、同じ思ひは我と彼との間に通じ、二個の間にはいかなる差別だになきを、我等は同體なり、戰き慓へる情火の花はいづれにも燃上り輝きたり。

死は蕩盡す、そが冷たく廣き翼の波もて……

其終りはよ！

誰人かかくてえ判たんや、如何なる焰か我等のいづれにも燃えたりしを。

あらず我等はかたみに瞻つむる蓄生、人間にあらず……

そは平等の眼なり、互の上に打ちまもりたる眼は。

かくて蓄生、人間のいづれにても同じ生は他の生と接すべく、恐る恐る撥き急げり。

我敵

我は仲間のなかに一人の敵を持てり、獵に就てならず、務めに就てならず、また戀に就てならず、されど我等の意見はいづこに遇ふも、いかなる事に就ても決して一致することなく、はしたなき爭は常に我等の間に起るなりき。

我等は何事に就ても爭へり、藝術にも、宗教にも、科學にも、この世の生に就ても、墓のあなたの生に就ても、就中墓のあなたの生に關する爭はいと劇しかりき。

仲間は信心深く熱心なる性なりしが、ひと日我に向ひて曰ひぬ、「君は何事をも笑ひ玉へり、されど我若し

知んぬ、我々が[illegible]

とを。

愚人之判斷

「愚か者の判斷とて忍んで聽け……」（ブシュキン）

あはれ我等の歌人は常に眞實を語り賜へり、こゝにも君は復然り。

「愚か者の判斷と衆愚の笑ひ」……誰か其一を知てまた我等を解せず……爾は我等の敵なり。」

この人いかにせばよからんか、たゞ事を續けよ、自ら言ひ解かんとは努むる勿れ、賢於き判斷をも望む勿れ。

昔一個の旅人ありき、貧民の常食にして麭包の代用をなす馬鈴薯を持て農夫に與へて呪はれたり、……彼等は擴げたる旅人の手より貴き賜物をふり落し、泥の中に擲ちて足下に蹈みにじりぬ。然るに今彼等はそ

あらずや。

詮方なくて猶歩を進めぬ……されど見よ、我が行く道の左右に書うた愚人達よ、この惨ひ

狩り追はるゝ兎の如くひたすら迷ひて、いづこいかなる道をとるも……同じことなり同じことなり。

二人の輿に謬りしを語らんとてか、爾の悶みせし所は何なりし、地獄の苦か、極樂の幸か、せめて一言は語れかし、」

敵は遂に一語をだに發せざりき、唯依然として隱やかに悲しげにそが頭を上下に振るのみ。

我は大笑しぬ……　亡靈はかき消えたり。

乞食

曾て街中を行きけり……老耄たる乞食ありて我を留めぬ。

血走りたる涙の眼、青褪めし唇、粗らき縮縷、膿もつ傷……慘なる哉、貧はかくまでにこの不運兒を虐げてけり。

翁は赤く脹れ上れる穢き手を我に差し出しぬ、彼は呻ぬき、嘶きて助を乞へり。

衣囊と云ふ衣囊に觸れけれど……財囊もなく、時計もなく、手拾だに無かりき……我は一物をも所持

君に先ちて死なば、我は他界より君のもとに訪づるべし、……其時君は尙嘲み笑ひ玉ふかを我はみん」。

まことに仲間は年若くして我に先立て逝きぬ、幾歲は過ぎぬ、我はその約束をも威嚇をもまたく忘じ了んぬ。

一夜我は床に横りしがえ眠らず、まことは眠まく欲りせざりしなり。

室の中燈火もなく闇もなし、鼠色の黃昏時に對する心地しつ。

忽焉として我が敵あり、二つの窓の間に横はるよと我は見き、徐かに悲しげにそが頭を上下に振りつ。

我は度を失はざりしのみか、驚くことさへなかりき、……剩さへ僅かに身を起して、肘にもたれて、圖らずも出逢ひし亡靈のかたを視つめたり。

かかたはまだ頭を振り振りぬ。

「よし」と我は遂に叫び出しぬ、「爾は氣揚れるか、はた悔めるか、何を言はんとては來し、戒めか苛責か……さらずばまた爾の謬れるを告げんためか、我等せざりしなり、されども乞食は猶待つなるよ……其他を知らざりし。

差し出したる手は弱く戰のき微かに震へり。

惑はされはにかみて、我はかの戰の穢き手を執り熱こめて握りぬ……「な怒りそ、同胞、我は一物をも待たざるなり、同胞よ、」

其血走りたる眼は我に見入りて、青褪めし唇は微笑を湛えぬ、かくて我が冷かなる指を掴みて酬ひたり。

「何事の候べき」と翁は囁ぐなりき、「其一事御身に謝すべし、之も亦賜物なり、同胞よ、」

知んぬ、我も亦我同胞より一の賜物をば得たりしことを。

忍び能ふ限りはよく忍べ、力ある者はそを蔑むもよし。

されど世には嚴しく胸を貫くやうなる打繫あり……こゝに人あり、彼はあらゆる能事を盡し、熱心に正直に勉强して働けり……而も尙あまたの正直なる心は忌み惡みて彼を避け、あまたの正直なる顏は彼の名を聞いて怒に燃えぬ「去れや去れや」とあまたの若き正直なる聲は叫べり「我等は爾を要せず、また爾の事業を要せず、爾は我等の住家を汚せり、爾は我等を知らず、また我等を解せず……爾は我等の敵なり。」

この人いかにせばよからんか、たゞ事を續けよ、自ら言ひ解かんとは努むる勿れ、賢於き判斷をも望む勿れ。

愚人之判斷

「愚か者の判斷とて忍んで聽け……」（プシュキン）

あはれ我等の歌人は常に眞實を語り賜へり、こゝにも君は復然り。

「愚か者の判斷と衆愚の笑ひ」……誰か其一を知て

昔一個の旅人ありき、貧民の常食にして麭包の代用をなす馬鈴薯を持て農夫に與へて呪はれたり、……彼等は擴げたる旅人の手より貴き賜物をふり落し、泥の中に擲ちて足下に蹈みにじりぬ。然るに今彼等はそ

あらずや。

詮方なくて猶歩を進めぬ……されど見よ、我が行なる道をとるも……同じことなり同じことなり。

二人の輿に謬りしを語らんとてか、爾の閲みせし所は何なりし、地獄の苦か、極樂の幸か、せめて一言は語れかし、」

敵は遂に一語をだに發せざりき、唯依然として隱やかに悲しげにそが頭を上下に振るのみ。

我は大笑しぬ……　亡靈はかき消えたり。

乞食

狩り追はるゝ兎の如くひたすら迷ひて、いづこいかなる道をとるも……同じことなり同じことなり。

君に先ちて死なば、我は他界より君のもとに訪づるべし、……其時君は尚嘲み笑ひ玉ふかを我はみん」。

まことに仲間は年若くして我に先立て逝きぬ、幾歳は過きぬ、我はその約束をも威嚇をもまたく忘じ了んぬ。

一夜我は床に横りしがえ眠らず、まことは眠まく欲りせざりしなり。

室の中燈火もなく闇もなし、鼠色の黄昏時に對する心地しつ。

荷ひたるや、思ふ人にあひゞきの途急げるや、さらずば複たゞよき朝餐すまして、心地健やかに食足れる欣び五體に滿ち亘れるや、あはれ波蘭土王スタニスラス、疑ふらくば御身が麗はしき八稜の十字架とりてこの少年の頸に掛けたるかを。

あらず、彼はその友を誹謗せんと思ひ立ちて、あらぬ噂播き擴ぐるに急ありしが、今圖らずも他の友の口より同じ誹りの言葉聞き得て歸るなり、況んや……彼自らもそを信せんとするに至りしをや。

嗚呼見よ其滿足を！、愛すべく、望多き若者の、けふのこの日はいかに懇ろなるべき。

處世法

「爾若し其敵を惱し、或は更に之を迫害せんとならば」老狡なるくせ者言へり、「爾自ら持てりと知れる眞との瑕瑾或は惡德もて彼を誹るに如かず、發憤せよ……而して大に誹れ、」

をもて養はれ乍ら、其恩人の名をだに知らざるなり。

それもよし、彼の名が農夫の間に知れたりとていかにせん、名はなくとも旅人は飢より彼等を救へり。

たゞ我等はまことに好き食運ばんとのみ努むべきぞ。

爾が愛する者の口より苦々しき不正の呵責聽くことありとも……そも復忍びうべきなり……

「我を打て、されど我に聽け」とは亞善の賢者が斯波留多人に語るところ。

「我を打て、されど皷腹して健かなれ」我等の言ふべきは是なり。

滿足

欣び躍りて一人の若者都大路を迴れり、身のこなし渾て樂しく輕く、眼には煌きあり、唇には微笑あり、面冴えて紅を漲しぬ……たゞ樂しく、たゞ滿ち足れるかりき。

そもこれ何の吉事ぞ、遺産贏ち得たるや、昇進の榮

「先づ汝は自ら其惡德をせよ知られざるの利あり。」

「次に爾の憤りは能く誠心なるを得んなり……爾が良心の呵責を他に轉ずるをえんなり。」

「例へんか、爾若し表裏反復の性あらば、先づ爾の敵を罵るに些の信念なきを以てせよ。」

「また若し爾に鄙陋の性まことならば、彼を呼ぶに鄙陋を以てせよ……文明の奴隷、歐洲の奴隷、社會主義の奴隷、とかく面謾せよ」

「非奴隷主義の奴隷とも能く言ひえんか」かく我の加ふるを聞きて、

「それも宜からん」と狡猾あるくせ者は點頭くなりき。

世界の大終

夢なるか、こゝは露西亞の荒野、素撲なる一軒の田舍家。

我が立つ部屋は廣く低く、三つの窓ありて穿たれたり、壁は白く塗られ、家具とては一つもなし、戸外は一面の荒野、ゆるやかなる勾配をつくりて、下り下りて遙に擴がりたり、灰色なせる一色の空の之を蓋ひたる、譬ふるに寢屋の帳の如し。

内には我獨り立てるならず、凡そ十個に余れる人々は我と與に居合せり、何れも飾氣なく、質素なる衣着たり、窃みて事をなす者の如く、皆默して徘徊し、互に避くれども、なほ斷えず氣づかはしげに見交すなりき。

その何すれぞこゝには來れるや、與にある者の誰々なるや、一人の能く知るものなし、皆の面には唯不安と絶望とあり……代る代る窓近く寄りて外面のかたに待つものある如く瞳を凝して眺め入りぬ。

かくて復人々は歩み初めつ、我等の中に一人の小兒ありて、「父様、恐はや、」とか弱き聲に斷えず小語くなりき、我心は之を聞いて痛み、我もまたいつか恐を催しぬ……何事のありてか、自らだに知らざるなり、唯曉るらく、一大悲運の歩は一歩より近接し來りしことを。

小兒はなほも慟哭を已まず、あはれ遁るべき術もがな、呼吸は迫まり來れり、五體は厭はしくなれり、あたりはいたく重々し……されど嗟吁遁れんに道もなし。

彼の蒼は殮衣の如くにして、一風吹かず大氣は死せるかあらずか。

突如としてかの小兒窓に走ると見るに、例の哀れなる聲して叫び出でぬ、「見ずや、見ずや、大地は陷落したり」、「いかに陷落とな」、うべ、今の先までこの家の正面に横はりし一帶の擴野はいつしか消え失せて、見るに魂も奪はるべき一大絶壁其跡をぞ領しける、地平線は銷沈し、陷落したり、刳られたるが如き峭壁千丈倒に懸りて直に屋下續きぬ。

我等は皆窓に集ひつ……恐れに胸も凍えたり、「こゝなり…此處なり、」と我に隣れる一人さゝやきぬ。

嗚呼見よ、大地の境と云ふ境よりは、遙かに物ありて動き初めぬ、小さく圓き丘の如きが且つ昂り且つ降るなりき。

「海なり」との思は一時に衆人の胸を突きぬ、「直ちに我等は呑み去らるべきか、たとへかの大波とてよもこの斷崖まで押し寄せまじ。」

されど巨大の海はたゞ高まり高まるのみ……遠き方には最早亂丘曲阜のけじめもなし……渺茫として極みなき一帶の波濤は地平の全圓を呑み盡せり。

海は次第に我等の脚下に迫りぬ、闇黑地獄を吹き荒せる氷の如き烈風の勢もてたゞ寄せたり、萬物戰き慄ひ、狂奔せる大塊の中には雷の如き嘯聲あり、千萬の咽喉より出づる悲嘆の寒叫あり、……

吁、何等の怒號ぞ、痛哭ぞ!、これは是れ恐れ戰く地球の喚叫と知らずや、……

大終!、世界の大終!、

小供は今一度耳語きぬ……我は仲間を摑まんと試みたりしが既に遲し、この時我等の凡ては厭し碎かれ、埋められ、溺らされて闇く冷かに怒號せる大波の中に捲き去られぬ。

闇黑、……永劫の闇黑!、

辛うじて息づきつゝ我は醒めたり。

セダン回顧。（ユーゴー）

中澤臨川

（一）

我は第四の追放を終へて歸途につきぬ、――ベルジュームの追放、これ誠に一些事のみ。時に一千八百七十一年九月下旬、我はルキセンブルグの國境より佛蘭西の地に入りけるとき、しばし車中にまどろみつ、突然列車の止まらんとする動搖に目ざめて、初めて眼を開きぬ。見れば車はめでたき風景のたゞなかに止まれり。阻げられたる眠の未だ醒めもやらで、我は半覺の境にあり。半は夢の我思ひはおぼろ〳〵眞僞の間にさ迷ひつ、我は夢さめがたの言ひ知らずをかしき、紊れたる情を閲みしぬ。

晴れたる野邊の草深き間をうねりて清き小川は鐵路に沿ふて流れぬ。跳り込みしと見し鳥のやがて其すがたの草にかくれて見えずなりしにも其繁みのいかに深きかを知りうべし。林檎樹あり、アダムの昔を想ふべく、柳楊なびきてガラテアの面影を偲ばしむ。先にも言ひけん如く、今は期節の變り目に限られたる獨特の妙趣ある晝夜平分の月の一なり、晩き冬ならば近づく春の歌を聞くべく、暮れ行く夏ならば地平線あたり定かならぬ秋の笑まひの輝きをみん。風吹きて野邊のさゝやきを作せる樣々の韻を調和しつ、羊鈴の響は蜂の唸きと相和し、終りの蝶は初つの葡萄と親しむ、げにこの期節よ、人をして猶しばし生あるを樂しむ喜と與に近づく末期のおぼろげなる憂愁を感せしむ。日和の長閑けさはたとへんに物なし。肥えたる野邊は幾重の畦と素樸なる農家もて劃されぬ。樹下に敷かれて影なす芝原、バアジルに聞く如き牛の唸き、日の光に射られてみゆる遠里小野の烟、これ等は其全景なり。鐵砧のひゞき遠く聞ゆ、自然の奏樂に雜れる勞働の調べよ。我は耳傾けぬ、耳傾けつゝかすかなる思をたどりぬ。美しくも幽なる谿谷なる哉、かの蒼空は小山つゞきの愛しき圓上に靜かに憩ふと見えたり。遠方に鳥の音聞ゆ、我身に近く小供の聲あり、之等は兩天使の歌の雜れるにも似たりや。遍ねき純白は我身を包めり、之等の優雅と壯麗とは黃金色なす曙を我が魂に滴らしぬ。……

突如として同業の一人は問ひ出でぬ。――

「こゝはいづこぞ」

一、セダンの方面に向ひ、二つの戰鬪線の關聯をなし

アマイユの砲兵隊とフランタンジュの大隊とはこれ等四大隊の豫備をなせり。凡ての騎兵は皆戰鬪線にあり。軍隊は二個所に混亂の場をもちぬ、一はバランのあなたセダンの方面に向ひ、二つの戰鬪線の關聯をなし

忽焉として彼等は目醒めぬ。

全軍捕虜なりき。

日上りぬ。神の方は光榮あり人の方は恐懼あり。

（四）

請ふ位置を再査せん。

獨軍は其數に於て遙かに勝りぬ、彼等は一に對する三或は四なり、總勢廿五萬と號しき、げにや其前面は三拾キロメートルの廣さに亘れり。彼等は形勝の地を占めぬ、高丘に向かう實を語ると云ふ一事に優りて更に避くべからざるものあらん、敢てこの道に進むものは能く物の眞底に達せん、是必然の勢なり。『正義の保護者』のさだめは正義なり。

セダンの戰は戰はれたる戰以上のものなり、これ完結せられたる推理式なり、運命の恐ろしき豫想なり。夫れ運命は馳走せず、然りと雖も常に必ず來る、時至ればそこにあり或は數年を無事に經過せしむる事あるも、人之を忘念せしめ那に於て顯現す。セダンと名けられたる不時の悲慘はげに

他の一人答へて曰く。——

「セダン」

我が滿身は戰き慄えつ。

この樂園は墳墓なりしよ。

我はあたりを見廻しぬ。那の谿谷は火口池の底の如く空洞なる圓形をなし、其間をうねれる水は蛇に似たり。層々相横れる丘陵は攀緣すべからざる三重壁の如く、この奇しき場所を圍みて一度入らば逃るゝに途なからん。我は「アンヒシーアタ」(圓形の劇場)を想ひ起しぬ。かの不快なる高草ははびこれる暗林の如く丘と言ふ丘を走りて、はては逃さじとかさゆる圈套の如く遠く地平線上に消えうせぬ。日輝き、鳥鳴き、御者は口笛をならして過ぐ。羊や、山羊や、鳩や四方に散らされ、葉は動きてさら〳〵と音たて、草の繁みには花咲き充てり。これ等光景の凡ては人をして戰慄せしむ。

我は那の谿谷にひらめき渡る報怨の天使の劍影を見たり。

「セダン」なる語は突如として剝がれたる被衣の如し。一刹那、滿眼の景は悲劇に充ちぬ、木の皮の幹に刻める無象の眼はある恐ろしき物に向て瞳を凝しぬ。

此處なる哉、此處なる哉。件の事件の起りてより早や一とせ餘りを過ぎぬ。十二月二日の怪奇なる冒險の破烈せし所は實に此所なり。恐ろしき破船よ。

かゝる暗憺たる『運命』の道途は心の深き腦みなくして誰かは曉り得ん。

(二)

一千八百七十年八月三拾一日を以て一軍隊はセダン城下ジボンヌ([illegible])の谷と稱ばれたる所に召集せられぬ。この軍隊は佛兵なりき。廿九聯隊、十六旅團、四師團にして總勢九萬に及びき。この軍隊の何の爲めにこの地にあるかは能くえて知るものなし。規律なく、目的なく、たゞ徒にまき散らされたる樣はある一巨手の來り掴むに任せし漫然たる人間の堆にも似たる哉。

軍隊は近き危險のありとも豫期せざりし如し。彼等は敵兵[illegible]猶遠きを知れり、勤くともそを知れりと考へぬ、行程を按ずるに一日五里として猶三日を費すべし。されど將帥等はかしこき軍略的愼重の態度に出で、夕つ方二分隊を擇んでセダンとモース([illegible])の間に宿れる軍隊の保護に努めぬ。其一分隊は第七師團よりなり、フロアン([illegible])よりジボンヌの間に亘り、他の一分隊は第十二師團より成り、ジボンヌよりバゼーユ([illegible])の間に亘り、恰も一個の三角形をなしてモース其斜邊をつくりぬ。第十二師團はラクレティユ([illegible])ラルティーギュ([illegible])ウァルフ([illegible])の三旅團にして騎兵と與に右方に並列して好個の障壁を作り、兩端にはバゼーユとジボンヌをもち中央にデーニーをもちぬ。バチ及レリチエの二旅團は背後に重列を作つて益々其障壁をかためつ將軍ラブラン之を率う。ヂユエー將軍の率ゐし第七師團は僅かに二旅團(ヂュモンド及ギルバルト)より成り、イリーの方面に於てジボンヌの軍隊を掩ひつゝ他の戰鬪線を作りぬ。この戰鬪線はジボンヌの方餘りに開け、モース方面はたゞ僅かにマルカリット、ボンチマンの二砲兵隊及フロアンに方陣作れるクヨマーの一大隊によりて擁護せられしのみにて比較的薄弱なるものなりき。この三角形の間にワンファン將軍の第五師團とヂュクロー將軍の第一師團ぞ横はれる。ミシェルの砲兵隊はデーニー方面に第一師團を圍み、第五師團はセダン方面に自ら擁護しぬ。四個の大隊(レリター、グランドシャンプ、ゴーズ、コンサイユヂュメニユ)は二列を作つて馬蹄鐵の形をなしつゝセダンの方面に向ひ、二つの戰鬪線の關聯をなし、アマイユの砲兵隊とフランタンジユの大隊とはこれ等四大隊の豫備をなせり。凡ての騎兵は皆戰鬪線にあり。軍隊は二個所に混亂の場をもちぬ、一はバランのあなたセダンの右手に當り、一はイジュの方セダンの左手に當れり。バランのあなたにはバヴァーギュの旅團とレブールの大隊あり、イジュの方にはマルガリット及ボンチマンの砲兵隊あり。

これ等の排列は佛軍の深き安心を示しぬ。第一萬全の計と思はざりせば奈翁三世のこゝにくべき理なし。このジボンヌの谷は奈翁一世の嘗て「手水鉢」と呼びし所なり。天下また此の如き四塞の地あらんや。此處に入りたる軍隊は餘りに形勝にすぎて再び出る能はざるの危險あり。勇悍愼沈なるワァンファン將軍の如きは之を喜びざりしが彼等の苦言はあだなりき。帝王がはの人は言ひぬ、絶對に必要なる場合にはメジエールに行かんこと穴勝難きにあらず、いかに困危を極むともベルジユームの國境に達せんは易し、さはれなど、かゝる極端の事ども まで議するの要あらんや、先見は時に害ありと。かくて全軍愉樂の夢に耽りぬ。

彼等に不安の心ならばモーセの橋を切りたるべし、されど彼等は一念のこゝに及ぶことすらあらざりき、そを如何にとなれば敵兵なほ遠ければなり、必ずや確報をえつらん皇帝は彼等に之を確めぬ。

かくて佛軍はやゝ混亂の態にて野營を張り、よしや如何忽焉として彼等は目醒めぬ。

全軍捕虜なりき。

日上りぬ。神の方は光榮あり人の方は恐懼あり。

(四)

請ふ位置を再査せん。

獨軍は其數に於て遙かに勝りぬ、彼等は一に對する三或は四なり、總勢廿五萬と號しき、げにや其前面は三拾キロメートルの廣きに亘れり。彼等は形勝の地を占めぬ、高丘に向かう實を語るゝ云ふ一事に優りて更に避くべからざるものあらん、敢てこの道に進むものは能く物の眞底に達せん、是必然の勢なり。『正義の保護者』のさだめは正義なり。

セダンの戰は戰はれたる戰以上のものなり、これ完結せられたる推理式なり、運命の恐ろしき豫想なり。夫れ運命は馳走せず、然りと雖も常に必ず來る、時至ればそ書にあり或は數年を無事に經過せしむる事あるも、人之を忘念せし刹那に於て顯現す。セダンと名けられたる不時の悲慘はげに

なる事の起らんとも、メジエールの避難所を後に扣えたりと信じつゝ、この八月卅一日の夜を深き眠に落ちぬ。彼等はなみ〳〵の注意をすら怠りつ、たゞに騎兵斥候を出さざるのみか、硝兵線をすら張らざりき、日耳曼の一軍事記者言へることあり、彼等と獨兵との間には少くとも十餘里を(三日路)を距てぬ、彼等は獨兵の所在を知らず、たゞ敵が統一を缺き、報道普ねからず、徒らに散亂してセダンの如き一所に集注するの難なるを信せしのみと。又曰く、彼等想へらく、サクソニー皇太子はシャロンより進み、プルシア皇太子はメッツより進めりと、而して獨軍に關する一切の事項、其將帥、其計畫、其軍備、其實力は彼等の全く與り知らざる所なりしと。これをしもガスタバス、アドルファスの六韜に則るといふか、フレデリック二世の三略を學ぶとなすか、誰かよくえて其是非を知らんや。彼等は實に數週にして獨都ベルリンにあるを信せしなり、何たる愚ぞ。フルシア軍！彼等の之を語るや夢の如く幻の如し。

佛軍の惰眠に耽りしこのこの眞夜中、一大事件ぞ起りける。

(三)

翌朝三時四十五分、サクソニーの皇太子アルベルトは其牙營にありてモーセの軍隊に進軍の命を發しぬ。王軍は嚴しく武裝せり。二旅團は進軍を初めぬ。一はエスカンブル。フォル、オー、ボアを經てビラー、クルニーに向ひ、一はスシー。フォール、サン、ルミーを經てフランシュバルに向ふ。近衞砲兵之に從へり。

同時にサクソン第十二師團は武裝して南の方高道よりラメクールに達し、ラ、モンセンに向ひ、第一バヽリア師團は第四師團の砲兵隊によりて助けられつヽバザイユに向ふ。第四師團の殘部はモーゾンよりモーセ河を渡りて右岸メリーに集り以て豫備隊たり。之等の三支隊は厚く氣脉を通じぬ。嚴令は進擊隊に下れり、曉明五時以前に曝發的擧動あるべからず、靜寂の間にフォール、オー、ボア。フォールサン、レミー及ドーエーを占領せよと。彼等は皆背囊をすてぬ、輜重車は靜かにきしりぬ。サクソニー皇太子は馬をアルブリモンの高丘にたてぬ。

ODE TO A GRECIAN URN.

KEATS.

我が滿身は戰き慄えつ。

かゝる暗憺たる『運命』の道途は心の深き腦みなくして詭

同時に地平線上の各點より等しき進軍は起りぬ、瞬くまに無數の黑兵は丘と言ふ丘に漲り亘りつ。されど一指呼の聲だに開かず、廿五萬の大兵は寂々としてジボンヌの谷を蔽ひ盡せり。

圓陣の成立左の如し。

バヽリア兵は右翼をなしてバゼーユよりモーゼに亘り、之に次ぎてサクソン兵はラモンセよりデーニーに亘り、ジボンヌに對して王軍あり、サン、メンジに第五師團あり、フラギューに第二師團あり、ウルテンブルグ兵はモーゼの曲道を要してドン、シェリーを被ひ、ストルベルグ伯及其騎兵はドン、シェリーに屯し、セダンの方は第二バヽリア兵陣を布く。

萬動肅々たり、頗る幽鬼の技に似たり。森を貫き、丘を越え、谷を渡つて、一響なく、一私語なし。恐ろしや、凶兆の進軍、蛇の如くに潛み滑べれり。

林樾の間、闃として一語を開かず、寂莫たる大軍夜の明くるを俟ちつヽ闇に群がりぬ。

佛兵の眠正に圓かなり。

忽焉として彼等は目醒めぬ。

全軍捕虜なりき。

日上りぬ。神の方は光榮あり人の方は恐懼あり。

(四)

請ふ位置を再査せん。

獨軍は其數に於て遙かに勝りぬ、彼等は一に對する三或は四なり、總勢廿五萬と號しき、げにや其前面は三拾キロメートルの廣きに亘れり。彼等は形勝の地を占めぬ、高丘に上り、森を滿してあらゆる傾斜に蔽はれぬ。彼等は無雙の砲兵をもてり。佛軍は谿谷の間にあり、砲兵なく、豫備なく、鉛霰の雨注のもとに赤裸にして立てり。獨兵のかたへには埋伏所あり、佛兵の恃む所は唯武勇のみ。死は光榮なり、而かも驚愕は時に利用あり。

これ公平なる戰なるか、然り。夫れ然りと雖もこれをしも公平と謂つべくんば何等の戰か公平なざるものある。夫れ同事のみ。

言ふべき事は最早之にて言ひ果てぬ、セダンの戰は話し了りたるなり。

我茲に筆を擱かんと欲す、然りと雖も能はざるなり。よしや史家にして恐懼の念に襲はるヽ事ありとも、『歷史』は義務なり、この義務は果たさざるべからざるなり。何等の傾向か實を語ると云ふ一事に優りて更に避くべからざるものあらん、敢てこの道に進むものは能く物の眞底に達せん、是必然の勢なり。『正義の保護者』のさだめは正義なり。

セダンの戰は戰はれたる戰以上のものなり、これ完結せられたる推理式なり、運命の恐ろしき豫想なり。夫れ運命は馳走せず、然りと雖も常に必ず來る、時至ればそこにあり或は數年を無事に經過せしむる事あるも、人之を忘念せし刹那に於て顯現す。セダンと名けられたる不時の悲慘はげに

なる事の起らんとも、メジエールの避難所を後に扣えたりと信じつゝ、この八月卅一日の夜を深き眠に落ちぬ。彼等はなみ〳〵の注意をすら怠りつ、たゞに騎兵斥候を出さざるのみか、硝兵線をすら張らざりき、日耳曼の一軍事記者言へることあり、彼等と獨兵との間には少くとも十餘里を(三日路)を距てぬ、彼等は獨兵の所在を知らず、たゞ敵が統一を缺き、報道普ねからず、徒らに散亂してセダンの如き一所に集注するの難なるを信せしのみと。又曰く、彼等想へらく、サクソニー皇太子はシャロ

牙營にありてモーセの軍隊に進軍の命を發しぬ。王軍は嚴しく武裝せり。二旅團は進軍を初めぬ。一はエスカンブル。フォル、オー、ボアを經てビラー、クルニーに向ひ、一はスシー。フォール、サン、ルミーを經てフランシュバルに向ふ。近衛砲兵之に從へり。

同時にサクソン第十二師團は武裝して南の方高道よりラメクールに達し、ラ、モンセンに向ひ、第一バ、リア師團は第四師團の砲兵隊によりて助けられつゝ、バザイユに向ふ。第四師團の殘部はモージンよりモーセ河を渡り、

この種のものなり。古往今來『聖論理』は着々として攻め來る、セダンはこれ等襲擊の一なり。

此の如くして九月一日午前五時、世界は朝曦のもとに目ざめ、佛軍は硝煙彈雨のもとに目覺めぬ。

(五)

火、バゼーユに起れり、火、ジボンヌに起れり、火、フロアンに起れり、戰は鎔爐を以て初まりつ、全地平線は焰に燃えぬ。僅かに醉夢より覺めたる佛軍は、驚愕し、石化して火口池の底に立てるなりけり。

葬儀の群れなるかも。電火の輪は彼等を包めり、全面これ『若滅』、大なる戕殘は時を同ふして四圍に起りぬ。佛軍は抵抗し且戰慄せり、餘されたる所は唯一の絶望のみ。彼等が古式なる小距離銃の精鋭なる敵砲のもとに壓倒せらるゝはげに夢の間なり。一目證者の言に曰く、地上は鋤以て耕されたる如くなりぬと、以て彈雨の密度を知りうべし。さらば幾何個の巨砲ありしや。尠くとも一千有餘を下らざるなるべし。日耳曼砲兵の十二隊はラ、モンセを下し、精鋭の聞ある第三及第四砲兵支隊は第二騎兵隊を扣へてジボンヌの曲道に當り、デーニーに反して拾個のサクソン中隊と二個のウルランブルグ中隊あり、ビラ、セルニーの北の方森の張幕の蔭には第三巨砲隊を扣へて騎馬隊あり、この暗

澹たる一隊は恐るべき火を吐きぬ。ラ、モンセよりラ、シャペルを裾ぢる傾斜地には第一巨砲隊の廿四砲門を並列し、親兵はガレンヌの森にありて火を放ちぬ。大隊は遙けき地平線上の邊緣をなせるイリーの騎兵隊に達するまで、間斷なく排列せり。日耳曼軍はこれ等中隊の前面に座臥して、砲兵の作業を目擊しつ。佛兵は昏倒し、且絶息せり。この廣濶なる平原を掩ひ盡せし犧牲の中に一士官の死骸あり、戰後檢して一片の封書を得たり、ナポレオンの直書に係り、中に曰く、『今日、全軍に休息を與ふ、九月二日』とあり。

勇敢なるライン第三拾五軍隊は爆裂彈の雷雨のもとに全く消え失せぬ。マリン歩兵は瞬時サクソン兵を窮迫せしが、敵兵四方に張翼せしため已むなく退去せり。マルガリット旅團は日耳曼歩兵を目がけて突猪せし、停止し、中途にて沈淪しぬ、「正確の狙擊、冷靜の發火に、殲滅せられて。(ブルシアの報告にこれ有り)。この殺戮の野は三ヶ所に出口をもちしも皆獨兵の爲めに抑壓せられぬ。佛軍は鐵路の棧橋を防ぐを忘れたり、日耳曼三大隊は夜をこめて之を占領し了んぬ。バランにある二ヶ所の離れ家は、恰もよし、長き抵抗の樞軸たるを得たりしならんに、獨兵は既に業にかしてにあり。モンビリーよりバザイユに亘りて鬱葱たる森林あり、以てラ、モンセのサクソン兵とバザイユのババリア兵

との氣脈を斷つに足りぬべし、然るにこれ亦敵兵の爲めに機先を制せられつゝ、バヤリア兵は鎌を用ゐて皆楚林を刈りぬ。獨兵は密接なる一群として行動せり。サクソニー皇太子はメーリーの高丘にありて全軍の進退を測りぬ、指揮の聲は遙かに波及して佛陣に達しぬ。五時四十五分、戰端の開始に當りてマクマホン先ッ粒散彈の爲めに傷負ひつゝ、七時、デュクロー彼に代れり。刻一刻、煙塵の障壁は緊密し來れり、電火の響谷に振ひ、天に聒す。吁嗟々々九萬丈夫の悽慘なる狀殘よ、古より是の如きは絶えてあらざる所、劫初このかた鉛と鐵との如き雨脚のもとに晒されたる軍兵安んかある。一時、全軍滅しぬ。軍隊はセダンに遁逃せしが、セダンには火昂りぬ、ヂョルバルは焦土となりぬ、戍衛病院も灰燼に歸しぬ。いづこを隱れ家と定めん術もなし、今は唯身命を堵して、一條の活路を開くの外他に道なし。大膽なるワンファン將軍先づ之を皇帝に進言せり。勇敢なる第三ズーベ軍は先づ其備を作りつゝ、彼等は他の軍隊より離れて敢て一條の活路を求め、亂相蹂躪してベルジュームの國境に達しぬ。眞にこれ獅子群の奔逃にも似たらんず。

この災殃の上、この死人及垂死者のうづだかき偃伏の上、この凡ての不幸なる勇敢の上、忽然として汚辱を現はれりける。白旗は高く揭げられぬ。

ヂュレ〻ヌ及ブーバンは現場にありき、一は立像として、一は城砦として。

この立像及城砦は戰ゆ慄震へる降服を目證しつゝ、一人は黃銅の一人は大理石の、これ等二人の處女は汚されぬ。ア、清貴なる御國の面貌よ、ア、綿々たる永劫の屈辱よ。

（六）

セダンの災殃は人能く之を避けうべし、獨リルイ、ボナパルトのみは避くべからず、殆んど彼はそを求めしなり。運命の法則ならずや。（Lex Heti）

我が軍隊はあらはに不幸の犧牲なりき、其初め兵士は皆自己の何處にあるかを知らず、飢渴に迫り、不安の思に沈みぬ。八月三十一日薄暮、彼等はセダン街頭をさ迷ひて自己の營所を尋ね、戶毎にパンを求めぬ。先にも言ひけん如く皇帝は翌九月一日を以て休息の日とは定めつゝ、まことや軍隊は疲れ〳〵て殆んど昏倒の域に迫りしなり。其實彼等は遲々として進み來れり、兵士は殆んど進軍の常習をすら失ひつゝ。縱へば第一師團の如きは一日平均二里半の行路を成し了せしのみ。

然るに獨軍はゼルキセスの軍隊の如く、指揮杖のもとに敢て引率せられて、僅々十五時間内に十七里を進前しぬ。是

（未完）

朝霧

毛品清春

わすらるゝものにしあらば山のわく島のはてにも
われゆかましを
ふとしてはこれみちびきにあらじかをうたがふま
での夢のみだれや
たゞひとりはそきほかげに向ふにもれもてまばゆ
きわが世なりけり
こゝにても逢はずかたらぬ三年なりきわかれのけ
ふもたゞ夢とのみ

ゆくりなきこよひの笛の音のさゑや森の若葉のさゆらぎもせぬ

青海原の祈禱

シャトウブリヤン作

小島酒生譯

われらの眼に殘んの光を湛へたる夕陽はいまきらめく萬頃の波間に沈まんとしてたゆたひけるが、刹那に帆綱のあひまにあらはれてなほその光を茫々たる六合の間にそゝぎぬ、

星かげ淡く、船のとよめきにつれて絶えず水平線のあなたにうつりゆきつ、

ある哉、能く不意を襲ふて夢中の佛軍を包圍し得たりしてとや。驚愕か、常事のみ。フエリー將軍は光づブーモンにて驚かされぬ。白晝兵士は彼等の銃砲を清めんとてそを片片に分ちぬ、夜間彼等は眠れり、敵に通ずる橋梁をすら瞰去する事無うして。九月一日、シュルッ將軍の率ひし先兵がラ、ルーイユを占領し、王軍とモーゼの軍隊との氣脉を通せし時、日未だ出でざりき。殆んど同時刻に日耳曼的精細を以て、ウルランブルグ兵はラ、ブラチネリーの橋を占領し、サクソン大隊はシエバリールの森にかくれて本隊と通じ、ラ、モンセルよりビラー、セルニーに至る全路をも併て將て横斷し了せしなり。

此の如くにして佛軍の醒覺は悽慘なるものなりき。バゼーユのあなた霧は烟に加はりぬ、我が軍隊はこの幽暗の中に打擊せられて殆んど何が爲めに死の手の彼等を要求するかを知らざりき。彼等は室より室に、家より家に戰ひぬ。ヂユクロー將軍は已むなくしてガレンヌの森に其軍勢を集めぬ、ヂユエー將軍は戰慄し昏倒せり、ラブラン將軍は單身ストネーの高原に停立せり。我が軍隊は五キロメートル の戰鬪線を領し、佛軍は東に向ひ、他は北に向ひ、殘余の寡兵は西に向ひぬ。然れども彼等は何れの方面に敵兵を扣えたるやを知らず、『皆滅』は其影を現すことなくして襲來せり。げにや彼等は假面を被れる「メヂユザ」を對手とはせしなりき。我等の騎兵は優秀なるものなりき、去れど何の用をかなさんや。戰野は、林樾之を斷ち、列樹之を遮ぎり、或は人家、或は田野、或は障壁、横に走り、縱に列り、歩兵及砲兵のためには屈强の場所なりしが、騎兵の爲めには こよなき防害なりき。谿谷をうねれるジボンヌの小河は清水よりも却て多量の鮮血を以て流るゝ事三日に及びぬ。殺戮の所どころにもサン、マンジはことに悽慘なりき。傷負へる武夫の末期の苦痛は殆んど十時間の長きに渡りぬ。たけくも清き人々よ、慷慨激越して降眼の汚辱を拒み、寧ろあつ晴なる死を完ふせんとは願ひけめ。

三人決死の武夫はつぎ〳〵に指揮の務をとりぬ、マクマオンデユクロー及ワンファン是なり。少時にしてマクマホン傷つき、少時にしてヂユクロー過ちぬ。クンファンが縱横の豪氣もげに瞬間の夢なりき。然りと雖もマクマホンは其負傷に責なく、ヂユクローは其過失に責なく、ワンファンは其活路開拓策に責なし。彼を傷けたる猫散彈はマクマホンをしてこの悲慘より引かしめたり。ヂユクローの過失は時ならざるにラブラン將軍に退去を命じたるにありて、如是混沌の際、過失と云はんよりは寧ろ一個の誤差なりき。勇悍なるワンファン、彼は活路を拓くに二萬の軍隊を要せしも僅かに二千を得與ひしのみ。歴史はこれ等の三人者を宥さん。セダンの災厄に唯一の責を負ふべき將軍あり、そは皇帝なり。一千八百五十一年十二月二日（クーデタを行ひし日）に結繩せられし所のものは一千八百七拾年九月二日に於て顯現せり。モントマルトル町（逆殺の場所）の災厄とセダンの降服推理式の二項なり、論理と正義とは同じ天秤を以てり。ルイ、ボナパルトの暗憺たる命數は逆殺の黑旗を以て始まり、汚辱の白旗を以て終るべかりしなり。

（未完）

（前半）

朝霧

毛品清春

わすらるゝものにしあらば山のゐく島のはてにも
われゆかましを
ふとしてはこれみちびきにあらじかをうたがふま
での夢のみだれや
たゞひとりはそゝぼかげに向ふにもれもてまばゆ
きわが世なりけり
こゝにても逢はずかたらぬ三年なりきわかれのけ
ふもたゞ夢とのみ

うぐひすにものねもはしきたそがれを山吹垣根春
のあめふる
れもひでの若葉の森ロたそがれてかすかにもるゝ
夕づゝの影
並み松に朝霧まよふ朝づゝみ宵にまぎれし魂たど
らるゝ
麥苗に羊のむれをつどはせて今をわが世の夕ばに
の野べ
ゆくりなきこよひの笛の音のさゐや森の若葉のさ
ゆらぎもせぬ

青海原の祈禱

シャトウブリヤン作

小島酒生譯

われらの眼に殘んの光を湛へたる夕陽はいまきらめく萬頃の波間に沈まんとしたゆたひけるが、刹那に帆綱のあひまにあらはれてなほその光を茫々たる六合の間にそゝぎぬ、

星かげ淡く、船のとよめきにつれて絶えず水平線のあなたにうつりゆきつ、

ラ、ルーイユを占領し、王軍とモーゼの軍隊との衆場を通せし時、日未だ出でざりき。殆んど同時刻に日耳曼的精細を以て、ウルランブルグ兵はラ、ブラチネリーの橋を占領し、サクソン大隊はシエバリールの森にかくれて本隊と通じ、ラ、モンセルよりビラー、セルニーに至る全路をも併て將て横斷し了せしなり。

此の如くにして佛軍の醒覺は悽慘なるものなりき。パセーユのあなた霧は烟に加はりぬ、我が軍隊はこの幽暗の中に打擊せられて殆んど何が爲めに死の手の彼等を要求するかを知らざりき。彼等は室より室に、家より家に戰ひぬ。ヂユクロー將軍は已むなくしてガレンヌの森に其軍勢を集めぬ、ヂユエー將軍は戰慄し昏倒せり、ラブラン將軍は單身ストネーの高原に停立せり。我が軍隊は五キロメートルの戰鬪線を領し、佛軍は東に向ひ、他は北に向ひ、殘余の寡兵は西に向ひぬ。然れども彼等は何れの方面に敵兵を扣えるやを知らず、『皆滅』は其影を現すことなくして襲來水よりも却て多量の鮮血を以て流るゝ事三日に及びぬ。殺戮の所どころにもサン、マッジはことに悽慘なりき。傷負へる武夫の末期の苦痛は殆んど十時間の長きに渡りぬ。たけくも清き人々よ、慷慨激越して降眼の汚辱を拒み、寧ろあつ晴なる死を完ふせんとは願ひけり。

三人決死の武夫はつぎ〳〵に指揮の務をとりぬ、マクマオンデユクロー及ワンファン是なり。少時にしてマクマホン傷つき、少時にしてヂユクロー過ちぬ。ワンファンが縱横の豪氣もげに瞬間の夢なりき。然りと雖もマクマホンは其負傷に責なく、ヂユクローは其過失に責なく、ワンファンは其活路開拓策に責なし。彼を傷けたる描散彈はマクマホンをしてこの悲慘より引がしめたり。ヂユクローの過失は時ならざるにラブラン將軍に退去を命じたるにありて、如是混沌の際、過失と云はんよりは寧ろ一個の誤差なりき。勇悍なるワンファン、彼は活路を拓くに二萬の軍隊を要せしも僅かに二千を得與ひしのみ。歴史はこれ等の三人者を宥さん。セダンの災厄に唯一の責を負ふべき將軍あり、それは皇帝なり。一千八百五十一年十二月二日（クーデタを行ひし日）に結繩せられし所のものは一千八百七拾年九月二日に於て顯現せり。モントマルトル町（逆殺の場所）の災厄とセダンの降服推理式の二項なり、論理と正義とは同じ天秤を以てり。ルイ、ボナパルトの暗憺たる命數は逆殺の黑旗を以て始まり、汚辱の白旗を以て終るべかりしなり。

（未完）

（前半）

朝霧

毛品清春

わすらるゝものにしあらば山のはてにもわれゆかましを
ふとしてはこれみちびきにあらじかをうたがふまでの夢のみだれや
たゞひとりほそきほかげに向ふにもれもてまばゆきわが世なりけり
こゝにても逢はずかたらぬ三年なりきわかれのけふもたゞ夢とのみ

うぐひすにものれもはしきたそがれを山吹垣根春のあめふる
れもひでの若葉の森はたそがれてかすかにもるゝ夕づゝの影
並み松に朝霧まよふ朝づゝみ宵にまぎれし魂たゞらるゝ
麥苗に羊のむれをつどはせて今をわが世の夕ばにの野べ
ゆくりなきこよひの笛の音のさゐや森の若葉のさゆらぎもせぬ

青海原の祈禱

シャトウブリヤン作

小島酒生譯

われらの眼に殘んの光を湛へたる夕陽はいまきらめく萬頃の波間に沈まんとしてたゆたひけるが、刹那に帆綱のあひまにあらはれてなほその光を注々たる六合の間にそゝぎぬ、

星かげ淡く、船のとよめきにつれて絶えず水平線のあなたにうつりゆきつ、

ラ、ルーイユを占領し、王軍とモーゼの軍隊との…
せし時、日未だ出でざりき。殆んど同時刻に日耳曼的精細を以て、ウルテンブルグ兵はラ、ブラチネリーの橋を占領し、サクソン大隊はシエ、バリールの森にかくれて本隊と通じ、ラ、モンセルよりビラー、セルニーに至る全路をも併て將て横斷し了せしなり。
此の如くにして佛軍の醒覺は悽慘なるものなりき。バゼー…ユ、我が軍家はこの幽暗の中に

水よりも却て多量の鮮血を以て流るゝ事三日に及びぬ。殺戮の所どころにもサン、マンジはことに悽慘なりき。傷負へる武夫の末期の苦痛は殆んど十時間の長きに渡りぬ。たけくも清き人々よ、慷慨激越して降服の汚辱を拒み、寧ろあっ晴なる死を完ふせんとは願ひけめ。
三人決死の武夫はつぎつぎに指揮の務をとりぬ、マクマオン、デュクロー及ワンファン是なり。少時にしてマクマホン…エクロー斃ちぬ。ワンファンが縱横

帆柱といはず帆架といはず船はさながら薔薇色もて染めいだされたり、
雲漠々としてさだめなく東にうつりゆき、月おもむろにのぼりきたりて其あたりの空玲瓏としてはがらなり、北の方水平線には星斗日月と光榮ある三稜象をつくりあはせるがたゞみる龍嘯七色を帶びて海より天に冲し爛として水晶柱の穹窿を支ふるに似たらんかし、
そは、かばかりの壯觀に浴して神意の崇高胸に映せざるものありとせばまことにあはれなげかはしきかぎりならずや、
涙われとはなくに双頰につたはりしをりから、凡てのともがら、そがかぶりものぬぎつゝ、打沈みたるしらべもてみな船人を守りたまふて救ひの女神(Notre-Damede-Bon-Secours)に心からの聖歌をさゝげぬ、
あゝ渺々たる蒼海原のたゞなかに消えゆく落紅の大觀をうちあふぎつゝ、祈る聲音のいかばかり身にしむことよ！わはれ弱き船人の祈りにも救ひの母の御靈やかよはん！海のもたらす敬虔のおもひ、無限にむかふときのわれらがまごゝろ波のまにまにひろごりゆく歌のふしぶし、しづむ海若れちくる夜、うるはしきかづきのもなかにわれらの船のうるはしき、讃美にうたれし教徒の人々、祈りに餘念なき森嚴なる僧侶、深潭に身をよせかけ、左手もて天の西門に夕陽をとどめ右手もて月神をあなたの空によびむかへつゝ杳漠たる無邊の境心して、かよわき人間の聲音に耳かたむけたまふ上帝のみすがた。
こはなかなかに刷毛もて描くべくもあらず、たゞ人の心に感じふれよとやいはん。

(Génie du christianisme 一の節)（[illegible]訳）

人生大夢

（ダンテ、「新生」二十三章詩篇）

蒲原有明

いともあはれみ深く、すぐれて世の情に富めるうら若き少女ぞわがかたへにたてる。こはわが苑の君にねがひもとめしをりなり。舌頭に迷へるあらあらし言の葉、眼のうちかなしきけはひに誘はれ、うちおどろき、すすり泣きはその呼息をもとめむばかり。
ゝゝうつぐす傍ら、泣きあぐる少女を見て、やさしのをみな子幾人、ことあらむとて來つ。さてかの少女を去なしめぬ。

讀者讀

○明治詩人と自然

臨川

古今幾世、東西幾里、人住む所に詩人あり、詩人のあるところには必ず代により、地を異にして、それ〴〵其民に獨特なる自然觀を歌ひ出でたる詩歌の殘されたるを見ずんばあらず。人間が未だ自然と戰ふ格好の武器を具へざりし古代にありては、只管自然に畏戰のきしと同時に、一方には自然を友として己と禽獸草木との間に些の檔壁をも樹つるを知らず。下て希臘時代に到れば未だ自然を人視する形跡を存し乍らに、その古代の民の如く、只管驅のき畏るゝのみにはあらざりき。『自然に歸れ』と叫びたるルツソー等を殆嚆とせる近代の詩人を言はんか、其自然觀なるもの〜漸く複雜を極むるに到り、質素なる古代民のそれの如く一見は見分き難きも、各自獨特の見地を具へ、あるはライダル山中の詩人が隱逸となり、あるはコンコルドの寫者が冷醒となり、あるはシヤトーブリアンが幽愁と化して、後代の嘆慕をひきぬ今夫れ

I love not man the less, but nature more.

と謳ひしバイロン卿の自然觀は、『巡禮行』の末句に

Wie reg'iz' ich im Kühlen,
Dieser sehnen Sommernacht!
Wie still her zu fühlen,
Was die Seele gluehlich macht!
Läßt sich kaum die wonne wollüeh,
Und doch wolt' ich, Himmel, dir

Tausend solcher Nächte lassen,
Gäb' mein, Madchen, Eine mir

と謳ひしゲーテの自然觀に比して、一段と重きを自然のかたに措けるを見るべく、『常に自然をみて之を喜ぶは可なり、常に自然をみて己を忘るゝは不可なり』とてゲーテを駁せしユーゴーはゲーテよりも亦一段人生のかたに重きを措きしを見るべし。全じく自然を觀るに樂天主義を以てする著にても、ワチーズウチースはホレースやう、ホンタンに異り、これ等の人はまたエマルソンに異り、エマルソンの後繼者たるトルーは『我は最も馴し難き野獸を愛す』と叫びて、一層劇烈なる樂天的自然觀を示しぬ。なほセント、オーガチンが自然を有知と呼べる、我國にて西行芭蕉の徒の自然觀に一種獨特のさびを帶べるなど一々は擧げ難たかるべし。

希臘には希臘の自然觀あり、萬葉時代には萬葉時代の自然觀あり、十九世紀英國には十九世紀英國の自然觀あり。更に精察して個々の詩人に個々獨特の自然觀の發揮せらるゝを見ること凡そ上の如し。翻て明治詩人の謳へる所のものをみるに、其人特有の自然觀と云ふべき程のもの〜隱約の間にだに窺ふことを得べからざるはいかに。強ひて言はゞ、蘆花氏が『自然と人生』を始として民友社一派の詩人の作にワチーズウチース流の樂天主義の發露せるなみると、藤村氏が『寂寥』『草枕』など數扁のあはひに幽愁の面影を捕捉しうると、鏡花氏の作品を通じて神秘的自然觀のおぼろげに檔間見らるゝとが頂上なるべし。一代の風尙未だ定まらず、世態漸く複雜なる今日なれば、明治日本の自然觀と言ふべき程の好ましきものはなくとも、せめては民衆教導の職を帶びて、其眼高からざるべからざる詩人に於て其人一個の的確なる自然觀たりとも窺ひみたしと思ふ我等の願はあながち非理にも

あらざるべし。

總じて今日の詩人に關けたる所は熱烈なる信仰にあり。自然觀と云ひ、人生觀と云ひ、要するに皆その人信仰の分身に外ならず。此に於てか我等世の批評家と與に作家の「修養」を叫ばんと欲す、されど我等が所謂修養は今日の批評家の稱ふる如く單に學識と讀書とを指すものにあらず。素より廣く東西の書に涉り學識を養ひ、見聞を博くするほ、一個人の修養に於て必須の條件たるべしと雖も、そが全体にはあらず、またそが主腦にはあらず。書は寧ろ冷靜の友なり、我等をかこむ萬有の熱情にして、無盡藏なる秘庫に如かず。世の才士雅人、先づ君が靈宮を誠正にし、君が所念を崇高にして、自然に對し、人生に對し深く頓悟する所あり、切に感激する所ありて、然る後に君が紙に向ひて綴る所の文字をして、君が血たり肉たるものたらしめよ。其時君が人生觀なり、自然觀なり始めて人の認むる所となんらん。

○一代の大弊

神は人間を隋圓形には作り玉へり、そこには二個の焦點あり、『事實』と云ひ、『理想』と云ふ。

禍ひなる哉今人、縱に壓せられ、橫に擴げられて、卿等は不具者となれり。隋圓は圓と化して唯々事實といふ一個の中心を有するのみとなりぬ。

理想なし、故にまた感激なし、一代の大弊茲に在り、炳として火を睹るよりも明けし。

思潮の傾向此の如し、幻想と理想とは今人に於て同字義なり、差別あることなし。それ幻想は數式上無限なり、目的なければなり、然るに理想は有限なり、標的あればなり。事苟くも一定の有限數字にて現はしうる限り、敢敢數の所屬なる間は、一を積んで二となし、二を積んで三となし、積みつんで萬に達すべく、億に達すべく、兆及ぶべく京到るべし、必ず及ぶべく必ず到るべし。例へば人道問題の上にみよ、苦しむる者あり救ふべきなり、虐ぐる者あり責むべきなり、『世界は滅ぶとも正義をして存せしめよ』(Fiat justitia, pereat mundus) と叫ぶ者あらば、そは幻想にあらず、夢物語にあらず、必ず到り達すべきものなり。曰く社會進化の法則より云々、曰く國家經濟の見解に照して云々我は顏なる學者、經世家の所謂公平なる解決案と前者の絕叫との相違は、縱令ば一と萬との相違の如きか。一は簡單なり達し易し、萬は複雜なり到り易からず、故に萬をすて〜一をとると言はゞ、これ公平なる擇擇法にあらず。要は一と萬と其皮層なるものをすて〜、其適切なるものを擇ぶにあり、いかに況んや萬必ずしも到り難からざるに於ておや、こゝに人あり、其人一片の義理の爲めには、一里の隣村を訪ふすら懶しとするも、己の利益とあらば千里をも遠しとせざるは世の常ならずしならずや。深く感ずる所あり、切に信ずる所あらば、千里を往いて一里の勞をも覺ゆざるは、蓋し靈妙なる人心狀態の作用ならんか。一の捨つべきを知りて怙息に耽り、萬の採るべきを思ひて進むに懶きものあらば、一個人にまれ、社會にまれ、そは氣の餓へたるなり、理想なきなり、感激なきなり、滅びに近きものなり。吁、一代の大弊、炳として火を睹るよりも明けし、思を茲に致すもの、靈性の火に點火して猛然として奮ひ起たざるべけんや。

エメルソン曰はずや、「正しき判斷力に照しみよ、最も抽象なる眞理は最も實際に近きものなり」と。世の人、請ふらくば君が心を縱に開くを忘るべからず。

Tausend solcher Nächte lassen,

○新人となりて新衣を着けよ

ア、人、新人となりて新人を着けよ行く年をして行くがまゝに逝かしめ、行く水をして行くがまゝに流れしめよ。古きものは去りつゝあり、唯に慣習と思想のみにあらざるなり。古き悲と古き迷信とまた過古の墓田に葬れよ、鎔岩の均一と熱度とを持せる新理想の瓊火もて全世界を破へよ、古き車は繕へよ、嘻々として君が肩な新車の上に置けよ、狐疑して手にせるヘブリユー希臘の文の古き悲を誘ふことあらば禍ひなる哉君は。

歳暮に暮れんとす。今年も亦餘日多からず、況んや陰陽の短景を能すあり、春氣微茫として、池南の楊柳に黄芽をみるの日近きにあらんとすゝ請ふらくば讀者と與に、春服して新理想の歳を迎へんかな。

○旅にして見る景物よ、始て逢ふ所のものは、永久に別るゝ所のものなり。されば旅人は時計の針の刻む一刻毎に、且つ生れ且つ死てぞ行く。

歳暮に暮れんとす、天つ故郷をはなれて無限旅上の遊子、今更に魂の愴然たるを覺へずばあらざるなり。（以上蕗水生）

悲愁

搖落の聲を聞きては誰が眼にか涙なかれざる、げにも商飈遠く雲を吹き山を拂ひ澤に分け入る其響き、悲しきかな、遊子此に對して泣き行客

て何となく風の行への跡おはまほしく、懷かしくも亦心ひかるゝ方あるは如何に、秋のいぶきの端なくも、人の心の緒にふれて自然と共に調合はする故にてもあるか、思へば宇宙の物雖然紛然として又幾多矛盾の中とに羅列せらるとは言へ一大調和の目に見ねぬ間に存して人と人とをつなぎ人と自然とをつなぎ悲しかるべき秋風の胸に入りてはなつかしき響おこすにやあらむ、實にも寂寞悲愁の中默契の樂あり、孤獨寥廓の間人は自然の懷に入る詩人歌うて曰くSweet though in sadness

と此の如きこと言ふにやあらむ

去れど又我尊き詩人が手になりし幾多の詩篇を讀みゆく時、心憧かれ、樂しき境にさまようとはいれ、胸の底には言ひ知らぬ悲しみ覺ゑ、なか〳〵に涙の落つること禁じがたきはいかに。人生の歸趣は悲哀の本体なるか、世界の終極は果して如何、げにも流轉の流れ烈しくして、無常の襲ひ來る時を知らずと安き心もなかりしと云ふ古の人の如く、思へば、今と云ふも彈指の間、よは今なるものありや、今の我は後の我にあらず、先の我は今の我にあらずゝ河水の奔湍よく瀑布となるも瀑布なるもの能く何處にありや、此は只水の分子の連續に過ぎざるべし、同じく我一個の身体なるもの此を解剖し盡くすに於て我なるものは何處にありや、同じく此を時間的に觀察するに人生れて五十途に死に到る、げに覺ゑずと雖も切刹又切刹轉化息むなきを思へば此を時間的に見るも我なるもの途に常住なきものなり、廣く人類全体に見、世界全体に見る、此の如くにして變轉息むなきものの途に何に歸せんとするか學者說ひて曰く幾萬年の後世界消滅の事あやまつ可からざるなりと虛無說者は說ひて曰く人類は永却不究の洋中に浮び出でたる蜉蝣の果敢なき運命なりと、

in Eilig,

雪山十二年の苦行釋尊の覺りしと云ふ涅槃解脫も只一時消極的安慰のそれに過ぎずとせば如何、即ち悲哀なして人生宇宙の眞像たらしめばいかに、吾人はいづこに安心の地を得んとすべき。厚き詩人が大なる直覺によりて得たりつる人生の眞趣の果して此の如く此を讀む者をして自づから悲しき節に胸痛ましむるものなりせば吾人此に厭世觀を生ぜんとするも理無きにあらざるに似たり、非か、（長梧子）

○現代文士の立脚地

詩人と云ひ豫言者と云ふも本來其質に於て異るなし、分水嶺の水は同じ巖厳を出るも遠くに其洋を異にす、時世は同一質のものをしてよく詩人たらしめ、よく豫言者たらしむ、カーライル既に之を說けり。社界の人心と風俗習慣と未だ歸一する所を知らざる混沌の時世に生れたる天才は多く豫言者となり、人心風俗既に歸向あり、整然として等一したる理想なる國民の間に生れたる天才はむれと詩人の形をとる。マホメットをして沙翁の位地に生れしめば、渠は詩人とならん、沙翁をしてマホメットの位地に生れしめば渠は豫言者とならん、『コーラン』に詩的の調律あり、翁の戲曲に豫言者の面影あり、相去る僅かに一竿のみ、確然たる殄域はたゞ外形の間にのみ存す。

惟みるに當面の時勢は、科學界と物質界の亂急なる進歩を過て、古來のあらゆる事物を打破し、未だ過渡時代にありて反省（レトロスペクト）の域に達せず縱令ば一個の星霧にして、固形体のものにあらざるなり。かゝる時代は詩人に格好の時代にあらず、寧ろ豫言者として其所を得せしむべきなり。されば近代の詩人に豫言者說教者の面影あるを怪まんや。トルストヒ伯の後半生をみる者、ゾラが晩年の述作にみる者、其他イプセンにニーチエにゴルキーに時代の歸趣を窺ふもの、誰か我言を以て痴人夢を說くのたぐひとなさん。

○科學と文學

科學と文學との關係、重要な問題です。先日韻文朗讀會の席上で、久保醫學士が『醫學と文學の關係』と云ふのを講ぜられました。醫學と申しますれば、生理學――もろ〳〵の科學の王とよばれます――を土臺として、最も Psyche に近い科學でありますれば、之と文學との關係、最も興味多い問題で御座いましよう。學士の如きは此部分に向て獻賞すべく格好の位置に立つ人と申さねばなりませぬ、然るに先日の演說から見ますると、我々はたゞ失望の餘り、一苦笑を洩すの外はありません、臆面なく申しますと。

學士のみならず、世の人の多くは科學と文學の調和と云ふことに向て、餘り淺薄な見解を抱いておると申さねばなりませぬ。假へて曰ては、酒と砂糖とを雜ぜまして、旨い〳〵と雜し立てる、ような、もので御座いましよう、之では下戸も上戸も受引きません。深く根底に溯て有機化學者が砂糖からアルコールを造るやうな妙機に觸れられんことを望みます。

佛國革命の動機はニュートンを中心とすとはテーンの言分です、之には七分の道理があります。この革命と先後して起りました文界の「ローマンチズム」も科學的精神の物昂に歸因すと申せましよう。それから後に出たダーウインの進化論、之がまた精神界に及ぼした影響は非常なもので、文界の寫實主義と申しますのは、畢竟其所產です。丁度

化學者が砂糖からアルコールを作るように、近世科學は現代の文學を產んだのです。

調和すべからざる所を調和させるにも及びますまい。甘いと辛いとを丁度に雜ぜて明酒の妙たなすには、化學の理論でなくて寧ろ其人の手腕です。科學と文學の調和と申しますのもまづこれで、理窟一ぺんにはゆきません、ラスキンの手腕を要するのです。

漫草

●遂には萬朝紙上『椿姫』の掲載禁止にあへるあり。幾くもなくして新小說亦發賣禁止の厄に逢ひぬ。吾人今に於て事新らしく、藝術と道德の關係を論じ、敢て諸公の賢明なる措置に挾まんとするものにあらず。理論は兎も角も實際に於て些少だも風敎に危害あるあらば、掲載禁止、發賣禁止、これ寧ろ當然の措置なるべきのみ。何ぞ必ずしも藝術と呼號し、美と絕叫するの要あらんや。

然れども吾人の淺學菲才なる、窃に顧みて、此間一點の疑義なきを得ざるなり。賢明なる諸公は何が故に『梅ごよみ』『人情本傑作集』の公刊を禁示せざるか。ゾラ、モーパッサン其他の翻刻及輸入を禁止せざるか。諸公は已に『椿姫』の掲載、新小說の發賣を禁止せるにあらずや。『脚本傑作集』『西鶴全集』の刊行を禁止せるにあらずや。諸公は何が故に、卷頭常に幾多艶麗婦人の寫眞を挿み、此の故を以て發賣部數、諸雜誌中最多の位置に居ると稱せらる〜某雜誌の發行を禁止せざるか。諸公は

る事實を解釋するに苦しむ自己の不敏を悲しむこと切なり。庶幾くば賢明なる諸公の懇篤なる敎示を仰ぐことを得んか。

而して吾人更に以爲く、風敎に害あるもの、必ずしも彼のキッス小說のみに限らず、彼の雜誌屋店頭幾多の勿平的作物のみに限らざるべしと。彼の白縫譚の如き、自電也奈保譚の如き俠客傳の如き、其他都下幾拾の劇場に於て演ぜらるゝある夢幻劇否、荒唐劇の如き、大概、荒唐無稽、何等高尙なる眞意、主張の存するものあることなく、只管趣味低劣なる讀者看客の、飽る可らざる弱點に投ぜんとするもののみ、而して其弊害實に計るべからざるものあるなり。江戸ッ兒の兄哥たして「べらんめい」を口にし永く舊志想の渦中を脫するを得ざらしむるもの、此等俠客傳の影響其多きに居ると云ふにあらずや、以て彼の荒唐無稽なる作物、演劇が、志想未だ賢實ならず、動もすれば妄想に陷り易く、極端に走り易き少年子弟の絕叫す動搖せる性格に與ふる影響の如何に大なるべきかを想像するに足らん。思て茲に至る、吾人慓然として肌膚粟するを覺ゆるなり。

噫、其本を措き、其末をとがめ、其大を逸し其小を追ほんとす、吾人不敏、其可なる所以を知らざる也

●吾人は敢て講人取材の境地によりて、直に其作物の價値、如何を定めんとするものにあらず。要は只其詩化純化の手腕如何にあるのみ。然れども作家たるもの始より衷心含むところありて、故らに材を其人の上に取り、中傷譏誹以て卑陋なる俗衆の意を迎ひんとするが如き、吾人は單に作者心術の陋なるを憐むのみならず、此輩の決して文壇に存在すべき權利を有せざるを思はずんばあらず。

て何となく風の行への跡おぼほしく、懷かしくも亦心ひかる〜方

Transend solcher Nächte lassen,

何となれば、地方の狀況は日々に變化し、昨日まで山間の小驛も、今日よりは鐵道通じて忽ち旅客貨物の集散地と爲れるもあり、舊來國道に沿ふ市街も、鐵道に旅客を奪はれて、往來の中央に雜艸の繁茂するもあり其の冷熱の變化と、もに、旅館、宿泊料車馬賃等の費用まで、著しき變化あるを免れず。此の如き變化は、日々夜々に繼續する鐵道工事に伴ふて發生す。之をも察せず、五年十年前の舊材料に依り、漫然案内記を編輯するあらば、其の旅客を誤まるは、狂へる磁石の使用に異ならず。

日々夜々に變化する地方の實況を、能く事實に違はず編述せんとするには、斷へず全國に巡廻し、身親しく實地に臨むに、あらざれば能にず。此の如きは資本と時間との多くを費やさざる可らず。是れ容易の業にあらず。而かも此の困難に堪る者出るにあらざれば、完全なる旅行案内記の世に出ることを期し得べからざるなり。

余の如きは、生來旅行を好み、暇あれば南船北馬席の煖なるに暇あし。而かも自ら完全なる全國漫遊案内を物し得るやと顧りみれば、今年見る所は既に昨年見るときと同じきを得ず。爲に世人を誤まらんことを恐れて容易に手を下すこと能はざるなり。遊び好きにして旅行狂なる余の如きすら、尙ほ此の如し。況して平生一室に坐し、他人の書きたる材料により、全國の旅行案内を作るが如きは、狂へる磁石の供給と何ぞ異ならんや。案内記の編述難い哉業や。

○婦人問題

斷水生

近代の社會に於て注目に値ひすべきもの、一は婦人問題なり、混沌たる千古の疑題、遺傳と慣習と一時の蹉跎と其眞相に到るの路抑遏して容易に解決すべくもあらざりしが、時は眞理の保證者なり、辨ずるもの馭する者、交互及を交ゆる中に、吾人は疑ふべからざる一道の光明の前路を指して略ぼ謬るなきを認めんと欲

證して彼女の同性の爲めに氣焔を昂げしめよ、更に天照大御神とセミラミスとデイドとをも彼女の同性なり

力の平均を立てよ、女人の水平智が必ずしも男子のそれに劣れりとは速斷し難し、濠洲の蠻地に行きたる移

謳歌すべき眞理の探討者なり、今日の學者の理想とすべき適れなる賢才なり。

路は何の茨棘か之を賛まむ。

（四）

きものあり、物理學者は之を說明すべく、「エーテル」波動論を賓けり。物理學者の假說したる「エーテル」の波動は眞理にして、宗教家の信ずる神のみは獨り不眞なるか。同じく意識の上に昇り來るものも、智よりすれば眞にして、情よりすれば不眞なるか。

（七）

眞理とは何ぞ、

昔は「フィニクス」と言ふ鳥あり、「智識樹」の葉を

ら出てゐるのであるか、異とすべきは、內に兩忘庵主の飲醍醐といふのが讀載されてゐる。禪門の大意を傳へられるもの、篤志の人に一讀を勸める

○曉星　は蜻蛉文學の改題、北海唯一の文學雜誌である。曾根芙蓉氏の長詩、別れ路が載つてゐる。

○新藝林　といふ雜誌がある、三號まで出てゐるか、主意は、寄席に於ける音曲、講談等の改良を計る爲に知士の文士の贊助を受け、其等の人の作物を載せてあるか、其を更に寄席で講じるのであるとか、發行人は

す。

文明の光に浴する國々の中に澎湃として漲り亘れる潮流は、女性の爲めに職業の自由、教育上並びに政治上の權利を認諾せんとするにあり、これ疑ふべからざる事實なり、いかにと言ふに、そは唯拾九世の社會が吾人に遺したる貴なる立憲共和、自由平等の寶珠を割て其幾分を弱性の上に頒たんとするに過ぎざればあり。

眞理の常道なり、然れども世態の一大變移なり、かるが故に識者は刮目して其成行の奈何を觀んと欲す、ゴールの蠻民に犯されし羅馬の如く廿世紀未來の社會は、今日女で輕視し來りし女性の侵略に逢ひて、尠からざる變遷と恐懼とを感ずるとあるべし。遠く太古の歷史を考ふるに處世の術は實に婦女の掌中にありき、再來綿々として隱約の間に社會が蒙りたる婦女の感化のいかに偉大なるかを思はゝ、吾人の斯問題に對する態度は充分丁寧深切ならざるを得ざるべし。

社會の半數を占むる婦人の勃興、權力の分配、これ由々敷大事なり、希望を以て之に對する者も、落膽を以て之を迎ふる者も等しく決皆して其前路を瞻望せざるべからず。想ふに過古幾世の文明は多く男子の手に成れりき、强性の秀才は到る所に輩立して文明の樹立、理想の現實にあらん限の力を盡したりき、而して其成果は實に今日の文明として吾人に遺されたり、——今日の文明とは何ぞ、幸なる哉東邦の吾等は自家獨特の文明に加ふるに、印度支那の文明をも、西歐の文明をも並せ加へて頗る多方面の興味を味ふをうる位置に樹てり、されぞ吾人をして望蜀の望を抱かしめば、吾人の崇むる豫言者の凡てが釋迦と言はず、基督と言はずマホメットと言はず、凡て南方花靜かに草柔かなる熱帶の地に產して、所謂風悲み、日曛り、蓬斷へ草枯る朔北の地に一の大なる豫言者をも見る能はずして、轉た文明の單調を來せし歷史の推移を悲しむものなり、當然に殊別の傾向を賦與せられて起りたる亞非利加または濠洲の民の早く强大國の爲めに壓伏せられて、かしこに咲くべき異花の蕾にして摘まれ了んぬるを惜む

ものなり、殊に過古の文明の世界を通じて獨り男子の手にのみ成就せられし單調落莫に嫌焉たるものなり、されぞ見よ、時は來れり、天の配濟の寔に徒爾ならざるを示すべき時は來れり。

近世の一大傾向たる社會の融和、感情の世界的等一、これ宗教も文學も與に指して進む所ながら、其が實用の方面に於て男子の多く爲すなきは萬人の等しく認めざるべからざる所なるべし、ある意義に於て言ふときは男子は凡て理想家あり、智力の上に於ても、實業貨殖の上に於てすらも。されば彼等が日常の社會に於ける才能は至て拙劣なり、此点に於て婦女子は優に獨行すべき天賦と根據地とを有てり。世或は說を立つる者あり、婦女子は絕体に男子の下に立つべきものなり、いかにと言ふに、古昔よりいかなる方面にも婦人の天才の未だ大に顯はれたる者あければなりと、好哉言や、論議にたけたる女性をしてサッポーをも紫式部をも引證して彼女の同性の爲めに氣焰を昂げしめよ、更に天照大御神とセミラミスとデイドとをも彼女の同性なりと主張するに何等の異義を挾まざらしめよ、アゝされぞ『神曲』の作も、『トランスフィグレーション』の圖も、哲學系統も、新宗教の建設も、佛國の革命も未だ一人の女人の手を煩したるを聽かざるなり、此点に於て『彼』に正敵なし、事業の轉た非俗的なるだけそれだけ、轉た『彼』の領地は廣し、『彼』の領地は神聖なり、必須なり所謂天才をして彼の壇場たらしめよ、吾人の思議はこの公平ある立脚地の上に創らんとす。

過古幾世の歷史に鑑みて女人の天才の未だ大に顯れたるものなしと言ふは可あり、其いかなる方面にも顯るべき希望なしと議するは非なり、駿馬を櫪櫪に伏せしめてこの馬駑なりと言ふが如く、教育及政治上の權利をも職業の自由をも甚だしきは即身体の健全すら剝奪して女人無能の聲を高くす、酷ならずや、女人に天才なし、されぞ是を以て直ちに女人の智識を卑下する者あらばそは大なる謬なり、過く世俗の間に索めて智力の平均を立てよ、女人の水平智が必ずしも男子のそれに劣れりとは遽斷し難し、濠洲の蠻地に行きたる移

謳歌すべき眞理の探討者なり、今日の學者の理想とすべき適れなる賢才なり。

（四）

路は何の茨棘か之を賣まひ。

○產婆學雜誌は名の示す如きもの、日本橋楠田病院から出てゐるのであるか、異とすべきは、內に兩忘庵主の飮醍醐といふのが讀載されてゐる。禪門の大意を傳へられるもの、篤志の人に一讀を勸める

○曉星は蜻蛉文學の改題、北海唯一の文學雜誌である。曾根芙蓉氏の長詩、別れ路か載つてゐる。

○新藝林といふ雜誌がある、三號まで出てゐるか、主意は、寄席に於ける音曲、講談等の改良を計る爲に知士の文士の賛助を受け、其等の人の作物を載せてあるか、其を更に寄席で講じるのであるとか、發行人は

す。

文明の光に浴する國々の中に澎湃として漲り亘れる潮流は、女性の爲めに職業の自由、教育上並びに政治上の權利を認諾せんとするにあり、これ疑ふべからざる事實なり、いかにと言ふに、そは唯拾九世の社會が吾人に遺したる賚なる立憲共和、自由平等の寶珠を割て其幾分を弱性の上に頒たんとするに過ぎざればなり。

眞理の常道なり、然れども世態の一大變移なり、かるが故に識者は刮目して其成行の奈何を觀んと欲す、ゴールの蠻民に犯されし羅馬の如く廿世紀未來の社會は、今日まで輕視し來りし女性の侵略に逢ひて、渺からざる變遷と恐惧とを感ずるとあるべし。遠く太古の歷史を考ふるに處世の術は實に婦女の掌中にありき、再來綿々として隱約の間に社會が蒙りたる婦女の感化のいかに偉大なるかを思はゞ、吾人の斯問題に對する態度は充分丁寧深切ならざるを得ざるべし。

社會の半數を占むる婦人の勃興、權力の分配、これ由々敷大事なり、希望を以て之に對する者も、落膽を以て之を迎ふる者も等しく決皆して其前路を瞻望せざるべからず。想ふに過古幾世の文明は多く男子の手に成れりき、强性の秀才は到る所に矗立して文明の樹立、理想の現實にあらん限の力を盡したりき、而して其成果は實に今日の文明として吾人に遺されたり、——今日の文明とは何ぞ、幸なる哉東邦の吾等は自家獨特の文明に加ふるに、印度支那の文明をも、西歐の文明をも並せ加へて頗る多方面の興味を味ふをうる位置に樹てり、されど吾人をして望蜀の望を抱かしめば、吾人の崇むる豫言者の凡てが釋迦と言はず、基督と言はずマホメットと言はず、凡て南方花靜かに草柔かなる熱帶の地に產して、所謂風悲み、日嘯り、蓬斷へ草枯る湖北の地に一の大なる豫言者をも見る能はずして、轉た文明の單調を來せし歷史の推移を悲しむものなり、當然に殊別の傾向を賦與せられて起りたる亞非利加またほ濠洲の民の早く强大國の爲めに壓伏せられて、かしこに咲くべき異花の蕾にして摘まれ了んぬるを惋む

ものなり、殊に過古の文明の世界を通じて獨り男子の手にのみ成就せられし單調落莫に嫌焉たるものなり、されど見よ、時は來れり、天の配濟の寔に徒爾ならざるを示すべき時は來れり。

近世の一大傾向たる社會の融和、感情の世界的等一、これ宗教も文學も與に指して進む所ながら、其が實用の方面に於て男子の多く爲すなきは萬人の等しく認めざるべからざる所なるべし、ある意義に於て言ふときは男子は凡て理想家なり、智力の上に於ても、實業貨殖の上に於てすらも。されば彼等が日常の社會に於ける才能は至て拙劣なり、此点に於て婦女子は優に獨行すべき天賦と根據地とを有てり。世或は説を立つる者あり、婦女子は絶体に男子の下に立つべきものなり、いかにと言ふに、古昔よりいかなる方面にも婦人の天才の未だ大に顯はれたる者なければなりと、好哉言や、論議にたけたる女性をしてサッポーをも紫式部をも引證して彼女の同性の爲めに氣焰を昂げしめよ、更に天照大御神とセミラミスとデイドとをも彼女の同性なりと主張するに何等の異義を挾まざらしめよ、ア、されど『神曲』の作も、『トランスフィグレーション』の圖も、哲學系統も、新宗教の建設も、佛國の革命も未だ一も女人の手を煩したるを聽かざるなり、此点に於て『彼』に正敵なし、事業の轉た非俗的なるだけそれだけ、轉た『彼』の領地は廣し、『彼』の領地は神聖なり、必須なり所謂天才（ヂニアス）をして彼の壇場たらしめよ、吾人の思議はこの公平なる立脚地の上に創らんとす。

過古幾世の歷史に鑑みて女人の天才の未だ大に顯れたるものなしと言ふは可なり、其いかなる方面にも顯るべき希望なしと議するは非なり、駿馬を櫓櫪に伏せしめてこの馬駑なりと言ふが如く、教育及政治上の權利をも職業の自由をも甚だしきは即身体の健全すら剝奪して女人無能の聲を高くす、酷ならずや、女人に天才なし、されど是を以て直ちに女人の智識を卑下する者あらばそは大なる謬なり、遍く世俗の間に索めて智力の平均を立てよ、女人の水平智が必ずしも男子のそれに劣れりとは遽斷し難し、濠洲の蠻地に行きたる移

……チは徧に好個の思索家なり、
路は何の荊棘か之を賚まむ。

謳歌すべき眞理の探討者なり、今日の學者の理想とすべき適れなる賢才なり。

（四）

きものあり、物理學者は之を説明すべく、「エーテル」波動論を眞けり。物理學者の假説したる「エーテル」の波動は眞理にして、宗教家の信ずる神のみは獨り不眞なるか。同じく意識の上に昇り來るものも、智よりすれば眞にして、情よりすれば不眞なるか。

（七）

眞理とは何ぞ、

昔は「フィイニクス」と言ふ鳥あり、「智識樹」の菓（み）を

……ら出てゐるのであるか、異とすべきは、内に兩忘庵主の飲醍醐といふのが讀載されてゐる。禪門の大意を傳へられるもの、篤志の人に一讀を勸める。

○曉星は蜻蛉文學の改題、北海唯一の文學雜誌である。曾根芙蓉氏の長詩、別れ路か載つてゐる。

○新藝林といふ雜誌がある、三號まで出てゐるか、主意は、寄席に於ける音曲、講談等の改良を計る爲に知士の文士の賛助を受け、其等の人の作物を載せてあるか、其を更に寄席で講じるのであるとか、發行人は

す。

文明の光に浴する國々の中に澎湃として漲り亘れる潮流は、女性の爲めに職業の自由、教育上[illegible]由々敷大事なり、希望を以て之に對する者も、落膽を以て之を迎ふる者も等しく快[illegible]

住民の間の男女両性を比照するに、新社會の建設に於て其成功は却て女子の方にありと言ふ、思索瞑想の事業に當りて男子が其獨特の成果を上ぐる間に、社會的實務的の方面に於て女子は優に其覇を稱するの權利あるなり。心的に男女の區別は女子が其神經中樞の下部の著しく發達したるにあり。要するに女人の勃興が社會に及す感化のいかんは今後に徴すべき問題なりと雖も吾人は如上の見地を以て偏に其發達を祈り、併せて今日の社會に優者たり、指導者たる男性が女性の教育、發達の自由、より廣き閲歴、より大膽なる職業に向ふべき進路を阻害せざらんとを希望する者なり。

~~嘗て故一葉女史の作物を批難し、閨秀作家の作物に入るべき材料を限らんと擬したる批評家あり、嘗て女子大學の其閲歴を思議したる批評家あり、嘗て女子大學の起らんとせしとき盛に其無用論を主張したる論客あり。嘗て大學生に對する酷評を連載して正義人道の聲なりと叫びたる新紙あり。アヽ皆非なるのなり。~~

眞理とは何ぞ

（一）

「眞理とは何ぞ」

古の哲人によりて發せられたる有名なる疑問あり、無限に繰返さるべき混沌たる疑題なり。

今日は理學（哲學科學）の世なり、故に眞理の世あり、眞理を拾得すべき唯一の道は理學にあり、かるが故に人、理學に據らざれば眞理の道に進むによしなしと。

理學の常道は論理の學之を教ゆ、歸納演繹は眞理を計るべき尺度なり、かるが故に歸納演繹の法に合したるものは凡て眞なり、歸納演繹の法に悖りたるものは凡て眞にあらずと。

眞理とは何ぞ、信とに斯の如きか。

（二）

歸納演繹の法に合したるものはこの世に在らざるもキフ、マケイッチの研究せし象の卵は實在せざれども、キフ、マケイッチの如き學者は今日の時代に尠きを痛まず、この世に在らざるもこの世を益せざるも、この世を毒せざりし彼の眞理は寧ろ憂すべきに庶幾からんか。

（三）

所謂比較研究は科學の精髄あり、されば科學の教ゆるとする眞理の上には必ず『比較』の二字を冠すべきものなるとを忘るべからず、眞理の絶對なるべくして既に比較の二字を冠らざるべかはざる曉にも、猶且眞理たるをうべきものなるにや。

哲學（形而上學）は絶對の眞理を究むる學ありと謂ふ、然るに今日の哲學は歸納演繹の法に據れり、歸納演繹の比較によりて絶對の眞理に達すべき矛盾の徑路は何の茨棘か之を賞まむ。

（四）

のもこの世に益なきものも等しく眞理なるや、はた歸納演繹の法に合したるものは、渾なこの世にあるもの渾なこの世を益すべきものなるや。

ゴゴルの小説に現れたるキフ、マケイッチは鳥の卵より推算して、若し象にして卵を產まゝ其大は幾何なるべきか、また其卵を破るに要すべき火藥の量は幾何にて可なるべきかとの問題を研究せり。

キマア、マケイッチは歸納演繹の法に於て悖る所なかりしかど、彼の研究せし對象は忘想中の產物にして、洵とに此世に實在し、またはこの世を益すべき性のものにはあらざりき。かくても歸納演繹の法に合したるものは渾なこの世にあり、渾なこの世を益するものなりと言ふや、將たまた歸納演繹の法に合したるものはこの世に在らざるものも、この世に益なきものも等しく眞理なりと言ふや。

さらばキフ、マケイッチは洵に好個の思索家なり、謳歌すべき眞理の探討者なり、今日の學者の理想とすべき適れなる賢才なり。

（七）

眞理とは何ぞ、

昔は「フィニクス」と言ふ鳥あり、「智識樹」の葉をきものあり、物理學者は之を説明すべく、「エーテル」波動論を寳けり。物理學者の假説したる「エーテル」の波動は眞理にして、宗教家の信ずる神のみは獨り不眞なるか。同じく意識の上に昇り來るものも、智よりすれば眞にして、情よりすれば不眞なるか。

○遊園雜誌 ○新藝林 ○曉星 ○新藝林

~~ら出てゐるのであるか、異とすべきは、内に南忘庵主の飲醍醐といふのが讀載されてゐる。禪門の大意を傳へられるもの、篤志の人に一讀を勸める。曾根芙蓉氏の長詩、別れ路が載つてゐる。~~

~~は蜻蛉文學の改題、北海唯一の文學雜誌である。~~

~~といふ雜誌がある、三號まで出てゐるか、主意は、寄席に於ける音曲、講談等の改良を計る爲に知士の文士の賛助を受け、其等の人の作物を載せてあるか、其を更に寄席で講じるのであるとか、發行人は~~

す。

文明の光に浴する國々の中に澎湃として漲り亘れる潮流は、女性の爲めに職業の自由、教育上[illegible]由々敷大事なり、希望を以て之に對する者も落膽を以て之を迎ふる者も等しく史皆[illegible]

住民の間の男女両性を比照するに、新社會の建設に於[illegible]ると言ふ、思索瞑想の事

○眞理とは何ぞ

眞理は一なるべし、二あるべからず、二あるものは眞理にあらず。矛盾せるものは眞理にあらず。この点に於て吾は科學の眞價値を疑ふ、尠くとも其發達の程度の未だ眞理を旗幟として獨り覇を稱すべき權利なきを思ふ。

進化論者は生物の進化を說けり、然れども進化の時計は自動的(オートマチック)なりや、歴史時代に動植物の遂げたる進化は人間の干渉なくして能く成し得たるものなるや否や既に未完の問題にあらずや。生物學者の說く如くしかく遲々たる進化の度を以てせば生物始源の代は殆んど無量壽を以て算すべき過古なるべし、然るにケルゼンが天文學上の研究も、ゲーギーが地質學上の研究も此の如く遠き生物の始源を否めり、この迷津に立て吾等は焉れにか適歸すべき。近代に到りて一進化論者はこの疑題を解決すべく、生物の進化の其源始時代に急足にして次第に速かを遞減するものなることを說けり然るに一方を顧みて哲學者の徵証を聞くに、社會の進化は指數函數(Exponential function)なりと言ふ、指數函數は指數即この場合の年と與に遞增す、再びこの迷津に立て吾等は何れにか適歸すべき。一の矛盾は他の矛盾を伴ひて殆んど歸一する所を知らざるは實に今日の學界にあらずや、ア、かくても理學は猶眞理の唯一の保持者なるか。

五)

眞理は自然相なるべし、公平ならざるべからず、然るに學者も亦社界の一員なり、位置の蒙らしむる感化より或は自己の利德より、已の說を曲げ、巧に歸納演繹の法を藉りて、是眞理なりと叫ぶ者あらば奈何。

好個の例は古く西の國に行はれし奴隷制度にあり、當時流石卓見の士も、幼きより馴致し來りし慣習なれば、深く懷疑の念を這の間に挿まざりけむ、即ち說くらく、人の運命はもと王公たるも奴隷たるも渾な是神の聖賦にして遷し易ゆべきものにあらずと。また曰く從順は奴隷の遵守すべき唯一の德にして、現世の奴隷は未來世の王侯たるをうべしと。これ實に中世を通じて堂々たる碩學の經濟學說たるを思はゞ、請ふまづ一苦笑を忍んで暫く現代の情態に鑑みよ、爾曹の倫理は同じ從順を以て婦人には强ひざりしか、爾曹之社會學說、經濟學說が今日の制度を解釋するに、より多く深切丁寧あるを得たりしか、いかに。

(六)

宇宙は不可測なり、神秘なり、之を說明すべく豫言者は神を賓けり。光とは何ぞ、電氣とは何ぞ、知り難きものあり、物理學者は之を說明すべく、「エーテル」波動論を賓けり。物理學者の假說したる「エーテル」の波動は眞理にして、宗教家の信ずる神のみは獨り不眞なるか。同じく意識の上に昇り來るものも、智よりすれば眞にして、情よりすれば不眞なるか。

(七)

眞理とは何ぞ、

昔は「フィイニクス」と言ふ鳥あり、「智識樹」の菓を啄まざりしより幾千年の壽命を保ちしと。

「再び眞理とは何ぞ。」

大膽にして正直なる露西亞の一老農ズータイエフは臆面なく其問に答へぬ。

曰く「眞理は愛なり。」

○彼聲は整つて來た、眞摯の氣が充ちてゐる。同號には、ロセッティの佛蘭西古謠の重譯が載つてゐる。白村漁郎氏の筆、一讀の値がある。

○產婆學雜誌は名の示す如きもの、日本橋楠田病院から出てゐるのであるか、異とすべきは、內に甬忘庵主の飲醍醐といふのが讀載されてゐる。禪門の大意を傳へられるもの、篤志の人に一讀を勸める

○曉星 は蜻蛉文學の改題、北海唯一の文學雜誌である。曾根芙蓉氏の長詩、別れ路が載つてゐる。

○新藝林 といふ雜誌がある、三號まで出てゐるか、主意は、寄席に於ける音曲、講談等の改良を計る爲に知士の文士の贊助を受け、其等の人の作物を載せてあるか、其を更に寄席で講じるのであるとか、發行人は

見るべき作を公にされてゐる。清白子は山岳雜詩、想像の豊さと、描寫の自在あるを示されてより、一轉シルレル、ハイチの譯を試られた。從來西詩の譯を試られた人もあつたが、二三の人を除いての外はさして善い結果を收められたとも見えぬ斯壇に於いて、此適當なる人を得られたのは喜ぶべき事です。

○久しく落寂を極めてゐた新少説の新体詩欄は花外子にの絶たざる吟哦によつて蘇生した、此一家の調は思ふに動かさるゝ人も多いのであらう。帝國文學の百號には、晩翠子の長篇あり、文藝界には久しぶりにての桑田春風子の作が現れて來た（三千里）

○富山房の名著文庫は、全部百冊發行するさうだ、して見ると追々眞の名著も著はれて、古珍書に饑た讀書界の慶事であるが、第一篇として出た芭蕉繪詞傳の如く、句に因める十數葉の名畫を除去し繪詞傳の題名を空しからしめたのは、故人に對し後進に對し不心切の極みならずや、それに芭蕉句選を附錄としたのも其撰を失したものだ、護物の芦の一本なを適當てあつたらう、

○天明俳句集といふのか内外出版協會から發行した、故意と知名の俳人を除たのと、寧ろ明和安永寛政に属すべき俳人を加えたのは、餘義なしといはば餘義ないが、今一骨折望ましかつた。

○近くホトゝキス發行所否俳書堂から、元祿俳句集が出るさうだ、故人に對する禮として今日の俳人魂性を捨て、所謂舊派の俳人にもホトゝキス派以外の俳人にも、元祿の句集所持する者は貸與せられたしと言て居るのは、斯道の美談として永く傳へたいものだ、（夕榮）

○人生の興味

斷水生

赤門の秀才深田鹿蘆氏雜誌帝國文學（第九卷第三號）に「人世の興味」ある一文を載す、修養の想、温雅の筆人生の興味の那邊に存すべきか、いかにして求めらべきかを解説して丁寧深切なり、近來の重要文字たるを

惟ふ、人世の興味に對する爭鬪は古昔より世界の思想史の上に綿々として斷えざる疑題ありき。ひかに薄き物と雖も必ず表裏あり、表に執着するものは裏を知らず。頭に固定する者は尾を知らず。主觀の向ふ所職分の異る所に從て、其所持所觀の偏するあるは洵に理の當然なり。プラトーは唯哲學に信じ、フエチロンは唯聖賢に信じ、バイロンは唯詩歌に信せり。プラ

期の人々の最も困難なる疑題ありき。然れども大幸なる哉當時の人や、彼等が心内の爭は主宰者みしの爭にはあらざりき。科學の光は彼等の爲めに全能智を破らんが爲めに用ひられしにあらずして、唯之に附隨せる迷信を斃さんが爲めに用ひられぬ。科學は全能智に其刃を向けずして却て其に纏綿せる惡魔をなぎ斃さんと

there is no alleviation for the sufferings of humanity except veracity of thought and of action, and the resolute facing of the world as it is, when the garment of make-believe, by which pious hands have hidden its ugliest feature is stripped off.....

聖なる手を掩ひかくす迷信の賊を破るは彼が科學研究の唯一の目的なりと明言せるにあらずや。

失はず。

「人生には幾多の興味あり」而して是等の興味中孰れが尤も高く、孰れが尤も低きか、學者は謂へらく「眞の人は哲學者なり、哲學者とならずんば眞の人となる能はずと」、藝術家は謂らく、我等の「領土は地上の國にあらずして天上の樂園にあり、詩人たを全き人なれ」、藝術家こそ第二の造化翁なれ」と、實際家は謂へらく、「理論の冷灰を捨て、藝術の假幻を去て緣色淋漓たる生活の黃金樹に復らん哉」と、宗教家は謂へらく「人生の根本興味は絶對者即ち神に對する興味にあり、此根本的興味あるが故に諸種の興味は分生し來れりと。」吾人は之に於て大に感なき能はず、詩人に從つて藝術家を完んとなし、審美的興味を以て最高の興味となすべきか、吾人は未だ知らず理論及實際に對する興味の果して斯の如く低きものなるかを。學者に從つて哲學を最上の事業となし身を哲學者の籍に連せしむべきか、藝術と實際に對する興味の必ずしも理論的興味に劣らざるを如何にせん。實際家の謂ふ所は尤も吾人を悅ばすものあり、理論の死灰を捨て藝術の假幻を去て、緣色淋漓たる生活の黃金樹に復らんか、吾人は殊に知らず藝術の美の途に假幻に過ぎずして學問の理の盡く冷灰に過ぎざるかを。吾人は今殆んど孰れを高しとし、孰れを低しとすべきかを知らず、未だ人生の眞面目の那邊に存し、人生の歸趣何れに在るやを解せざるが故に、又此諸種の興味の中孰れを主とし、孰れを從とすべきかを答ふるに苦しむものなり』「唯吾人の心はかゝる混沌の中に在つて自ら安ずることを得ず、是等の興味を整頓して其有する價値に從て之を排列せんとす。總ての興味に大小なく高下なしと云ふは僞なし、其間自ら相爭ひ相戰ふものあるにあらずや所謂道德主義と美的生活主義の如き又眞と善と美との間に認めらるゝ矛盾の如き皆人生に於ける興味の相互間の位爭ひなり」

「然れども吾人は人生の諸種の興味に對して未だ其品等を附し得ざるものなり」かく氏はこの問題に對する自己の斷案を與へざりしかども、進んで人生の興味の

如何にして求めらるべきものなるかに就て明快なる答解を案出せり曰く吾人はニイチエの近代の思想家中尤も吾人を動かしたる論議を見たり、然れども吾人はニイチエと與に全然歷史を蔑視する能はず、否「吾人は宜しく先づ偉大にして且つ無盡藏なる歷史の中に沒却し、人生の總ての方面を吾人の中に收容すべし。而して後吾人は始めて人生の眞相を觀取することを得べく、而して後始めて人生の興味の誠に那邊に存するかを明にするを得べし」と。

以上は氏が論議の梗概なり、吾人をして勸しく蛇足を附するを宥さしめよ。

惟ふ、人世の興味に對する爭鬪は古昔より世界の思想史の上に綿々として斷えざる疑題なりき。いかに薄き物と雖も必ず表裏あり、表に執着するものは裏を知らず。頭に固定する者は尾を知らず。主觀の向ふ所職分の異る所に從て、其所持所觀の偏するあるは洵に理の當然なり。プラトーは唯哲學に信じ、フエチロンは唯聖賢に信じ、バイロンは唯詩歌に信せり。プラトー學派のいかに傲岸なる言詞を弄して世の常の人々を鼠屬視したるかを見よ、ポープとスイフトとの往復に他の人間を怪物と呼びたるかを見よ。他の一面には又物質世界に住へる人々が哲人學者を遇する對[illegible]は轉た冷逆を極めたり、エマルソンが「英雄論」中に一奇話を載す、ポープ嘗てケルネルと相會するとあり、遇ま奴隷仲買商なる彼の甥某其席に臨めりポープ彼を顧みて曰く、我が甥よ、世界の二大偉人を同時に見うる汝こそ世にも光榮ある者なれと、甥答へて曰く、足下等のいかに偉大なるかは我が知る所にあらず、されど我は足下等の相貌を好まず、筋骨両つながら迥に足下等に優れる男を屢は我は十ギニーにて購ひたるとありと。

人生の興味に對する此の如き鬪爭は洵に一生の悲酸事なり、人生の興味を損するも、生活の倦怠を致すも要するに皆この内心分裂の結果に外ならず、Adieu, Adieu, my native land を歌て故[illegible]を棄てたるチアイルド、ハロルドも、初めは智識倦み後には放慾に倦みて自殺

期の人々の最も困難なる疑題なりき。然れども大幸なる哉當時の人や、彼等が心内の爭は主宰者みしの爭にはあらざりき。科學の光は彼等の爲めに全能智を破らんが爲めに用ひられしにあらずして、唯之に附隨せる迷信を斃さんが爲めに用ひられぬ。科學は全能智に其刃を向けずして却て其に纏綿せる惡魔をなぎ斃さんと

there is no [illegible] except veracity [illegible] thought and of action, and the veso lute facing of the world as it is, when the garment of make-believe, by which pious hands have hidden its nether feature is stripped off.....

聖なる手を掩ひかくす迷信の賊を破るは彼が科學研究の唯一の目的なりと明言せるにあらずや。

失はず。

「人生には幾多の興味あり」而して是等の興味中孰れが尤も高く、孰れが尤も低きか、學者は謂へらく「眞の人は哲學者なり、哲學者とならずんば眞の人となる能はずと」、藝術家は謂らく、我等の「領土は地上の國にあらずして天上の樂園にあり、詩人こそ全き人なれ藝術家こそ第二の造化翁なれ」と、實際家は謂へらく、「理論の冷灰を捨て、藝術の假幻を去て緣色淋漓たる生活の黃金樹に復らん哉」と、宗教家は謂へらく「人生の根本興味は絕對者即ち神に對する興味にあり、此根本的興味あるが故に諸種の興味は分生し來れりと。「吾人は之に於て大に感なき能はず、詩人に從つて藝術家を完んとなし、審美的興味を以て最高の興味となすべきか、吾人は未だ知らず理論及實際に對する興味の果して斯の如く低きものなるかを。學者に從つて哲學を最上の事業となし身を哲學者の籍に連せしむべきか、藝術と實際に對する興味の必ずしも理論的興味に劣らざるを如何にせん。實際家の謂ふ所は尤も吾人を悅ばすものあり、理論の死灰を捨て藝術の假幻を去て、緣色淋漓たる生活の黃金樹に復らんか、吾人は殊に知らず藝術の美の遂に假幻に過ぎずして學問の理の盡く冷灰に過ぎざるかを。吾人は今殆んど孰れを高しとし、孰れを低しとすべきかを知らず、未だ人生の眞面目の那邊に存し、人生の歸趣何れに在るやを解せざるが故に、又此諸種の興味の中孰れを主とし、孰れを從とすべきかを答ふるに苦しむものなり」『唯吾人の心はかゝる混沌の中に在つて自ら安ずることを得ず、是等の興味を整頓して其有する價値に從て之を排列せんとす。總ての興味に大小なく高下あしと云ふは僞なし、其間自ら相爭ひ相戰ふものあるにあらずや所謂道德主義と美的生活主義の如き又眞と善と美との間に認めらるゝ矛盾の如き皆人生に於ける興味の相互間の位爭ひなり」

「然れども吾人は人生の諸種の興味に對して未だ其品等を附し得ざるものなり」かく氏はこの問題に對する自己の斷案を與へざりしかども、進んで人生の興味の如何にして求めらるべきものなるかに就て明快なる答解を案出せり曰く吾人はニイチエの近代の思想家中尤も吾人を動かしたる論議を見たり、然れども吾人はニイチエと與に全然歷史を蔑視する能はず、否「吾人は宜しく先づ偉大にして且つ無盡藏なる歷史の中に沒却し、人生の總ての方面を吾人の中に收容すべし。而して後吾人は始めて人生の眞相を觀取することを得べく、而して後始めて人生の興味の誠に那邊に存するかを明にするを得べし」と。

以上は氏が論議の梗概なり、吾人をして尠しく蛇足を附するを宥さしめよ。

惟ふ、人世の興味に對する爭鬪は古昔より世界の思想史の上に綿々として斷えざる疑題なりき。ひかに薄き物と雖も必ず表裏あり、表に執着するものは裏を知らず。頭に固定する者は尾を知らず。主觀の向ふ所職分の異る所に從て、其所持所觀の偏するあるは洵に理の當然なり。プラトーは唯哲學に信じ、フエチロンは唯聖賢に信じ、バイロンは唯詩歌に信せり。プラトー學派のいかに傲岸なる言詞を弄して世の常の人々を鼠屬視したるかを見よ、ポープとスイフトとの往復に他の人間を怪物と呼びたるかを見よ。他の一面には又物質世界に住へる人々が哲人學者を遇する對應は轉た冷遇を極めたり、エマルソンが「英雄論」中に一奇話を載す、ポープ嘗てケルネルと相會するとあり、遇ま奴隷仲買商なる彼の甥某其席に臨めりポープ彼を顧みて曰く、我が甥よ、世界の二大偉人を同時に見うる汝こそ世にも光榮ある者なれと、甥答へて曰く、足下等のいかに偉大なるかは我が知る所にあらず、されど我は足下等の相貌を好まず、筋骨両つながら迥に足下等に優れる男を屢は我は才ギニーにて購ひたるとあり と。

人生の興味に對する此の如き鬪爭は洵に一生の悲酸事なり、人生の興味を損するも、生活の倦怠を致すも要するに皆この内心分裂の結果に外ならず、Adieu, Adieu, my native land を歌て故郷を棄てたるチアイルド、ハロルドも、初めは智識倦み後には放慾に倦みて自殺期の人々の最も困難なる疑題なりき。然れども大幸なる哉當時の人や、彼等が心内の爭は主宰者かしの爭にはあらざりき。科學の光は彼等の爲めに全能智を破らんが爲めに用ひられしにあらずして、唯之に附隨せる迷信を斃さんが爲めに用ひられぬ。科學は全能智に其刃を向けずして却て其に纏綿せる惡魔をなき斃さんと聖なる手を掩ひかくす迷信の賊を破るは彼が科學研究の唯一の目的なりと明言せるにあらずや。

there is no alleviation for the miserings of humanity except veracious thought and of action, and the resolute facing of the world as it is, when the garment of fake-believe, by which pious hands have hidden its ugliest feature is stripped off.....

失はず。

「人生には幾多の興味あり」而して是等の興味中孰れが尤も高く、孰れが尤も低きか、學者は謂へらく「眞の人は哲學者なり、哲學者とならずんば眞の人となる能はずと」、藝術家は謂らく、我等の「領土は地上の國にあらずして天上の樂園にあり、詩人こそ全き人なれ藝術家こそ第二の造化翁なれ」と、實際家は謂へらく、「理論の冷灰を捨て、藝術の假幻を去て緣色淋漓たる混沌の中に在つて自ら安ずることを得ず、是等の興味のあり、理論の死灰を捨て藝術の假幻を去て、緣色淋漓たる生活の黃金樹に復らんか、吾人は殊に知らず藝術の美の途に假幻に過ぎずして學問の理の盡く冷灰に過ぎざるかを。吾人は今殆んど孰れを高しとし、孰れを低しとすべきかを知らず、未だ人生の眞面目の孰れを主とし、孰れを從とすべきかを答ふるに苦しむものなり」『唯吾人の心はかゝるに在つて自ら安ずることを得ず、是等の興

を企てたるフアウストも、乃至、自ら倦みて自ら殺したる故北村透谷も、理性の壁を懷いて却て理性に問へし故高山樗牛も、皆この明なる實例と教訓とを吾人に與ふるものなり。古來の聖意賢才が心生涯は悉くこの痛しき鬪爭の鮮血もて描かれたる活畫圖にあらざるはなけん。而してまた其無形の畫圖こそ吾人が人生の興味を判別すべき萬古に亘て生きたる唯一高貴の資料にあらずや。

懷疑學派モンテーンは心と物との両極端に横れる懸絶を撒して人生の興味を調和せんことに努めたり、長き間の迷問疑惑を開いて晩年を微笑の間に安んじたるゲーテは一生の心血を「フアウスト」に濺ぎてこの疑題を解快せんと擬したる如し。その他あらゆる古來の哲人が轉迷入靜の跡の吾人に教ゆる如く、總ての興味に大小なく高下なしと謂ふは僞なり、尠くとも物、心両界、乃至眞善美の興味の相和すべからざるものありと謂ふは僞なり。

吾人は歷史の教ゆる所を辿るに、人生の興味には唯一絶對の主宰者ありて、他の興味は之が隷屬たり、附隨たるべき第二義の性質を帶ぶるものなる如し、所謂第一義の興味とは何ぞ、深田康算氏が「絶体に對する根底的興味の下に他の總ての興味を排例すること能はず」と非議したる絶体者即神に對する興味なり。此点に於て吾人は氏と聊か所見を異にする所ある如し。然れども歷史の明かに吾人に教ゆる如く、未だ何れの口にも哲學又は詩歌の下に宗教を列し、または單に智識の上に人生の興味を寘て安心立命の境地に達しえたる偉人あるを聞かざるなり、げにやエメルソンの說きけん如く、智識は悲の本源なり、智識に入て智識を出でゝこゝに不退轉の靈光に接するとき人初めて人生の興味に主宰者を得たり、また惟ふに、智の上の眞理は凡て雙對なり、然るに情の上の眞理は克く絶對なり、理性は意識と事實とを造る能はず、又意識と事實とに先つ能はず、理性は宗教的意識が立し來りたる事實を追ふて走るに過ぎず、かるが故に宗教的眞理即興味は第一義なり、理性的眞理即哲學的興味は第二義あり、到

底並存または脊離しうべきものにあらずして一方が屈服しまたは倍從せざるべからざるものなり。哲學的智識は全能智(All intelligent)の寄生物のみ、宗教と哲學との爭と言ふ如きは、本と虛妄に外ならず、何處にか其一方が絶對に受動的なる二人の鬪爭者ありや。人生の興味には殊別あり階級あり高下ありて、宗教的興味即全能智に對する興味は實に其凡てを統ぶるものなり。トルストイが藝術の根本要義として說きたるReligion Perceptionは萬人の心に横れるこの全能興味を指したるものあり。

近世の革命は要言するに科學的智識の勃興に基けり。宗教に纏へる迷信と正しき自覺との間の爭は十九世初期の人々の最も困難なる疑題ありき。然れども大幸なる哉當時の人や、彼等が心内の爭は主宰者みしの爭にはあらざりき。科學の光は彼等の爲めに全能智を破らんが爲めに用ひられしにあらずして、唯之に附隨せる迷信を斃さんが爲めに用ひられぬ。科學は全能智に其刃を向けずして却て其に纏綿せる惡魔をなき斃さんと努めしのみ。次第に下てスペンサー、ハックレーの如く科學の普及發達に一生を委ねたる人々にありてすら、科學は未だ全能智の位を犯すに至らざりき。スペンサーは其「教育論」第一編に於て科學的研究の宗教を害するものにあらずして却て之が爲めに必用欠くべからざるものなることを說きたれども、宗教と科學とを同位に列し、または科學の全能を主張するやうのとなかりき。ハックスレーを見よ、

To promote the increase of natural knowledge and to forward the application of scientific methods of investigation to all the problems of life to the best of my ability, in the confident hope which has grown with my growth and strengthened with my strength, that there is no alleviation for the sufferings of mankind except veracity of thought and of action, and the resolute facing of the world as it is, when the garment of make-believe, by which pious hands have hidden its ugliest feature is stripped off.....

聖なる手を掩ひかくす迷信の賊を破るは彼が科學研究の唯一の目的なりと明言せるにあらずや。

失はず。

「人生には幾多の興味あり」而して是等の興味中孰れが尤も高く、孰れが尤も低きか、學者は謂へらく「眞の人は哲學者なり、哲學者とならずんば眞の人となる能はずと」、藝術家は謂らく、我等の「領土は地上の國にあらずして天上の樂園にあり、詩人とを全き人なれ藝術家こそ第二の造化翁なれ」と、實際家は謂へらく、「理論の冷灰を捨て、藝術の假幻を去て緣色淋漓たる

すものあり、理論の死灰を捨て藝術の假幻を去て、緣色淋漓たる生活の黃金樹に復らんか、吾人は殊に知らず藝術の美の途に假幻に過ぎずして學問の理の盡く冷灰に過ぎざるかを。吾人は今殆んど孰れを高しとし、孰れを低しとすべきかを知らず、未だ人生の眞面目の那邊に存し、人生の歸趣何れに在るやを解せざるが故に、又此諸種の興味の中孰れを主とし、孰れを從とすべきかを答ふるに苦しむものなり」「唯吾人の心はかゝる混沌の中に在つて自ら安ずることを得ず、是等の興

を企てたるファウストも、乃至、自ら倦みて自ら殺したる故北村透谷も、理性の[illegible]を懷いて却て理性に悶へし故高山樗牛も、皆この明なる實例と教訓とを吾人に與ふるものなり。古來の聖意賢才が心生涯は悉くこの痛しき鬪爭の鮮血もて描かれたる活畫圖にあらざるはなけん。而してまた其無形の畫圖こそ吾人が人生の興

一絕對の主宰者ありて、他の興味は之が隷屬たり、附隨たるべき第二義の性質を帶ぶるものなる如し、所謂第一義の興味とは何ぞ、深田康算氏が「絕体に對する根底的興味の下に他の總ての興味を排例すること能はず」と非議したる絕体者即神に對する興味なり。此点

然るに禍ひある哉現代の人々は主客の別を爾曹の心内に忘れたり、迷信の賊を破るべく吾等に先つ賢才によりて樹立されたる武器をとりて爾曹は爾曹が心内の唯一の主宰者なる全能智をも傷けたり、宗教と科學との間の主客を忘れて自ら癒ゆべからざる心の不安を購へり。幸なるは吾等の祖先なり、彼等が心内の興味別の爭は深くして且劇しかりしかど、主客おく殊別なき亂麻の爭にはあらざりき。傷ましきは現代の吾等なり科學を過重し亂用して全能智を蔑み輕ろしめしかば、吾等が心内には全然興味別の標準主宰を失ひて、其爭は輕けれども永刼に癒ゆべからざるものとなれり。

ア、然れども人は永へにこの境地に滿足しうべきものにあらず、現代の才人が深甚の聲には明に全能智の主宰する影ありて讀む者の心を鼓動せしむ、イブセンが未來に對する强き信仰の中にも、ホイットマンが現世に對するより弱からざる執着の中にも、モリスが過古の崇拜の中にも、ゾラが法式熱の中にも、トルストイにも、ニーチエにも、メーテルリンクにも趣味別の

爭の中に趣味の主宰者を認めえて而も其の主宰者の、別多の方面より見たる差異こそあれ、皆全能智に對する興味即宗教心の上に置かれたるを認めずんばあらずこの傾向歸趣は單に文藝に携才人の間にのみ認むべきものにあちずして、科學者、哲學者の間にも最近に起りたる一顯象として、それ等の學の無能を悲み、Hartmannの學風を非難するものあるに到れり、心理學の大斗デユボア、レーモンドは原子運動の途にDas Ichを說明するに由なきを說き、今後の科學は人間の知覺を先天的のものとして發足せざるべからずと言ひ、哲學者の中にありても哲學の途に宗教の上に立せざるべからざるを言ふ者あり（波多野學士の如きは實に其一人なりときく）要するに智識過重の傾向は次第に其元に歸りて人生の興味の再び主宰者をうる日は或は近きにあらんとす。

松本親睦會雜誌第百九拾一號

說錄

○學問論

無畏庵主人

自分は今茲廿六歳になります、孔明出廬の年まで後一年を餘すばかり。丁度八歳の時學校に上つてから、數ふれば年月は夢のまで、もう足掛け十九年です。十九年！人生五十に十のおまけを付けて六十年としても、其三分の一にまで相當する長い貴い月日はたゝ文車の虫と爲て過ぎたのです。徒に氣を負て唯我獨尊の佛をきめてはゐるものゝ、更けた宵の雨の音は淋しくないとはありません、天下とか國家とか、さる大きな事は申さず、直接に身分半生の恩顧を受けた小環内の人々にさへ、能く其万一を酬ひうべきや否やが既に覺束ない次第です。基督の言葉に、神と隣人を愛するのが人生だとありますが、この世の缺陷を見て取て難きを人に責めざる有難い思召を嚙みしめる程、自分の腑甲斐ないのが一段と目について却て嘆きを增すのです。そして自分は十九年間學問をやつた、何を覺へたかと申しますれば、やはりカーライルの洩した嘆聲で、知ると云ふとは自分の無學なことを自覺するの謂だと感づき初めました。此頃色々と考へ事に耽りますうち、ふと胸に浮びましたは、そも自分は小學校より中學校と十數年間學問を遣ては來たが、何の爲めの學問であつたろうと、こ

像してゐます。――――話の角處が二三拾度側へ外れたやうですが、扨て本題に移て、かくも遠き人間界の曙から、當に來るべきこの地球の破滅期まで、綿々不斷に人間に依て戰はるべき二個の大戰があります、迷信及自然即是です、之は說明を要すべきことでありましやう。

迷老莊の無爲說や、ルッソー等を始祖とせる極端なる自然主義者は「無爲に歸せよ」「自然に歸れよ」

前かたも申した通り、自分が茲に學問と呼ぶのは人間一生の心自覺[illegible]

其うち良心の上に立つものが宗教、感情の上に立つものが詩歌、理性の上に立つものが哲學及科學とかやうに大別します。扨人の世に生活するや、理性の正しく指す所に向て、凡百の實在中に窃み居る眞理の本性即其實在の最終目的を研究し、以て一方には科學の力を籍りて自然を制御し驅使する策を案じ、以て他方には惑溺に克ち、奇蹟に逆て、神秘を斥ぐことに務めんければなりません、言ひ換へますと、不可測なるものを尊び崇がめ、荒唐なるものは排斥し、信仰の面から迷妄を刪り去

うなのです。何にも知らずに長が年學問をやつて來て、よし間違があるにもせよ、學問の目的はかく〳〵だろうと驕げ乍ら自覺に上る頃には、もう自分の修業年限は切れて居る、何と心細さの限りではありませんか。そこでこゝに書きますものは自分の懺悔錄の一節と思て見て戴きたいのです。

人間は活動の動物です、勞働が人生の一法則たるとは、生の如く、死の如く、「マグナ、カータ」の第一條の如く的確變ゆべからざるものであります。さり乍ら自分がこゝに用ゐました「勞働」の意味は普通よりはやゝ廣義に使つて居りますので、やかましく申しますと人間一切の活動を指すものであります。人は決してパンのみでは生活は出來ません、別に心を養ふ食品が入りますやうに、人間の勞働と申しましても手足を動かすばかりには限りません、こゝに可見の勞働があれば、かしこに不可見の勞働があります、達摩は面壁九年して禪の奥義に達した、テールは踞座四年して哲學を創めた、拱いた手が能く働き、瞑いだ目が能く成就し、天を仰いだ瞳が能く功を奏すると云ふ工合で、默想に耽る人は決して逸惰の人ではありません。勞働の結果を事業と名けますれば、事業にも亦上に相當した差別がありまして、假りに之を物的事業——即人間の手足に依るものと、及心的事業——即思索の結果の二つに別つことが出來ます、自分の茲に述べまする學問とは一切の心的事業を總括した意義におふくみを願ひます。

宇宙間に實在します一事一物は何の秩序もなく、意義もなく、唯漫然と横はるのではありません、必ず其間に一道の順序と目的があつて森然として犯すべからざる大法則の下に從順してゐます。秋の嵐の雲に音信れます頃、呀へきつた空洞の空に翻々と飛びかはす枯葉ですら、宇宙重力の作用には洩れません、一滴の水でも大洋海の平衡を亂す力を持て居る、變幻極りない岫雲にても代數學

を應用するとが出來るのです、地球まで達するに幾百萬年を費すとか云ふ四大の片隅から來る些々たる星の光も園の百合を肥さずにありましやうか、いばらの中に咲いた小さい花、其花から出るほのかな香りが月の光に蒸されて悠々と空に上りますは如何の現象でしやう、誰かこの微々たる香りが天の星座と相渉る所なしと斷言するの勇氣を持てましやうか。されば奇蹟中の奇蹟とカーライルが呼びました人間に於きましても、其一舉一動に深い貴い意義が含蓄されると云ふことは拒むべからざる斷定です。既に人間の活動に意義のある限りは。其云爲の一生產、學問も亦一定の目的を所持してゐなければなりません。——人間全躰の目的、而して學問は其一部を充すものにありますれば、先づ其人生の目的と云ふ廣い所から御話に取り掛るが順當でありましやう。

混沌たる星霧が幾万劫の昔に凝て地球と云ふ星が出來てから、地熱が次第に放散して人間の住めるやうになりましたは、ロード、ケルビンの推算を籍りますと、丁度億萬年許り前のことです、舊約全書の說に從てアダムを人間の祖先にしても、生物進化論によつて人間が猿と同種屬から出たものにしても、兎に角其出生は古いものです。さて其未來はと云ふに、潮汐進化論からみても、「エチルギー」消散の理からみても、人間がこの世に住めなくなる日は必ず來るのです、トーマス、カンペルと云ふ詩人は『最後の人』なる詩を作て、瓦懷に濱せる落日を睥睨して立つ人間界最終の人を想像してゐます。——話の角處が二三拾度側へ外れたやうですが、扨て本題に移て、かくも遠き人間界の曙から、當に來るべきこの地球の破滅期まで、綿々不斷に人間に依て戰はるべき二個の大戰があります、迷信及自然即是です、之は說明を要すべきことであります。

衞老莊の無爲說や、ルツソー等を始祖とせる極端なる自然主義者は「無爲に歸せよ」「自然に歸れよ」

前かたも申した通り、自分が茲に學問と呼ぶのは人間一切の心的事業を總括した意義のある學問とは、其うち良心の上に立つものが宗教、感情の上に立つものが詩歌、理性の上に立つものが哲學及科學とかやうに大別します。扨人の世に生活するや、理性の正しく指す所に向て、凡百の實在中に窃み居る眞理の本性即其實在の最終目的を研究し、以て一方には科學の力を籍りて自然を制御し驅使する策を案じ、以て他方には惑溺に克ち、奇蹟に逆て、神秘を禦ぐことに務めんければなりません、言ひ換へますと、不可測なるものを尊び崇がめ、荒唐なるものは排斥し、信仰の面から迷妄を刪り去

うなのです。何にも知らずに長が年學問をやつて來て、よし間違があるにもせよ、學問の目的はかく〳〵だろうと驕げ乍ら自覺に上る頃には、もう自分の修業年限は切れて居る、何と心細さの限りではありませんか。そこでこゝに書きますものは自分の懺悔錄の一節と思て見て戴きたいのです。

人間は活動の動物です、勞働が人生の一法則たるとは、生の如く、死の如く、「マグナ、カータ」の第一條の如く的確變ゆべからざるものであります。さり乍ら自分がこゝに用ゐました「勞働」の意味は普通よりはやゝ廣義に使つて居りますので、やかましく申しますと人間一切の活動を指すものであります。人は決してパンのみでは生活は出來ません、別に心を養ふ食品が入りますやうに、人間の勞働と申しましても手足を動かすばかりには限りません、こゝに可見の勞働があれば、かしこに不可見の勞働があります、達摩は面壁九年して禪の奥義に達した、テールは踞座四年して哲學を創めた、拱いた手が能く働き、瞑いだ目が能く成就し、天を仰いだ瞳が能く功を奏すると云ふ工合で、默想に耽る人は決して逸惰の人ではありません。勞働の結果を事業と名けますれば、事業にも亦上に相當した差別がありまして、假りに之を物的事業――即人間の手足に依るものと、及心的事業――即思索の結果の二つに別つことが出來ます、自分の茲に述べまする學問とは一切の心的事業を總括した意義におふくみを願ひます。

宇宙間に實在します一事一物は何の秩序もなく、意義もなく、唯漫然と横はるのではありません、必ず其間に一道の順序と目的があつて森然として犯すべからざる大法則の下に從順してゐます。秋の嵐の雲に音信れます頃、冴へきつた空洞の空に翻々と飛びかはす枯葉ですら、宇宙重力の作用には洩れません、一滴の水でも大洋海の平衡を亂す力を持て居る、變幻極りない岫雲にても代數學

を應用することが出來るのです、地球まで達するに幾百萬年を費すとか云ふ四大の片隅から來る些々たる星の光も園の百合を肥さずにありましやうか、いばらの中に咲いた小さい花、其花から出るほのかな香りが月の光に蒸されて悠々と空に上ります如何の現象でしやう、誰かこの微々たる香りが天の星座と相渉る所なしと斷言するの勇氣を持てましやうか。されば奇蹟中の奇蹟とカーライルが呼びました人間に於きましても、其一擧一動に深い貴い意義が含蓄されると云ふことは拒むべからざる斷定です。既に人間の活動に意義のある限りは。其云爲の一生產、學問も亦一定の目的を所持してゐなければなりません。――人間全躰の目的、而して學問は其一部を充すものにありますれば、先づ其人生の目的と云ふ廣い所から御話に取り掛るが順當でありましやう。

混沌たる星雰が幾万劫の昔に凝て地球と云ふ星が出來てから、地熱が次第に放散して人間の住めるやうになりましたは、ロード、ケルビンの推算を籍りますと、丁度億萬年許り前のことです、舊約全書の說に從てアダムを人間の祖先にしても、生物進化論によつて人間が猿と同種屬から出たものにしても、兎に角其出生は古いものです。さて其未來はと云ふに、潮汐進化論からみても「エチルギー」消散の理からみても、人間がこの世に住めなくなる日は必ず來るのです、トーマス、カンペルと云ふ詩人は『最後の人』なる詩を作て、无懷に濱せる落日を睥睨して立つ人間界最終の人を想像してゐます。――――話の角處が二三拾度側へ外れたやうですが、扨て本題に移て、かくも遠き人間界の曙から、當に來るべきこの地球の破滅期まで、綿々不斷に人間に依て戰はるべき二個の大戰があります、迷信及自然即是です、之は說明を要すべきとてありましやう。

極老莊の無爲說や、ルッソー等を始祖とせる極端なる自然主義者は「無爲に歸せよ」「自然に歸れよ」

前かたも申した通り、自分が茲に學問と呼ぶのは人間一切の心的事業を指す意味です、其うち良心の上に立つものが宗教、感情の上に立つものが詩歌、理性の上に立つものが哲學及科學とかやうに大別します。扨人の世に生活するや、理性の正しく指す所に向て、凡百の實在中に窈み居る眞理の本性即其實在の最終目的を研究し、以て一方には科學の力を籍りて自然を制御し驅使する策を案じ、以て他方には惑溺に克ち、奇蹟に逆て、神秘を禦ぐとに務めんければなりません、言ひ換へますと、不可測なるものを尊び崇がめ、荒唐なるものは排斥し、信仰の面から迷妄を刪り去

と叫んで「エデン」の園を理想上のパラダイスとして居りますが、自分はどう致しても之に同意を表し兼ねます。第一我等がこの園に這入ると假定しますに、迷信と呼ぶサタンに屈從しなければなりません、また罪の實を摘まなければなりません。迷信に屈從するのは人間が天地間の理法に闇いからで、罪の果を摘むのは人が自然に克てまた自然を補ふ法を知て、正當に衣食住を得る道を求めない爲めです。そこで我等は迷信を破り、自然に克ち、惡魔の桎梏を脱して禁園の實も摘まで濟む完璧十全の樂園を別に遠い未來に豫想します、この樂園を理想郷と呼び、この郷土に達する歴程を進歩と名けましやう。人間眞面目の事業は一も進歩を目的とせないものはなかろう筈、學問も亦一個の事業である限り、とり別け其主腦たり第一義たるべき位置に位するに由て見るに、其目的の進歩にあるとは明なる事實です。尙建部博士の『哲學大觀』には詳しく個中の消息を傳へてゐます。

何をか學問の目的と謂ふ、曰く進歩是のみ。……夫れ人生は實在なり。其主觀よりして之を謂ふ、人生は一切の實在なり、即ち人生は世界なり、其客觀よりして之を謂ふ、人生は最高の實在なり、即ち人生は靈覺ある本躰なり。蓋し實在即宇宙は其個々なるものよりして之を觀れば、人間は其最も發達せる個躰と爲さゞる可からずして、若し夫れ之を觀る者よりして之を觀れば、宇宙は乃ち人生分内の事たるに外ならざるなり。靈覺は人生に於て尤も充全に其存立を見るべくして、靈覺なき宇宙諸般の實在は、其千轉万變するも畢竟なる所の實在たるに過ぎず、する所の實在は、必ず之を靈覺ある實在即ち人生に求めざるべからず。する事の爲めには理想を豫想す、理想の有無是れなるとするとを甄別する根本條件にして、人と天然との區別は、其躰に於いては理想の有無なり、其用に於てはなるとするとに在りて存すと謂はざるべからず。是故に人生は即ち

理想を以てする進動に外ならずして、之を名づけて進歩と謂ひ、進歩に相對する盲動的轉變、即ちなる事の連續を名つけて變化と謂ふなり。今學問の目的は人生は如何にあるべきかの問に答へて、人生が由りて進むべき道を詮索する事、即ち人生の理想を研覈して以て進歩を効果するに在りと謂ふなり。

さて我等の理想郷に進むに障碍たるものが二つあり、それが迷信と自然だと云ふことは前かた述べました、一は「我」を知らざるが原因で、他は自然を知らないからの咎であります。されば進歩の要義と謂つば、「我」と自然の眞意義を闡明して、迷信を破り、自然を凌駕するの道を講ずるにあろうと思はれます。然るに學問も亦進歩を目的と致し、剩へ其主腦であり、第一義であり、ほかの實在と人生とを別け離して、する所の道を云爲する原動力であるからには、其目的のいかなるかは自然と推し量られましやう。曰く

學問の目的は進歩であつて、「我」と自然の眞意義を闡明して、能く迷信と自然に克ち、人間の理想郷に進むべき歴程を明にするにあります。

前かたも申した通り、自分が茲に學問と呼ぶのは人間一切の心的事業を總括した謂であります、其うち良心の上に立つものが宗教、感情の上に立つものが詩歌、理性の上に立つものが哲學及科學とかやうに大別します。扨人の世に生活するや、理性の正しく指す所に向て、凡百の實在中に嵌み居る眞理の本性即其實在の最終目的を研究し、以て一方には科學の力を籍りて自然を制御し驅使する策を案じ、以て他方には惑溺に克ち、奇蹟に逆て、神秘を禦ぐことに務めんければなりません、言ひ換へますと、不可測なるものを尊び崇かめ、荒唐なるものは排斥し、信仰の面から迷妄を刪り去

うなのです。何にも知らずに長が年學問をやつて來て、よし間違があるにもせよ、學問の目的はかく〳〵だろうと朧げ乍ら自覺に上る頃には、もう自分の修業年限は切れて居る、何と心細さの限りではありませんか。そこでこゝに書きますものは自分の懺悔錄の一節と思て見て戴きたいのです。

人間は活動の動物です、勞働が人生の一法則たるとは、生の如く、死の如く、「マグナ、カーター

ちなければなりません。眞の理想鄕は正確な科學的資料の上に建てられた哲學と、迷信を免かれた宗敎との結婚から生れた思想の子を、實用科學の力を籍りて自然を制し、詩歌の力を籍りて感情を純潔にした邦土に住はせるとによりて、始めて得らるゝと思ひます。自分が嘗て譯したビクトル、ユーゴーの文章の一節をこゝに引きます。

人はパンにより生息するよりも、推斷によりて生息するを多しとす。哲學は一個の力たるべし、人類の改善に於てそが目的と功果とを發見すべきなり、ソクラテス、アダムに入りてマルカス、オーレリアスを生ぜざるべからず、易言すれば快樂の人より智慧の人を出し、エデンを變じてリシュームと爲さゞるべからず、科學はよろしく其補藥たるべし。快樂と云ふか、そは拙き目的、憫むに堪へたる欲望のみ、快樂はもと畜生のことなり、靈の眞勝利は思想にあらざるべからず。されば越栗幾失見として神の觀念を鼓吹し、人の心に良心と科學とを親しましめ、此神秘なる雙對として高爲善爲の人を作るは正に眞哲學の領土たるべし、理想をして人心の空氣たり、飲食物たらしめざるべからず、人肉取れこれ我血なり我肉なりと言ひうるものは唯々理想のみ、智慧は聖餐會にはあらずや。

尙題を改めて現代の學風を論ずるとに致しましやう。

（をはり）

雷淵外史降幡唯

新撰仁科記一節

田村將軍考

信越兩國間に田村將軍の創建と稱する社寺あり我信濃にては此田村將軍の何人なるかを極めず安り

と叫んで「エデン」の園を理想上のパラダイスとして居りますが、自分はどう致しても之に同意を表し兼ねます。第一我等がこの園に這入ると假定しますに、迷信と呼ぶサタンに屈從しなければなりません、また罪の實を摘まなければなりません。迷信に屈從するのは人間が天地間の理法に闇いからで、罪の果を摘むのは人が自然に克てまた自然を補ふ法を知て、正當に衣食住を得る道を求めない爲めです。そこで我等は迷信を破り、自然に克ち、惡魔の桎梏を脫して禁園の實も摘まで濟む完璧十全の樂園を別に遠い未來に豫想します、この樂園を理想鄕と呼び、この鄕土に達する歷程を進歩と名けましやう。人間眞面目の事業は一も進歩を目的とせないものはなかろう歟、學問の下一用の事業でもう限り、

うなのです。何にも知らずに長が年學問をやつて來て、よし間違があるにもせよ、學問の目的はかく〳〵だろうと朧げ乍ら自覺に上る頃には、もう自分の修業年限は切れて居る、何と心細さの限りではありませんか。そこでこゝに書きますものは自分の懺悔錄の一節と思て見て戴きたいのです。

人間は活動の動物です、勞働が人生の一法則たるとは、生の如く、死の如く、「マグナ、カーター

○回想記（二）

晴水生

幸なる哉我等は天地の分れし以來惟一なる、明治とよぶ新理想の革命期に生れて、茲に一歳の流光を送りつゝ、新に春服してまた希望の階梯を進めぬ、未來をして光明あらしめよ、而も亦過古をして痛恨あらしめよ、何となれば未來の光明に伴ふ過古の痛恨はこよなき益友たることを知ればなり。我等の回想記は「巴里高樓の一哲學者」がもらしたる如き暗黑の悲叫にはあらざるなり。

●過古廿年間の明治文壇を回想するに、進歩の跡は歴々として徴すべきも、能く人の滿足を贏ちうべく未だしなり。此に於てか我等は一時大詩人を呼ぶ聲の法外に高かりしを懷はずば非ず。廿七八年の交、日清戰捷の餘榮を以て諸事はでやかなる時期に起りし一種の狂熱にして、決して眞面目の沙汰にはあらざりしならんも、而も徒に喧囂なるのみこれ極めて、何の結論をも與へず、また以後の文壇と些の交渉なかりしは、寧ろ怪奇の事に屬せずや。所謂國語問題も亦同じ頃に隆盛を極めしが、これはた杳として消息なく、昨年の文壇の如きは之に關する一論文も見ざりしと云ふ有樣なりき。我等夙に想らく、大詩人の出づる自ら期あり、過古の歴史に比照して明なる如く、如斯亂急なる、蕪雜なる、混沌たる時勢は決して大詩人の出現に格好い時期あらずと。『中央公論』の林田春潮氏は、一月の同紙に現代文明の最盛時を卜して、明治六七十年の交にあらんとなせしが、其是非はこゝに斷ぜずもあれ、日本の新社會が整然として歸一する所を知り、大詩人の誕生に格好の地盤を作るまでには、猶幾歳月の素養を要するなるべし。國語問題とも亦是に同じ。國語改良とは一方の意味に於て思想改良なり、されば古よりこの問題に適當の解釋を與へたるは所謂語學者、批評家の儕輩にあらずして、實に詩人、文學者の手を經たり。沙翁の英語に於ける、ゲーテの獨語に於ける、ユーゴーの佛語に於ける皆然り。エマルソンが詩人を呼んで Namer or Language Maker となすもの存意あるべし。大いなる思想家は一方に於て活語學者なり、さなり惟一の活語學者なりき。文字は「ミューズ」の墓、詩の化石なり。詩人の効果また大なりと言ふべし。まことや詩人は大なる愉慰者、惟一の語學者たると與にまた眞の歴史家なり、昔者マールボロー沙翁の戯曲を披びて圓英國史を學べりと謂ふ。斯の如く大詩人の効果の大なるものあるに係らず、一般世人は其價値を認識せず、過古の文壇に在て其出現を催謗したる批評家すら充分に其眞價を認定し得て然りしや否やは疑はし。今後育英の方法宜しきを得て、人々漸く各般の方面より詩人の眞價値を認むるに到らば、大詩人の出現はこの時初めて庶しうべし。語に曰く、「求めよさらば與へられん」と、されば批評家の任務は「我等は何が爲めに大詩人を求めざるべからざるか」との疑問を世人に向て丁寧親切に解説するにあらざるべからず。

●去年物故の諸名士中、籍を文壇に置きたる人々には、海外にて佛國のエミル、ゾラあり、我國にて中江兆民、正岡子規、高山樗牛あり、數へ來れば人をして歔欷一時に亡ぶの嘆を發するを禁ぜざらしむ。

文客として中江兆民を論ふもの皆曰く、彼の本領は燒烈火の如き政論の筆にありと、我等の所見は然らず。彼の本領は『續一年有半』などに露はれて、頭腦の健全なる、科學的素養ある、而も一方に「シニツク」派流の面影を持せる哲學者なりと。氏の門生某に與へたる書簡の一節に、『御推察の如く小生は日々擔頭に背を曝し梅を嗅ぎ居り候、沙婆世界の幸福には充分に御座候』とある所は、正に掌中水を酌みて飲む小兒を見て杯を投ぜしデオゼ子スや、日々其塵を拂ふの煩を厭ひて貴重の寶石を棄てたるトローの面影あり。この冷靜なる對度こそ或は却て氏の眞面目にはあらざりしか。任地、政客として、逢士として、文人として、氏の如きは近代稀にみる人豪たるに相違なく、斷乎として所信を遂行する性癖などに到りては、碌々たる今日の學究間に卓絶して優に頭角を現はせり。

正岡子規に就ては世上既に幾多の論評あれば、改めて我等の蛇足を要せじ、要言するに氏の性格は詩人と言はんよりは寧ろ一個の批評

夫れゾラは西暦一千八百四十年四月二日を以て巴里に生れぬ、ユーゴー時に年三十九、『光と陰』はこの年に於て世に現はれぬ。

○回想記（一）

斷水生

幸なる哉我等は天地の分れし以来惟一なる、明治とよぶ新理想の革命期に生れて、茲に一歳の流光を送りつゝ、新に春服してまた希望の階梯を進めぬ、未來をして光明あらしめよ、而も亦過古して痛恨あらしめよ、何となれば未來の光明に伴ふ過古の痛恨はこよなき益友たることを知ればなり。我等の回想記は「巴里高樓の一哲學者」がもらしたる如き暗黑の悲吽にはあらざるなり。

●過古廿年間の明治文壇を回想するに、進歩の跡は歴々として徴すべきも、能く人の滿足を贏ちうべく未だしなり。此に於てか我等は一時大詩人を呼ぶ聲の法外に高かりしを懷はずば非ず。廿七八年の交、日清戰捷の餘榮を以て諸事はでやかなる時期に起りし一種の狂熱にして、決して眞面目の沙汰にはあらざりしならんも、而も徒に喧囂なのみこれ極めて、何の結論をも與へず、また以後の文壇と些の交渉なかりしは、寧ろ怪奇の事に屬せずや。所謂國語問題も亦同じ頃に隆盛を極めしが、これはた杳として消息なく、昨年の文壇の如きは之に關する一論文も見ざりしと云ふ有樣なりき。我等夙に想らく、大詩人の出づる自ら期あり、過古の歴史に比照して明なる如く、如斯亂急なる、蕪雜なる、混沌たる時勢は決して大詩人の出現に格好い時期あらずと。『中央公論』の林田春潮氏は、一月の同紙に現代文明の最盛時をトして、明治六七十年の交にあらんとなせしが、其是非はこゝに斷ぜずもあれ、日本の新社會が整然として歸一する所を知り、大詩人の誕生に格好の地盤を作るまでには、猶幾歳月の素養を要するなるべし。國語問題と言ふも亦是に同じ。國語改良とは一方の意味に於て思想改良なり、さればこそ古よりこの問題に適當の解釋を與へたるは所謂語學者、批評家の儕輩にあらずして、實に詩人、文學者の手を經たり。沙翁の英語に於ける、ゲーテの獨語に於ける、ユーゴーの佛語に於ける皆然り。エマルソンが詩人を呼んで Namer or Language Maker となすもの存意みるべし。大いなる思想家は一方に於て活語學者なり、さなり惟一の活語學者なりき。文字は「ミューズ」の墓、詩の化石なり。詩人の効果また大なりと言ふべし。まことや詩人は大なる愉慰者、惟一の語學者たると與にまた眞の歴史家なり、昔者マールホロー沙翁の戲曲を披ひて英國史を學べりと謂ふ斯の如く大詩人の効果の大なるものあるに係らず、一般世人は其價値を認識せず、過古の文壇に在て其出現を催誘したる批評家すら充分に其眞價を認定し得て然りしや否やは疑はし。今後育英の方法宜しきを得て、人々漸く各般の方面より詩人の眞價値を認むるに到らば、大詩人の出現はこの時初めて庶しうべし。語に曰く、「求めよさらば與へられん」と、されば批評家の任務は「我等は何が爲めに大詩人を求めざるべからざるか」との疑問を世人に向て丁寧親切に解說するにあらざるべからず。

●去年物故の諸名士中、籍を文壇に置きたる人々には、海外にて佛國のエミル、ゾラあり、我國にて中江兆民、正岡子規、高山樗牛あり、數へ來れば人をして數鑑一時に亡ぶの嘆を發するを禁ぜざらしむ。

文客として中江兆民を論ろふもの皆曰く、彼の本領は燒烈火の如き政論の筆にありど、我等の所見は然らず。彼の本領は『續一年有半』などに露はれて、頭腦の健全なる、科學的素養ある、而も一方に「シニック」派流の面影を持せる哲學者なりと。氏の門生某に與へたる書簡の一節に、「御推察の如く小生は日々擔頭に背を曝し梅を嗅ぎ居り候、沙婆世界の幸福には充分に御座候」とある所は、正に掌中水を酌みて飲む小兒を見て杯を投ぜしデオゼ子スや、日々其塵を拂ふの煩を厭ひて貴重の寶石を棄てたるトロ－の面影あり。この冷靜なる對度こそ或は却て氏の眞面目にはあらざりしか。任地、政客として、達士として、文人として、氏の如きは近代稀にみる人豪たるに相違なく、斷乎として所信を遂行する性癖などに到りては、碌々たる今日の學究間に卓絕して優に頭角を現はせり。

正岡子規に就ては世上既に幾多の論評あれば、改めて我等の蛇足を要せじ、要言するに氏の性格は詩人と言はんよりは寧ろ一個の批評

夫れゾラは西暦一千八百四十年四月二日を以て巴里に生れぬ、ユーゴー時に年三十九『光と塵』はこの年に於て世に現はれぬ。

家なり。試みに日本近の俳句の多くを採り來て詳らに鑑別せよ、自然の詩美に憧憬せりとは言ふべからずして寧ろ自然の詩美を解析したるの觀あり。其他『子規隨筆』などに見るも自らこの傾向の顯然たるものあり。

文藝批評家として非凡の才識を有し、雜誌『帝國文學』及『太陽』に拠りて長く明治の文壇に斧鉞の筆を揮ひし樗牛高山林次郎氏は、去年師走の廿四日と云ふに、遂に湘南の地にて長逝せられぬ、一代の才人明として失へり。誰人か惜まざらんや。『美的生活論』以來一種の本能滿足主義を抱かれし氏は、同窓竹風氏と與にニーチェ主義の權化とまで想はれしが、竹風氏は知らず、氏にありては全くニーチェ主義の人と斷ずるは明か輕擧に失するを免れず。我等想ふらく、氏は寧ろ散文に現はれたるハイネに酷似する所ありと、因循なる慣習、道德に激して、希臘風の肉慾的本能主義を稱ふる中にも、ヘーゲルの人間の神性に據して希伯來風の精神主義を混じ、あるは「中世紀の聖なる吸血鬼は我等が生命の血を吸ひ盡して世界は一個の病院となれり」と言ひ、あるは

Dost thou think, because thou art Virtuous, there shall be no more cakes and ale?

とある所、正に樗牛氏が『本能滿足論』なり。閑說、氏はハイネの崇拜者なりと、我が臆斷も亦全く根據なきにはあらざる如し。猶斯事に關しては他日の評論に讓らん。

故エミル、ゾラとトルストイ伯とは十九世紀に於ける二大寫實家なり。伯は期せずして此處に到り、ゾラは初めより一定の模形を造りて、其中に自己の作物を盛んとせり、極端に言はゞ、氏は小說を以て一個の科學として取扱ひたる傾あり。氏嘗て生理學者クロード、ベルナルドの著 “Introduction à l'étude de la Médicine Expérimentale” を讀み、生理學に應用せられたる實驗方法をみて深く啓發せらるゝ所あり、自問して曰く、「我等の心生涯にも此方法は適用せられざるか」「我等は實驗小說を作る能はざるか」と、此の如くして氏は人生の描寫に科學的實驗觀察の方法を適用せんとは企圖せしなり。氏の天才は能くこの未開地を拓き盡すに足りしかば、所謂寫實主義なる旗幟は氏の議論のもとに斷然として近世の文壇を風靡せりの。十九世紀後半の生命はダーウィンの進化論にあり、この世界主の一勇將として文學の邦土を平定したるものはゾラなりき。人多く讀まざれども氏の論文集 “Le Roman Expérimental” は彼の小說の如く有名なり、所謂寫實主義の本義は此中に盡されゾラが小說の形式は遺憾なく宣言せられつゝあり。中に曰く「我が望せんと欲するものは社會及個人の解剖なり、そは社會と人間に纏へる矛盾を說明せんが爲めに。この目的の爲めには我等は人生の不淨と痴愚とのたゞ中に下りて、陋々惡しき土風を擇ばざるべからず。然れども我等の爲す所のものは世の道德を支配する人々の爲には必要缺くべからざる文書なり。我等があらゆる誠を以て見聞し、觀察し、說明したるものは茲に在り、次餘の作務は立法者の負ふべきものとす」と。這の亂雜錯雜せる社會の現象にあきたらず、筆を揮て蕪穢の根を切拔し、衆をして各々自覺する所あらしめんとするもの正にトルストイの主張と合一せり、伯が彼を稱揚して已まざるは洵に所以あるなり。『帝國文學』に愛天生なる者あり、一月の同號にゾラを評傳して彼には「高尚なる道念も物質と同一視せらる」と言ひ作ら、別に彼がドレフユー事件に關する行動を說明せん爲めにローマンチック、スピリットなるものを彼に賦したり。高尚なる道念をも物質と同一視する人に正義人道の觀念が併存すとは覺束なき論斷にこそ、評者は恐らく主義と方法との差別を無視せられたる如し。科學と人道との間に渉るべからざる矛盾ある如く見做し、科學的と言ひ實驗的と言ふ語と唯物論とをアイデンチチーの如く視るは文學宗教などに從事する人の陷り易き弊害なり。切に神に信じ、深く人道に篤るの士は小說をものするに寫實主義を採る能はずと云ふ理なし。トルストイの『クロイツエル、ソナタ』を見て彼を唯物論者とし、更に彼が宗教的著作を讀みて彼にはローマンチック、スピリット併存せりとなす者あらば評者は能く合點がゆかんか、いかに。ゾラが晩年の作に宗教的觀念の加はりしをみ

五〇

て、彼が觀念の變遷を思議する者、亦彼等しき謬見に陷せるものと言はまくのみ。

閑話休題、かく氏は寫實小說の形式を作りて人生の procès Verbal を描かんとは企圖したり。さらば所謂寫す所の眞實とは何ぞ、眞實はいかにして實驗せらるべきか。ゾラは之に對して正直に答へたり、曰く同情と精鋭なる批評眼とは眞實を得る唯一の道なりと。

然りゾラは極端なる寫實家なりき、其手段は實驗觀察にして其目的は飾らざる眞實なりき。然れども純客觀と言ふこと到底この世にありうべからざる如く、何の寫實も自然が自ら現はるゝ如く完全なる能はず、氏は自ら公平にして科學的なる記述者たらんことを期したりしかども自然科學者が外界の物的現象に對する如き比較的無私の境にまで到達するを得ざりしなり。氏の述作の裏には猛烈なる個人性の閃めきあり、其傾向は寧ろ厭世的、悲觀的なりき、是れ實に氏が勢力の眞の秘訣にはあらざりしか、巴里外郭の陋巷に人となりて貧と戰ひ、病と戰ひ、幾多の辛酸を甜め盡して漸く世に出でたる氏は、人世の戰ひに於て萬事を準備したりき、あらゆる虛禮と僞善とは氏の最も憎惡する所、非義なる群合をすてゝ赤裸々なる自然を貴しとし、其述作の目的の爲めには藝術上の法則を破り、若くは文學上の禮儀を失ひたりとせらるゝも何かあらん、無知の上に建てられたる禮儀と法則とは其の價値なしとまで宣告せり、彼戰士は荒き武器を擧げて麗しき眠を終局まで戰へり、ユーゴーに到て最大の權化を見出したる佛國の「ローマンチシズム」は彼の爲めに “une émeute de rhétoricien” と罵られぬ、其述作の是非はいかにもあれ、氏の行動は實に十九世紀に於ける文學の大革命なりき。

夫れゾラは西暦一千八百四十年四月二日を以て巴里に生れぬ、ユーゴー時に年三十九、『光と陰』はこの年に於て世に現はれぬ。

近事畫報原稿用紙

家なり、試みに日本近の俳句の多くを採り來て詳らに鑑別せよ、自然の詩美に憧憬せりとは言ふべからずして寧ろ自然の詩美を解折したるの觀あり、其他『子規隨筆』などに見るも自ら此の傾向の顯然たるものあり。

文藝批評家として非凡の才藻を有し、雜誌『帝國文學』及『太陽』に倚りて長く明治の文壇に奇警の筆を揮ひし樗牛高山林二郎氏は、去年師走の廿四日と云ふに、遂に湘南の地にて長逝せられぬ、一代の才人凋とし去り誰人か傷まざらんや。『美的生活論』以來一種の本能滿足主義を抱かれし氏は、戶張竹風氏と與にニーチェ主義の權化とまで想はれしが、竹風氏は知らず、氏にありては全くニーチェ主義の人と即斷するは聊か輕擧に失するを免れず。我等想へらく、氏は寧ろ散文に現はれたるハイチに酷似する所ありと、固陋なる慣習、道德に激して、希臘風の內慾的本能主義を稱ふる中にも、ヘーゲルの人間の神性に信じて希伯來風の精神主義を混じ、あるは「中世紀の聖なる吸血鬼は我等が生命の血を吸ひ盡して世界は一個の病院となれり」と言ひ、あるは

Dost thou think, because thou art Virtuous, there shall be no more cakes and ale?

とある所、正に樗牛氏が『本能滿足論』なり。聞說、氏はハイチの崇拜者なりと、我が臆斷も亦全く根據なきにはあらざる如し。猶斯事に關しては他日の評論に讓らん。

故エミル、ゾラとトルストイ伯とは十九世紀に於ける二大寫實家なり、伯は期せずして此處に到り、ゾラは初めより一定の模形を造りて、其中に自己の作物を型んとせり、極端に言はゞ、氏は小說を以て一個の科學として取扱ひたる傾あり。氏嘗て生理學者クロード、ベルナルドの著 "Introduction à l'étude de la Médiciue Expérimentale" を讀み、生理學者に應用せられたる實驗方法をみて深く啓發せらるゝ所あり、自問して曰く、「我等の心生涯にも此方法は適用せられざるか」、「我等は實驗小說を作る能はざるか」と、此の如くして氏は人生の描寫に科學的實驗觀察の方法を適用せんとは企圖せしなり、氏の天才は能く此の未開地を拓き盡すに足りしかば、所謂寫實主義なる旗幟は氏の統御のもとに蹶然として近世の文壇を風靡せり、十九世紀後半の生命はダーウィンの進化論にあり、此の世界王の一勇將として文學の邦土を平定したるものはゾラなりき。人多く讀まざれども氏の論文集 "Le Roman Expérimental" は彼の小說の如く有益なり、所謂寫實主義の本義は其中に盡され、ゾラが小說の形式は遺憾なく宣言せられつゝあり、其中に曰く「我が呈せんと欲するものは階級及個人の解剖なり、そは社會と人間に纏へる矛盾を說明せんが爲めに。此の目的の爲めには我等は人生の不祥と痴愚とのたゞ中に下りて、屢々惡しき主題を擇ばざるべからず。然れども我等の爲す所のものは世の道德を支配する人々の爲には必要缺くべからざる文書なり。我等があらゆる至誠を以て見聞し、觀察し、說明したるものは茲に在り、次餘の任務は立法者の負ふべきものとす」と。道の亂糅錯雜せる社會の顯象にあきたらず、筆を揮て萬惡の根を剔抉し、衆をして各々自覺する所あらしめんとするもの正にトルストイの主張と合一せり、伯が彼を稱揚して已まざるは洵に所以あるなり。『帝國文學』に愛天生なる者あり、一月の同紙にゾラを評傳して彼には「高尙なる道念も物質と同一視せらる」と言ひ作ら、別に彼がドレフュー事件に關する行動を說明せん爲めにローマンチック、スピリットなるものを彼に賦したり、高尙なる道念をも物質と同一視する人に正義人道の觀念が併存すとは覺束なき論斷にこそ、評者は恐らく主義と方法との差別を無視せられたる如し。科學と人道との間に遡るべからざる矛盾ある如く見做し、科學的と言ひ實驗的と言ふ語と唯物論とをアイデンチチーの如く覘むは文學宗敎などに從事する人のみて陷り易き弊害なり。一切に神に信じ、深く人道に頼るの士は小說をものすると寫實主義を採る能はずと云ふ理なし。トルストイの『クレーツェル、ソナタ』を見て彼を唯物論者とし、更に彼が宗敎的著作を纏ひて彼にはローマンチック、スピリット併存せりとなす者あらば評者は能く合點かんか、いかに。ゾラが晩年の作に說敎的態度の加はりしをみ

希臘風の肉慾的本能主義を稱ふる中にも、ハイネの人間の神性に信じて希伯來風の精神主義を混じ、あるは「中世紀の聖なる吸血鬼は我等が生命の血を吸ひ盡して世界は一個の病院となれり」と言ひ、あるは

Dost thou think, because thou art Virtuous, there shall be no more cakes and ale?

とある所、正に樗牛氏が『本能滿足論』なり。聞說、氏はハイネの崇拜者なりと、我が臆斷も亦全く根據なきにはあらざる如し。猶ほ斯事に關しては他日の評論に讓らん。

故エミル、ゾラとトルストイ伯とは十九世紀に於ける二大寫實家なり、伯は期せずして此點に到り、ゾラは初めより一定の模形を造りて、其中に自己の作物を盛んとせり、極端に言はゞ、氏は小說を以て一個の科學として取扱ひたる傾あり。氏嘗て生理學者クロード、ベルナルドの著 "Introduction à l'étude de la Médicine Expérimentale" を讀み、生理學に應用せられたる實驗方法を以て深く啓發せらるゝ所あり、自明して曰く、「我等の心生涯にも此方法は適用せられざるか」、「我等は實驗小說を作る能はざるか」と、此の如くして氏は人生の描寫に科學

もの也」と。道の亂雜紛雜なる社會の現象にあきたらず、筆を捨て萬惡の根を切抉し、衆をして各々自覺する所あらしめんとするもの正にトルストイの主張と合一せり、伯が彼を稱揚して已まざるは洵に所以あるなり。『帝國文學』に愛天生なる者あり、一月の同誌にゾラを評隲して彼には「高尚なる道念も物質と同一視せらる」と言ひ作ら、別に彼がドレフュー事件に關する行動を說明せん爲めにローマンチック、スピリットなるものを彼に賦したり、高尚なる道念をも物質と同一視する人に正義人道の觀念が併存すとは魔氣なき論斷にこそ、評者は恐らく主義と方法との差別を無視せられたる如し。科學と人道との間に越ゆべからざる矛盾ある如く見做し、科學的と言ひ實驗的と言ふ語と唯物論とをアイデンチチーの如く誤るは文學宗教などに從事する人の[illegible]て陷り易き弊害なり。切に神に信じ、深く人道に殉ずるの士は小說を物するに寫實主義を採る能はずと云ふ理なし。トルストイの『クレーツエル、ソナタ』を見て彼を唯物論者とし、更に彼が宗教的著作を讀ひて彼にはローマンチック、スピリット併存せりとなす者あらば評者は能く合點がゆくか、いかに。ゾラが晩年の作に宗教的態度の加はりしかの

で、彼が觀念の變遷を思議する者、亦復等しく誤謬に陷せるものと言はるべきのみ。

閑話休題、かく氏は寫實小說の形式を作りて人生の procès Verbal を描かんとは企圖したり。さらば所謂寫す所の眞實とは何ぞ、眞實はいかにして實錄せらるべきか。ゾラは之に對して正直に答へたり、曰く同情と熱威なる批評眼とは眞實なる唯一の道なりと。

然りゾラは極端なる寫實家なりき、其手段は實驗觀察にして其目的は飾らざる眞實なりき、然れども純客觀と言ふことも到底この世にありうべからざる如く、何の寫實も自然が自ら現はるゝ如く完全なる能はず、氏は自ら公平にして科學的なる記述者たらんことを期したりしかども自然科學者が外界の物的現象に對する如き比較的無私の境にすら到達するを得ざりしなり。氏の述作の裏には猛烈なる個人性の閃めきのあり、其傾向は寧ろ反逆的、悲觀的なりき、是れ實に氏が勢力の裏の秘訣にはあらざりしか。巴里外郭の陋巷に人となりて貧と戰ひ、病と戰ひ、幾多の辛酸を甜め盡して漸く世に出でたる氏は、人世の暗い面に於て萬事を準備したりき、あらゆる虚禮と虛飾とは氏の最も憎惡する所、華美なる辭令をすてゝ赤裸々なる自然を貴しとし、其述作の目的の爲めには藝術上の法則を破り、若くは文學上の體裁を失ひたりとせられんも何かあらん、無知の上に建てられたる體裁と法則とは些の價値なしとまで宣告せり、彼戰士は荒き武器を揚げて麗しき戰を終局まで戰へり、ユーゴーに到て最大の權化を見出したる佛國の「ローマンチシズム」は彼の爲めに "une émeute de rhétoricien" と罵られぬ、其述作の是非はいかにもあれ、氏の行動は實に十九世紀に於ける文學の大革命なりき。

夫れゾラは西暦一千八百四十年四月二日を以て巴里に生れぬ、ユーゴー時に年三十九、『光と陰』はこの年に於て世に現はれぬ。

近事畫報原稿用紙

で、彼が觀念の變遷を思議する者、亦復等しき誤謬に陥せるものと言はまくのみ。

閑話休題、かく氏は寫實小説の形式を作りて人生の process Verbal を描かんとは企圖したり。さらば所謂寫す所の眞實とは何ぞ、眞實はいかにして實驗せらるべきか。ゾラは之に對して正直に答へたり、曰く同情と精鋭なる批評眼とは眞實をうる唯一の道なりと。

然りゾラは極端なる寫實家なりき、其手段は實驗觀察にして其目的は飾らざる眞實なりき、然れども純客觀と言ふこと到底この世にありうべからざる如く、何の寫實も自然が自ら現はるゝ如く完全なる能はず、氏は自ら公平にして科學的なる記述者たらんことを期したりしかども自然科學者が外界の物的現象に對する如き比較的無私の境にすら到達するを得ざりしなり。氏の述作の裏には猛烈なる個人性の窃めるあり、其傾向は寧ろ反逆的、悲觀的なりき、是れ實に氏が勢力の眞の秘訣にはあらざりしか。巴里外郭の陋巷に人となりて貧と戰ひ、病と戰ひ、幾多の辛酸を甜め盡して漸く世に出でたる氏は、人世の戰ひに於て萬事を準備したりき、あらゆる虚禮と僞善とは氏の最も憎惡する所、華美なる辭令をすてゝ赤裸々なる自然を貴しとし、其述作の目的の爲めには藝術上の法則を破り、若くは文學上の禮儀を失ひたりとせられんも何かあらん、無知の上に建てられたる禮儀と法則とは些の價値なしとまで宣告せり、彼戰士は荒き武器を擲げて麗しき戰を終局まで戰へり、ユーゴーに到て最大の機化を見出したる佛國の「ローマンチシズム」は彼の爲めに "une (mucte de rh'toricien" と罵られぬ、其述作の是非はいかにもあれ、氏の行動は實に十九世紀に於ける文界の大革命なりき。

夫れゾラは西暦一千八百四十年四月二日を以て巴里に生れぬ、ユーゴー時に年三十九、『光と蔭』はこの年に於て世に現はれぬ。

二大悲劇詩人（佛蘭西文學の二明星）

小島酒生

（一）コルネイユ　Corneille（1606—1684）

（二）ラシーヌ　Racine（1609—1699）

近頃追々佛蘭西文學の作物が世の中へ照介されるやうになつたが多くは近世の作家ばかりでやれモウパッサンのやれブールジェーのと云ふて盛に飜譯品謄を試みるものが多い。又少しく古いところでは森田思軒子の飜譯でヴヰクトル、ユーゴーが頗る我が文壇の思潮を搖かしている、なるほど自然主義のモウパッサンや心理小説のブールジェや、ローマンチツクの大立物ユーゴーなどは先づ佛蘭西文學の精華には違ひないが顧みて佛蘭西文學の最も隆盛なりし路易王朝の時代と來たら如何であらうか恐らくは邦人の多くは唯一人の喜劇詩人モリエールを除いたら大半はコルネイユ、ラシーヌの名前すら知らないであらう曾て早稻田派の文士が盛にシエキスピーヤを稱道して大に劇界の刷新が世上の問題となつて居た頃ある知名の文士がクラシックのコルネイユ、ラシーヌをシエキスピーヤと同一に論じて居たのは頗る滑稽であつた。

ところでクラシックの文學といふと無暗に是をけなして殆んど文學はローマンチツク以後と限て居るやうに思ている、何たる愚見ではないか、もとより思想界の専制政治に飽きたユーゴーもクラシックを攻めたそれから獨乙ではレッシングが盛に國民文學の樹立を鼓吹して當時のクラシック文學を撃たが、さて劇曲そのものゝ價値に於て論じて見たらどうであらう、なるほどユーゴーやレッシングは人物として又文章家として卓越して居るには違いないが劇詩人として到底コルネイユやラシーヌの較べものにはない若し今日の傳統連綿たる佛蘭西文學史よりコルネイユとラシーヌの二字を消したらどうであらう之れこそ英文學史よりシエーキスピヤを獨乙文學史よりゲーテ、シルレルを除いたと同樣に頗る寂しいものになつてしまうのである。

それを今日の如く思潮の絶えず遷轉して國民好尚の變轉極りない時代にもコルネイユ、とラシーヌは依然不朽の譽を擧げ燦然不滅の光を放ている、而して偶々あるいは、コンヴァンショヨンの不自然で三部一致（時間と場所と人物との一致）無意味にも批難するものが現れて來ても一度此劇を讀みその雛莖に向ふときは恍然として自己を忘れ詩美の飄逸藝術の無限極致にうたれ、自然以上に情感を動かし來て所謂詩的眞情なるものゝ絶に眩惑するのである。かくしてコルネイユ、ラシーヌにとつては世紀の變轉や時代の批評などは何等の勢力とも感じてはいない。

近事書報原稿用紙

どふか佛蘭西文學の價値を認むる人々は最も時代に關係の多い近世思潮の洞奥に觸れると同時に悠久無限に人心を支配するクラシック時代の明星にも眼を投せらるゝ事を希望する。

今少しく二明星の佛蘭西文學に於ける位置と劇詩の精神とを比較して研究を試みやう。

（一）コルネイユ

コルネイユはルウエン（Ronen）と云ふ處の生れで最初は法曹社會に身を置いたのであるそれで時の宰相リシエリユー（Richelieu）に見出され文屋調査の校合委員中五人の一人に撰ばれはしたがやがて渠が精神のおちつかざると云ふ口實のもとで退けられてしまつた。

千六百四拾七年に翰林院にはいたけれども彼の全生涯の殆んど困乏貧苦の中に過ぎ去たと云ふは畢竟その性情が醇朴にして時の權勢にをもねらなかつたからであろふ。

まづ劇曲家として始めにメリツト（Mèlite）クリタンドル（Clitandre）ラヴーヴ(La veuve)など云ふ喜劇(コメデー)に筆を染めたのにこれと云ふ思はしき成功もみとめなかたそこで千六百三十六年から千六百五十二年の間でシツド（Cog）ヲラース（Horace）シンナ（Ci[illegible]）ポリユクト（Polyiucte）ドンサンシユ（Don Sanche）ニメード（Nicomèpe）などの諸種の劇曲を公にしたが渠の悲劇詩人としては成効驚く可きものであつて就中その傑作たるシツド（Cis）の如きは非常ある時代の品騰を引きをこした。千六百五十三年から千六百五十九年まで一時かれは劇界を退き終りに千六百五十九年より千六百七十二年の間に於てウジツプ（égipe）アジエシラ（Agésilas）アツチラ（Attila）テイツト（Tite）ベレニス（Bérénice）及びシユレナ（Snréna）などを書いたがだん〳〵此の時に當てラシーヌの光輝があなたに耀いて來たのでかれはそのかげにつゝまれてしまつた。

コルネイユが戯曲に對する考は哲學者デカルト（Descartes）の説を相一致して、則ち行爲に於て常に理性に流れる意志の發展を力めたのである。

そこでかれが劇中に發展する感情は悉く理性的情感の壯大激切なるもので感情そのものゝ純平たるものは到底その中に現れてはいない。

さればかれの描く女性は男性的性格を有し嚴然たる意志の行動をなすのであつて戀愛は多く道義的欲望なるにより其追求する處畢竟至善に外ならない。されどかゝる目的があつて情緒の焔ゆる樣な心狀を寫す塲合には殆んど人をしての劇中の人物たらしむるが如き同情を喚起さする。

かの悲劇シツド中ロドリツク（ヒーロー）とシメーヌ（ヒー

近事講報原稿用紙

は彼に限りある供給の源泉を與えたであらう。

渠の文體はある人のコルネイユは時々眠ると評したる如く偶々晦澁にをちいることにあるが、その表情の巧みなると其の措辭の流麗聲調雄渾なるに至りては佛國文學史中唯一人と云ふてもよろしい。

彼のシッドにおいて少女シメーヌ (Chimène) が國王ドンフェルナンド (Don Fernand) に對しその父の死骸を指して哀訴するくだりに左の名句がある。

CHIMÈNE

Sire, mon père est mort; mes yeux ont vu son sang
Coul er ã gros bouillons de son généreux flanc;

まことに絕唱ではないかそれで彼の詩句はしば〳〵格をして用ひらるゝことがある。

(二)ラシーヌ

ラシーヌはフェルテ、ミロン (Felté-Milon) に生れてポール、ロワイヤル (Pore-Royal) の有名なる希臘教學徒に從ひ教を受けたが寺院にはいることを拒んで終に劇界に身を委ねた。

はじめボアロー (Boileau) モリエール (Molière) ぼこ時代と全人せる佛國の唯一の喜劇詩人) の二人と親しく刎頸の交をなしたがやがてモリエールとは隙を生じてしまつた。

一體彼の性情は極めて熱烈過激で誰とでも衝突したからし

ロイン）がもはや戀す可からざる狀態にあつてなほ愛をつづけて居たのは畢竟運命が愛を道德的に判斷して居たからである。

すべてコルネイユ′に於ては行爲の原則を意志と道理で規正するからしてその現はす性格は概ね剛直で其感情は偉大に且つ理義に走りすぎることが多い。

コルネイユはその戲曲に於ける題材を多く歷史中にさぐつたされどそれはまこと、の外觀ばかりでその內容は事實よりは寧ろそれの美術的醇化であるそうして其の趣味は概ね政治的方面にあつたからしてこと更にその淵源に當じ羅馬史は彼に限りなき供給の源泉を與えたであらう。

渠の文體はある人のコルネイユは時々眠ると評したる如く偶々晦澁にをちいることにあるが′その表情の巧みなると其の措辭の流麗聲調雄渾なるに至りては佛國文學史中唯一人と云ふべきもよろしい。

彼のシッドにおいて少女シメーヌ（Chimène）が國王ドンフェルナンド（Don Fernand）に對しその父の死骸を指して哀訴するくだりに左の名句がある。

CHIMÈNE

Sire, mon père est mort; mes yeux ont vu son sang
Couler à gros bouillons de son généreux flanc;
Ce sang qui tant de fois garantit vos murailles,
Ce sang qui tant de fois vous gagna des batailles,
Ce sang qui tout sorti fume encor de courroux
De se voir répandu pour d'autres que pour vous,
Qu'au milieu des hasards n'osait verser la guerre,
Rodrigue en votre cour vient d'en couvrir la terre.
J'ai couru sur le lieu, sans force et sans couleur;
Je l'ai trouvé sans vie. Excusez ma douleur,
Sire, la voix me manque ce récit funeste;
Mes pleurs et mes soupirs vous diront mieux le reste.

まことに絕唱ではないがそうして彼の詩句はしば〳〵格をして用ひらるゝことがある。

（二）ラシーヌ

ラシーヌはフェルテ′ミロン（Felté-Milon）に生れてポール′ロワイヤル（Pore-Royal）の有名なる希臘教學徒に從ひ教を受けたが寺院にはいることを拒んで終に劇界に身を委ねた。

はじめボアロー（Boileau）モリエール（Molière）′と時と全く世の佛國の唯一の喜劇詩人）の二人と親しく刎頸の交をなしたがやがてモリエールとは隙を生ずるつた。

一體彼の性情は極めて熱烈過激で誰とでも衝突したからし

早稻田大學圖書館藏

てその敵は殆んど絶えなかつたのである。
千六百七十七年に公にしたフエードル（Phèpre）の不成効からかれは絶望し宗教心に驅られて劇界を退いた。
一つにはルイ十四世その間に面白からざることが生じたからでもあると或人は言ひ傳へる。
ラシーヌの劇は喜劇プレイドウール（Plaideur）と悲劇バジヤゼー（Bajazet）とを除ひて他の悲劇全般を三つの源泉に區分することが出來る。
一希臘源泉アンドロマック（Andromaque）イフイゲニー（Iphigénie）フエードル（Phèdre）
二羅馬源泉ブリタニキユス（Britanicus）ベユレニス（Bérénice）ミトリダット（Mithridate）
三聖學源泉エステル（Esther）アタリー（Athalie）。
ラシーヌは劇詩の創作に明晰を非常に重んじた乃ち出來る丈け其の終局に捷路をとつてコルチイユの樣で奇想天外より落つるが如き伏線を設けない。
之れでかれにとつては性格の發展なるものが大に關係をもつていたのである。
コルチイユが劇詩に於て獨り壯大なる感情を發揮し樣と力めた樣にラシーヌは成る可く戀愛と婦人とに主なる役目を與えた。

かれて心理そのまゝ描くことに巧みであつて殆んど意志の制裁を失ひたらん如き感情のあらゆる狀態を觀察し之を縱横に露出した是コルネイユと其性向を異にする所以である。
されど世人の唯にラシーヌを以て優婉なる作家とのみ判じ去るは誤りであつて一たびフエードルやアタリーに眼をそそひだものはそのいかばかり激越なる性格の發展をしめしたかに心づくことがあらふ。
そふしてかれの描いたものが必しも戀愛にのみとゞまつていないと云ふ證據はかのイフヰゲニー（Iphigénie）やブリタニキユス（Britannicus）の中に殆んど戀愛の分子を見出さゐい許りでなくエステル（Ester）やアタリー（Athalie）は全く無いのを以ても知る事が出來る。
まことにラシーヌはかれの時代の最も卓越せる修辭家であるは勿論其の哀情の絶美にして光彩ある感情の幽玄朗乎として趣致無限に溢るゝが如き絶世の劇詩人と云ふて可なりである。
通常人の稱して偉大コルネーヨ優婉ラシーヌと云ふは一面に於て確かに眞理を含んでいるものと信ずる。（了）

江湖書報原稿用紙

ポール、エ、ヴィルジニー

中澤臨川

『ウエルテルの悲』を懐いて埃及遠征に上りし奈翁に愛讀せられ、『コスモス』の著者フンボルトが亞非利加の旅に伴れて忘たなき愉慰者となり、ラマルチンの作物に現れては可憐のグラジエラを泣かしめ、シャ●トーブリアンの眼に映しては基督教の精髄となる、抑この一小篇には

いかなる靈魔あるに自りて、しかく天下の人心を腦殺せるや。

仰けば天は覆ふこと濃やかに、俯する地は載すること厚し、辰星の雲に映ずるは何の壯んぞ、河川の白く流るゝは何の潔さぞ、鳥啼いて朗らかに、花開いて淋し。自然の人事に渉ること一に重きや。是あるによりて、古より情厚之詩人、思を山川の風物に馳せ、懐を花鳥の韻事によせて、妙法善美の境に逍遙遊せしもの概ぬ然り。春を愛せし者あり、夕陽の景を歌ひし者あり、聖者は紡がざる野の百合に萬法を觀ヒ、或者は

近事報原稿用紙

九暖蹂なるあり、渠が世の文明を嫌ひ、社會の轉

憧憬の眼は常に自然の性は虚飾なく、身世頗る數奇にして、行路の

介辛直の性は幽然として渡蘭の革命に投じ、倦怠

して、或は幽然として渡蘭の革命に投じ、倦怠

て、或は幽然として渡蘭の革命に投じ、倦怠

人生の

牛生虚暖なる世と答るべくもあらず、羽

牛生虚暖なる世と答るべくもあらず、羽

ん、牛生虚暖なる世と答るべくもあらず、羽

ん、牛生虚暖なる世と答るべくもあらず、羽

ん、

七一八一八一四一の一生こそ淋しけれ。羽介は渠の生活の質なり、落魄は渠の性なり。自然を愛し、禽獸の眼を慰む。荒野のやさしき情はは渠の眼だになくして去りぬ。海の世に安宅を求むるの暇だになくして去りぬ。一日もと渠は何の所に行いて職を求め、工師となりて年かさなれば、則ち傷いて歸れば家人よりは冷かに待遇され、自然を愛し、禽獸を慰む。渠の生活は常に危時代に業を敎へて活を得たるに終り、復讐都に入り、フィンランドに歸り、或はフィンラーを敎へて復失敗に終り、復讐都に入り、フィンランドに歸り、或はフィンラーを敎へて復失敗に終り、復讐都に入り、フィンランドに歸り、或はフィンラーが其困危時代に業を敎へて活を得たるに

の巧く前人

壁を隔ひ、の質なり、落魄は巣の生活なり。自然を変し、惰はもう乍ら、一日もこと、禽

七一八一四（の一生こそ淋しけれ。羽介は巣ルナルダン、ドー、サン、ビエル）一七三

の世に安宅を求むるやさしき惰なる暇だになく去りぬ。海に行いて職を求め、工師となりて平かならず、

に行いて歸れば家人より冷かに待遇され、則ち

ルッソーが其困危時代に樂を教へて活を得たる

傷いて歸れば家人より冷かに待遇され、則ち

故郷に放ひて、数年間軍隊を聞いて復失敗に終り

ンドに戦ひ、復和蘭に去り、復露都に入り、フィンラ

ンナに歸り、或はフィラトーレを

ピエ

ル湖のほとりに共和國の建設を企て、或は巴黎に

て、攻撃を多き世と容るべくもあらず、羽

介卒直の性は虚飾多き世と容るべくもあらず、羽

憧憬の眼は常に自然に注ぎ、身世頗る数奇にして、行路の轉

蹉跎なるに、巣が世の文明を嫌ひ、社會の轉

蹉跎なるあり、

人界

第二卷第六號

文學

れより軍隊に入り、巴里の繁華、甲虫の費より也も繁華なる世の情なり。

一解のし日、樂みし日、

アーさらば、情薄き友よ、アーさらば、なほ

の國の繁華、我は再び繁華なる人界の情なり。

アーさらば、甲虫の費より也も繁華なる世の情なり。

る、詞に曰く、

んど昏迷撹亂せり、巣が其友に逢ひて渡蘭に別

て渡蘭に別

者なりしは嘲りぬ。當時の巣は頗る惱みて、殆

は風く心變れり、巣女は昔の戀人を指して、闖入

は再び渡蘭に向へり。さるに看よ、皇女マリー

しが、幽夢に戀の情を禁ずる能はず、巣の足き

る所となるや、則淒涼の懷を抱いて放土に趣き

変轉れ切なるやら、一九人皇女の母を距つ

れに麗しかりし巣は、一九び巴黎に行く

リン一世の爲めに思はれたり。去て渡蘭に行く

しめしもの他にまた理あるをや。形成世にもせ

ば、巣を愛して偏に

何ぞ況んや、巣をいとしの他に所以あるかな。

ちしもの沼に

倦怠を惑みて、自然と奇蹟の間に其情熱を放

しせしが、愛人天才の燈し火を遂げ

愛深き自然の道則は河の所

にか其暗き墓あらん、詩人、

て其頃に紅せりと。恰も好し、サン、ビエルの

ふとアダム來りて覗ければ、薔薇は咲ひん

へり、然るに、露の朝をいざ起きに、

に一神話あり、造化は薔薇の色を白妙に造り給

へり、然るに、露の朝をいざ起きに、

に一神話あり、造化は薔薇の色を白妙に造り給

ば、蝶と蜂の戯れ、

れすらこの才能には超えたりとて自遠しつ。

を早くして、自然の全部は思ひ、一植物のそ

けんとする小兒に似たり』と言へり。巣は復言

貝がらにして砂上に掘りし穴に、大海の水を受

燭足らず。則ち人力の限りあるを嘆じて『我は

て『ここの迷宮を辿るも、最後の神扉に達するには

に、ルッソーの迷宮を辿るも、最後の神扉に達するには

研究を忘れず、其觀樂の終りを告ぐるまでは著作に業を染めし

共觀樂の終りを告ぐるまでは著作に業を染めし

研究を忘れず、

れ行く夏の野邊の如し。柳葉れ、林檎實り、

今後すこの才能には超えたりとて自遠しつ。

れすらこの才能には超えたりとて自遠しつ。

花咲き、風常に温かなる樹なりけん。ニュアンス質り、ヒモンは

はいと更に吉祥なりけん。ニュアンス質り、ヒモンは

餘りに恐懼にして、巴里街頭の竹間は巣の眼には

純雅の自然を慕へり。狂風怒濤は巣の耳には

たり。巣はのくそこの原人の素を愛し、靜平

人事を語り、自然を愛すや、正にこの神話に似

て其頃に紅せりと。恰も好し、サン、ビエルの

て其頃に紅せりと。恰も好し、サン、ビエルの

想とする所にはあれ：此の如くしてボーン、

を離れて、碧空を眺く原人こそ、眼に巣の理

ニ、ヴィルニー』は成りぬ。

ニ、ヴィルニー』は成りぬ。

近事畫報原稿用紙

研究を忘れず、初めは心に思ひ定めたる事は著作に業を染めと、渝変せしかど、驚入りて驚深き自然の道理は同じ所へ帰り、然るに、露の潤をいさ是より咲かんと云

世觀樂の終りを告ぐるまでは著作に業を染めと、渝変せしかど、驚入りて驚深き自然の道理は同じ所へ帰り、然るに、露の潤をいさ是より咲かんと云

世に一神論あり、造化は薔薇の色を白妙に造り給へ、

知ると雖も、造化は薔薇の色を白妙に造り給へ、

知ると雖も、造化は薔薇の色を白妙に造り給へ、

知ると雖も

牧場のなか、山毛欅の樹蔭に寂寥の繼人を指差す。我は海べ、岩が根、さては羅馬の廢墟、ナポリ、ローマ、ヴェニスの水の上、小川のほとり、そは花咲くレモンの陰に寂寥を指差すばかりと思ひぬ。

詩人は長き年月、ヴェニスの水の上、小川のほとり、

ちて明かに、親しく賞討し來りしフランボルトの精細に豐富に描寫されたるかの風物のいかに、たゞの一人のみ。科學者は二三の證明を候ふ。南洋熱帶の物語の中に賞りぬ。佛蘭西航海記に現はれたるくさ〳〵の村は、うるはしき想像に飾られて、再びくさ〳〵の序言にも見ゆる所、

佛蘭西航海記に現はれたるくさ〳〵の村は、うるはしき想像に飾られて、再びくさ〳〵の序言にも見ゆる所、

は、親しく賞討し來りしフランボルトの精細に豐富に描寫されたるかの風物のいかに、

南洋熱帶の物語の中に賞りぬ。

科學者は二三の證明を候ふ。

佛蘭西航海記に現はれたるくさ〳〵の村は、うるはしき想像に飾られて、再びくさ〳〵の序言にも見ゆる所、

ルッシーの『旅行に負ふこと多大なりぬ。』ボール、ニ、ヴィルジニーの『自然を學びて、アイル、ド、フランス、サン、ピエール、ニ千七百八十七年、ニ千七百八十七年の旅行に負ふこと多大なりぬ。』ボール、ニ、ヴィルジニーの『自然を學びて、アイル、ド、フランス、サン、ピエール、ニ千七百八十七年、

ルッシーの『旅行に負ふこと多大なりぬ。』ボール、ニ、ヴィルジニーの『自然を學びて、アイル、ド、フランス、サン、ピエール、ニ千七百八十七年、

ボート、ルイに近き一小丘に滿眼の清潔を領し、たゞに止るのみ。

ボート、ルイに近き一小丘に滿眼の清潔を領し、たゞに止るのみ。

南洋、人氣なき深林のたゞずまひ、ダムの發ひしテンの園はこゝ、どこまでに、昔アれぬ。

南洋、人氣なき深林のたゞずまひ、ダムの發ひしテンの園はこゝ、どこまでに、昔アれぬ。

期の春も盛り、時にヴィルジニーは其叔母なる貴族にめされて、巴里の邸に

期の春も盛り、時にヴィルジニーは其叔母なる貴族にめされて、巴里の邸に

ら悲誌の心も慰へ、自ら神の愛をも知りて、森に慰ひ、泉に汲み、花に戯ぶ、鳥に伺ひ、自然兒となり、森に慰ひ、泉に汲み、花に戯ぶ、鳥に伺ひ、自然兒となり、

ら悲誌の心も慰へ、自ら神の愛をも知りて、森に慰ひ、泉に汲み、花に戯ぶ、鳥に伺ひ、自然兒となり、

早く睦び合ひて、夜毎一つの搖籠に相抱いて寂ぬ。漸く長じて、寂寥は清潔なる自然兒となり、早く睦び合ひて、夜毎一つの搖籠に相抱いて寂ぬ。漸く長じて、寂寥は清潔なる自然兒となり、

生れし男子をポール、とよべり。一人は幼少より生れし女子をヴィルジニーとよび、他方より生れし男子をポール、とよべり。一人は幼少より生れし女子をヴィルジニーとよび、他方より

つ、こゝに淋しき生計を立つるがあり。一方よりつ、こゝに淋しき生計を立つるがあり。一方よ

一孤島にめぐり流れたる一少女とが、不圖も南洋の海命にもそが知らつゝ言ひしる男の聊を宿して、二三の黒奴を使役しつゝ、

一孤島にめぐり流れたる一少女とが、不圖も南洋の海命にもそが知

人夫に死別れたる寡婦と、道なきぬ戀人と走りて、父母の許を得ざる戀人と走りて、

人夫に死別れたる寡婦と、道なきぬ戀人と走りて、父母の許を得ざる戀人と走りて、

谷に、この物語のめぐり逢ひて、『死の海』を望み、左に『死の海』を望み、右に『不孝の岬』を眺めつゝ、身は名族の家に育ちしが、不圖も白髮の老

谷に、この物語のめぐり逢ひて、左に『死の海』を望み、右に『不孝の岬』を眺めつゝ、身は名族の家に育ちしが、不圖も白髮の老

近事讃報原稿用紙

寡蓄を盡しうる身となりしが、南洋素撲の生活の苦を戀ひと泊めて忘られず、母を慕ひ、ボールを戀ひて、思ひ出は溢るゝ、感謝となりて、貴足べらず、可憐の一少女ウィルジニーとて、ピエールとして果たさず、甘き物語の紀念を撫して、且つ語り且つ慨くなり。

サン、ピエールが作者としての成功の度を讃するは、飽くまで明に語る如く、渠の作物は皆其間歴の所産なり。渠の一生の遭遇を描いて、古は長き遊視畫の想像の泉に不斷の水を蓄へ、常に事實の裏はよし尚深きまでなかりき。天才の眼はしき作物は、渠の前には、過去の心地に燃し、大作を後世に知りて忘るゝ、かの逢れんと思はんと程の心地に成り、後世に幾多の模倣者を出し、六種の雷一の秘訣なるに張られたれりとも。筆を嘯んで眼目すべき土臺を造るべきなり。

物語しみ哭しもて、繼しき岸に九よひぬ。ボールも亦働しみ哭しもて、繼しき岸に九よひぬ。然るに風雨あや情に生活し託して破船の災に遇ひ、渠女の身はうつ蟬の愛と化しぬ。また海に浮びぬ。しかし、南洋素撲の生活なりて、繼しき岸に九よひぬ。ボールも亦働

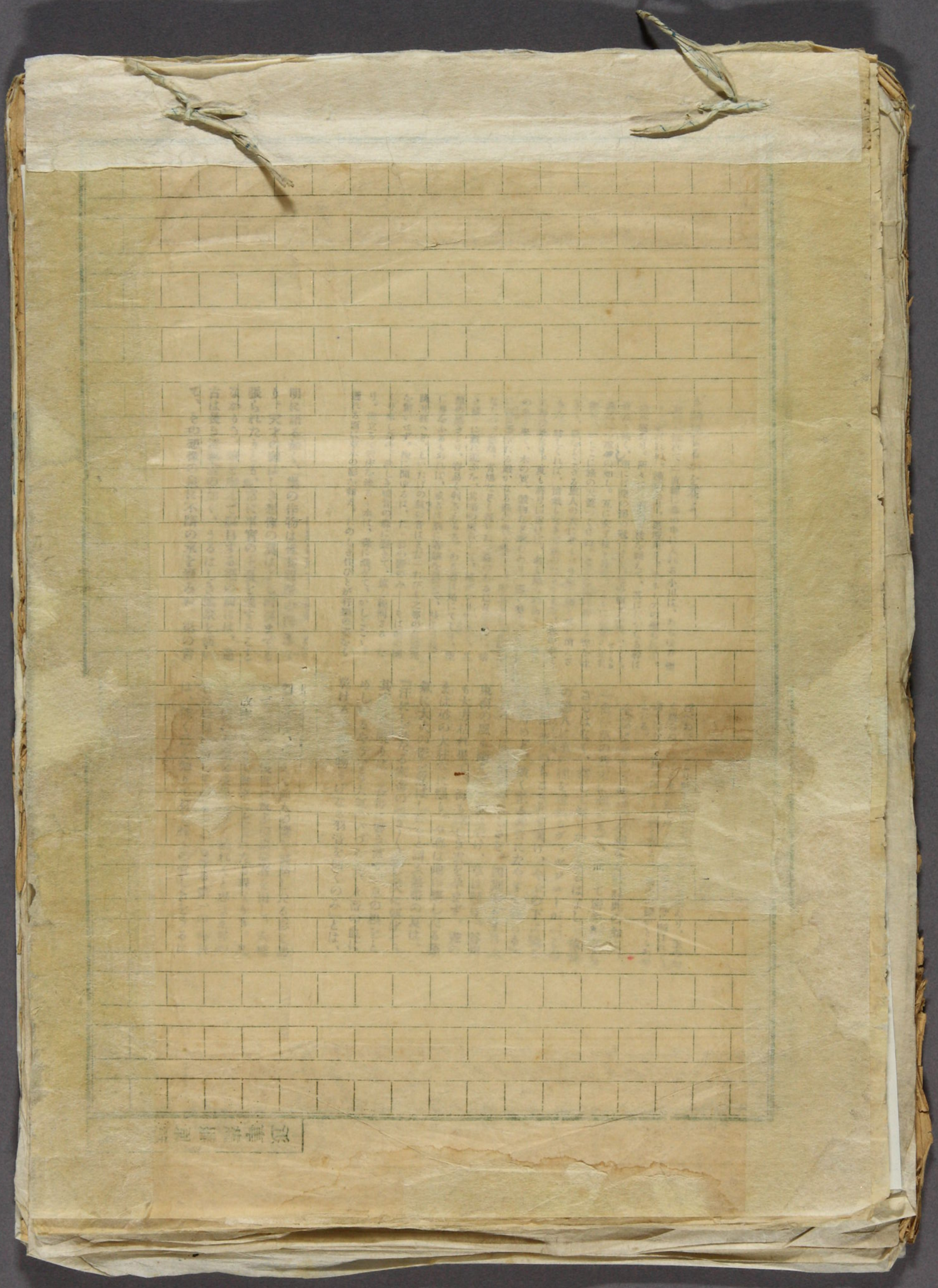
ひらぎて常に相往來せしもの、今この丘に住みの隣に住

ひて、相往來せしもの、今この丘に住みの隣に住

ひて、相往來せしもの、今この丘に住みの隣に住

ひて、

所を蔑すに於て餘蘊なく、短所に容かなること此作の如きは希なり。著者の性格と作物の内容とは全く渾然として一致し、人雅客をして欽羨に堪えざらしむる所なるべし。我はこのごとき汽紙に於て、多大なる企を起したりと雖も、かくまでに調和し、永く後の世の顧みるはこれに止まるべしと思ふ。

南洋、人氣なき深林のたゞずまひのいかばかれぬ。ダムの樂園はこゝだとまでに疑はれぬ。

牧場のなか、山毛欅の陰、岩が根、さては羅馬の樹蔭に逍遙を指ゝ思ふ。我は海へ、川のほとり、ローマ、バナ、ヒヤ、シヤンの陰に逍遙の繼人を指ゝ思ふ。我はこのごとき汽紙に於て、雖讀なる言葉のもとに、著者の抱負は洩されたり。『我等の著者は長き年月、小川のほとり、山毛欅の樹蔭に逍遙を指ゝ思ふ。我は海へ、岩が根、さては羅馬の繼人を指ゝ思ふ。我はこのごとき汽紙に於て、雖讀なる言葉のもとに、著者の抱負は洩されたり。』